

2013年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ報告論文集

＜京都エラスムス計画＞から生まれたもの

福谷彬 中山大将 巫靚 編



2013年度 京都大学南京大学社会学人類学 若手ワークショップ報告論文集

～＜京都エラスムス計画＞から生まれたもの～

2013年度南京大学京都大学社会学人類学研究生论坛报告书

The Proceeding of Kyoto University - Nanjing University Sociology and Anthropology Workshop, 2013

Web公開版

网络公开版

for Web

福谷彬 中山大將 巫靚 編

京都大学アジア研究教育ユニット＜KUASU＞

2014年3月

本報告論文集について

本冊子は、2013年8月12日に京都大学大学院文学研究科で行われた、「2013年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ〜＜京都エラスムス計画＞から生まれたもの〜」の報告論文集である。

2010年の夏に京都エラスムス計画により、櫻田涼子、平井芽阿里、松谷実のり、中山大将、福谷彬ら6名が南京大学へ派遣され、2ヶ月間当地で中国語の学習と、巫靚（当時：南京大学外国語学部所属）を含む南京大学社会学院の院生との共同調査を行った。その成果は、『京都エラスムス計画 2010年度中国社会研究短期集中プログラム成果報告―南京市・江蘇省南部の都市と農村―』（2011年）にまとめられている。2011年の夏には再度京都エラスムス計画により、中山大将、櫻田涼子2名が南京大学へ派遣され、一ヶ月間の中国語学習と南京大学社会学院院生との共同調査を行ったほか、『京都大学・南京大学若手研究者共同フォーラム』を行った。京都大学からは中山、櫻田、両名が報告を行い、南京大学からは王華ら3名が報告を行い交流を行った。巫はこの際に通訳を担当した。この成果は、『京都エラスムス計画 2011年度中国社会研究短期集中プログラム成果報告―京都大学・南京大学若手研究者共同フォーラム報告論文集―』（2011年）にまとめられている。2012年は京都エラスムス計画による派遣はなかったものの、中山大将、櫻田涼子、平井芽阿里、福谷彬が計画を立て、2010年以来協力を得ている張玉林教授と提携し、再度ワークショップの開催を実現した。この成果も、『2012年度京都大学・南京大学社会学人類学若手研究者共同ワークショップ報告論文集』にまとめられている。

このように京都エラスムス計画から生まれた京大と南京大学の若手研究者交流は4年目を迎え、今回は京都大学アジア研究教育ユニットの支援を得て、南京大学の院生を招いての初の京大でのワークショップ開催となった。本ワークショップの特色の一つは、基本的に日本語と中国語という双方にとっての母語を使用言語としていることである。しかし、南京大側の参加者は誰ひとり日本語を解さないし、京大側の参加者の多くも中国語を解さない。このため、報告原稿の翻訳作業や当日の通訳などに膨大な時間と労力を割いた。とりわけ、通訳を務めてくれた中国人留学生院生には大きな負担をかけた。しかし、その甲斐もあって本報告書には日中両語訳の報告論文を収めることができた。さらに、報告論文集のために当日のコメントを反映して書き直してくれた参加者もあり、改めて報告書を刊行する意義が深まりうれしい限りである。

中国研究者、日本研究者だけでなく、東南アジア研究者、東欧研究者まで巻き込みながら、アジア言語での国際学術交流が図られている場はなかなかないであろう。英語中心のアジア国際学術交流の場は近年多いが、本ワークショップでは、自分の母語で考え、アジアの言語で分かち合うことを目指した。もちろん、本報告書を見ればわかるように英語報告も含まれており、決して英語を排斥しようというわけではない。重要なことは、国際学術交流における「多様性」である。東アジア交流数千年の歴史を思い返し、その上にこのワークショップを接ぎ足したいのである。

京都エラスムス計画の南京派遣で参加者が感じた、分野やフィールド、そして国籍を越えた交流は、同計画が幕を閉じて、いまだなお熱を持ち続けている。ぜひ、本報告書に目を通し、「京都エラスムス計画から生まれたもの」の一端を知っていただきたい。

福谷彬 中山大将 巫靚
2013年12月1日

关于报告书

本报告书为 2013 年 8 月 12 日于京都大学文学研究科举行的“2013 年度京都大学南京大学社会学人类学青年学者论坛～由‘京都伊拉斯谟计划’应运而生的学术交流～”活动的报告论文集。

2010 年夏中山大将、樱田凉子、平井芽阿里、福谷彬等六名日本年轻学者通过“京都伊拉斯谟计划”被派往南京大学进行汉语进修，并与李德营、巫靓（当时南京大学外国语学院硕士研究生）等南京大学的学生进行了共同调查。其成果为《京都伊拉斯谟计划 2010 年度中国社会研究短期集中项目报告书：江苏省南京的城乡》（2011 年）。

2011 年夏中山大将、樱田凉子再次通过“京都伊拉斯谟计划”被派往南京大学。这一年除了进修汉语、共同调查外，还在南京大学举行了“南京大学京都大学社会学人类学博士论坛”。京大的中山、樱田以及南大的王华等三名博士研究生进行了报告，并将成果编纂为《京都伊拉斯谟计划 2011 年度中国社会研究短期集中项目报告书：南京大学—京都大学社会学人类学博士论坛》（2011 年）。

2012 年虽没有人被派往南京大学，但有志者与一直协助“京都伊拉斯谟南京派遣计划”的张玉林教授进行协商，再度实现了学术交流的机会，并将成果编纂为《2012 年度京都大学南京大学社会学人类学青年学者论坛报告论文集》。

就这样，由“京都伊拉斯谟计划”所应运而生的京都大学与南京大学青年学者的学术交流迎来了第 4 个年头。今年在京都大学亚洲研究教育机构（KYOTO UNIVERSITY ASIAN STUDIES UNIT）的资金资助下，我们得以邀请到南京大学的硕士及博士研究生到京都大学来进行交流。作为本论坛的特色之一，我们允许参加论坛的诸位报告者使用自己的母语进行发言，但由于南京大学的诸位参加者不懂日语，而京都大学的参加者也大多不会中文，因此在对发言稿进行事前翻译以及论坛当天的现场翻译部分我们花费了很大精力。这其中，特别要感谢当天为我们进行现场翻译的京都大学的中国留学生们。但正因此，我们有幸能将所有报告的中日两种语言的版本都收录其中。并且参与本次论坛的发言者中，有的同学论坛之后结合现场的提问，对发言稿进行了重新修改，为此我们更深感论文集发行的价值所在。

今年的论坛不仅汇聚了中国和日本研究的年轻学者，在报告的点评部分，我们还有幸邀请到东南亚、东欧研究者的参与。近年以英语为主要使用语言的亚洲国际学术交流活动较多，然而本论坛的主旨则是通过自己的母语思考，利用亚洲的语言进行相互理解。这在目前的亚洲国际学术交流活动中堪称少数。当然，在这里我们并不是排斥英语的使用，报告书中也有用英语书写的论文，但重要的是我们希望通过我们的论坛实现国际学术交流的“多样性”，以此继承东亚数千年交流的历史。

虽然“京都伊拉斯谟南京派遣计划”已经结束，但通过参与这一活动，年轻学者们所感受到的，超越自己学术领域、调查地以及国界的交流却依旧被进行着。我们也希望大家能够能够通过阅读本报告书，对“由‘京都伊拉斯谟计划’应运而生的学术交流”有一定了解。

福谷彬 中山大将 巫靓
2013 年 12 月 1 日

**2013年度
京都大学南京大学社会学人類学
若手ワークショップ報告論文集**

2013年度京都大学南京大学
社会学人類学研究生論壇報告書

The Proceeding of Nanjing University - Kyoto University Sociology and Anthropology Workshop, 2013

本論文集について 关于報告書

福谷林（京都大学文学研究科中国哲学史研究室博士後期課程）

中山大將（北海道大学スラブ研究センター・日本学術振興会特別研究員PD）

巫靚（京都大学大学院人間・環境科学研究科） 1

< 日本語・英語論文 >

想像の共同体としての中華帝国—儒教思想の展開の観点から

福谷林（京都大学文学研究科中国哲学史研究室博士後期課程） 9

人格化する国家と国家化する感動—< 感動中国 > の中の意識形態と日常実践

馬嵐（南京大学社会学院人類学専攻博士課程） 14

残留日本人とは誰か—北東アジアにおける境界と家族

中山大將（北海道大学スラブ研究センター・日本学術振興会特別研究員PD） 22

**How political capital contributes to a stratified rural China:
based on investigation in Z village, Anhui province, PRC**

柴尙南（南京大学社会学院社会学専攻修士課程） 28

温州龍船と地方社会変遷の民族誌研究

吳天躍（南京大学社会学院人類学専攻修士課程〔現在中央美術学院文化遺産専攻博士課程在学〕） .. 44

**Emerging Chinese Public Sphere in Multi-ethnic Malaysia:
A Case Study of Hungry Ghost Festival and Philanthropic Activities**

櫻田涼子（育英短期大学講師） 53

毛沢東時代における労働者の婚姻—洛陽の工場労働者の研究

方莉琳（南京大学社会学院社会学専攻修士課程） 58

個人的な移住における移住先選択要因—南京在住日本人を事例に

松谷実のり（京都大学文学研究科社会学研究室博士後期課程） 68

誰がより多くのリスクを負うのか？—社会経済的地位と環境リスク配分の差異

聶偉（南京大学社会学院社会学専攻博士課程） 75

（中日訳：中山大將・巫靚）

< 中文论文 >

作为“想像的共同体”的中华帝国

福谷彬 FUKUTANI Akira (京都大学文学研究科中国哲学史研究室博士研究生) 89

人格化的国家和国家化的感动：《感动中国》中意识形态的日常化实践

马岚 MA Lan (南京大学社会学院人类学研究所博士研究生，江苏省社会科学院助理研究员) 93

残留日本人是谁：东北亚的边境与家庭

中山大将 NAKAYAMA Taisho (北海道大学 SRC・JSPS 特別研究員) 99

温州龙船与地方社会变迁的民族志研究

吴天跃 WU Tianyue (南京大学社会学院人类学研究所博士研究生) 104

毛泽东时代的工人婚姻：基于洛阳工厂工人的研究

方莉琳 FANG Lilin (南京大学社会学院社会学系硕士研究生) 111

个人的跨国流动与迁移地选择的关系：以在南京的日本人为例

松谷实 MATSUTANI Minori (京都大学文学研究科社会学研究室博士研究生) 119

谁承担更多的风险？：社会经济地位差异与环境风险分配

聂伟 NIE Wei (南京大学社会学院社会学系博士研究生) 125

報告要旨 134

摘要 139

ワークショップを終えて 结语

福谷彬 (京都大学文学研究科中国哲学史研究室博士後期課程) 142

感想 感想

柴向南 (南京大学社会学院社会学専攻修士課程) 146

謝辞 谢词

福谷彬 (京都大学文学研究科中国哲学史研究室博士後期課程)

中山大将 (北海道大学スラブ研究センター・日本学術振興会特別研究員PD)

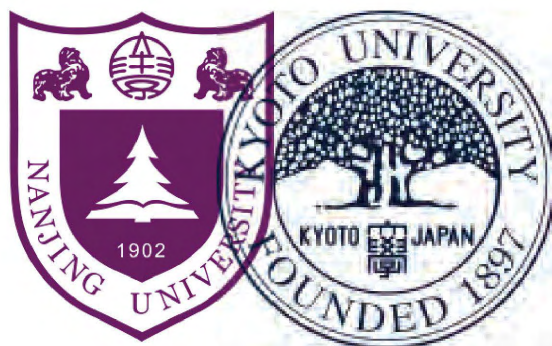
巫靚 (京都大学大学院人間・環境科学研究科) 150

執筆者・司会・コメンテーター・通訳 执笔者、主持人、点评人、口译 152

2013 年度京都大学南京大学 社会学人類学若手ワークショップ

～＜京都エラスムス計画＞から生まれたもの～

8月12日（月）12：30 開場 13：00 開会 京都大学本部キャンパス文学部校舎（新館）2階第7講義室
京都大学アジア研究教育ユニット＜KUASU＞主催



第1部（13：00～14：50）—国家と個人—

司会 巫靚（京都大学人間・環境学研究科修士課程/南京大学外国語学院修士課程卒業）

挨拶・趣旨説明 平田昌司（京都大学文学研究科中国語学・中国文学講座教授）

福谷彬（京都大学文学研究科中国哲学史研究室博士後期課程）

想像の共同体としての中華帝国—儒教思想の展開の観点から—

馬嵐（南京大学社会学院人類学専攻博士課程）

人格化する国家と国家化する感動—＜感動中国＞の中の意識形態と日常実践

中山大將（北海道大学スラブ研究センター・JSPS 特別研究員／元・京都大学文学研究科 GCOE 研究員）

残留日本人とは誰か—北東アジアにおける境界と家族

柴向南（南京大学社会学院社会学専攻修士課程）

**How political capital contributes to a stratified rural China
:based on investigation in 2 village, Anhui province, PRC**

コメント：福田宏（京都大学地域研究統合情報センター助教）

阿部友香（京都大学大学院文学研究科・博士後期課程）

質疑応答

第2部（15：30～18：00）—社会と個人—

吳天躍（南京大学社会学院人類学専攻修士課程[中央美術学院文化遺産専攻博士課程入学予定]）

温州龍船と地方社会変遷の民族誌研究

櫻田涼子（育成短期大学講師／元・京都大学文学研究科 GCOE 研究員）

多民族国家マレーシアにおける華人的公共領域の誕生

—孟蘭勝会と慈善活動の事例から

(Emerging Chinese Public Sphere in Multi-ethnic Malaysia: A Case Study of Hungry Ghost Festival and Philanthropic Activities)

方莉琳（南京大学社会学院社会学専攻修士課程）

毛沢東時代における労働者の婚姻

松谷実のり（京都大学文学研究科社会学研究室博士後期課程）

個人的移民の移住先選択要因—上海と南京の比較から

聶偉（南京大学社会学院社会学専攻博士課程）

社会経済的地位と環境リスク配分の差異

—廈門（アモイ）の廃棄物処理に関する実証的研究に基づいて

コメント：猪股祐介（京都大学アジア研究教育ユニット研究員／元・京都大学文学研究科 GCOE 研究員）

今中崇文（国立民族学博物館・外来研究員）

瀬戸徐映里奈（京都大学大学院農学研究科・博士後期課程）

質疑応答

総合討論

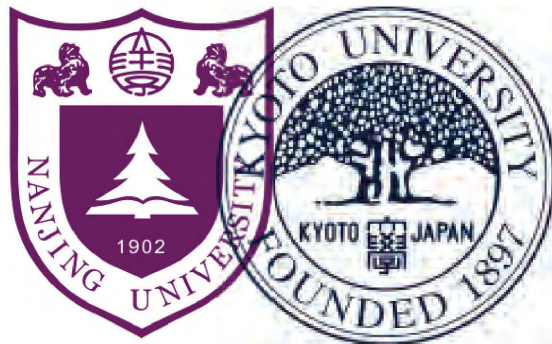
総評 落合恵美子（京都大学文学研究科社会学専修教授）

通訳：林子博（京都大学大学院教育研究科博士課程）、姜海日（京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程）

張語涵（京都大学大学院教育研究科修士課程）

2013 年度京都大学南京大学 社会学人類学研究生論壇

8月12日 12:30 開幕 13:00 開會 京都大学本部校区文学部校舍（新館）2 楼第 7 講義室
京都大学 KUASU 主催



第 1 部（13:00～14:50）—國家與個人

主持人：巫靚（京都大学人間環境学研究科修士課程／南京大学外国語学院碩士卒業）

挨拶・趣旨説明 平田昌司（京都大学文学研究科中国語学・中国文学講座教授）

福谷彬 FUKUTANI Akira（京都大学文学研究科中国哲学史研究室博士後期課程）

作為“想像的共同体”的中華帝國

馬嵐 MA Lan（南京大学社会学院人類学專攻博士課程）

人格化的國家和國家化的感動

中山大將 NAKAYAMA Taisho（北海道大学 SRC・JSPS 特別研究員／原・京都大学文学研究科 GCOE 研究員）

残留日本人是誰：東北亞的邊境與家庭

柴向楠 CHAI Xiangnan（南京大学社会学院社会学專攻修士課程）

*How political capital contributes to a stratified rural China
:based on investigation in Z village, Anhui province, PRC*

点評人：福田宏 FUKUDA Hiroshi（京都大学地域研究統合情報中心助教）

阿部友香 ABE Yuka（京都大学大学院文学研究科・博士後期課程）

質疑応答

第 2 部（15:30～18:00）—社会與個人

吳天躍 WU Tianyue（南京大学社会学院人類学專攻修士課程[中央美術学院文化遺產專攻博士課程入学予定]）

温州龍船與地方社会變遷的民族誌研究

櫻田涼子 SAKURADA Ryoko（育英短期大学講師／原・京都大学文学研究科 GCOE 研究員）

*Emerging Chinese Public Sphere in Multi-ethnic Malaysia
: A Case Study of Hungry Ghost Festival and Philanthropic Activities*

方莉琳 FANG Lili（南京大学社会学院社会学專攻修士課程）

毛澤東時代的工人婚姻

松谷実 MATSUTANI Minorie（京都大学文学研究科社会学研究室博士後期課程）

个体移民的移居地選択原因：上海與南京的比較研究

聶偉 NIE Wei（南京大学社会学院社会学專攻博士課程）

誰承擔更多的風險？：社会經濟地位差異與環境風險分配

点評人：猪股祐介 INOMATA Yusuke（京都大学 KUASU 研究員／原・京都大学文学研究科 GCOE 研究員）

今中崇文 IMANAKA Takafumi（国立民族学博物館・外来研究員）

瀬戸徐映里奈 SETO SO Erina（京都大学大学院農学研究科・博士後期課程）

質疑応答

総合討論

総評 落合恵美子（京都大学文学研究科社会学專修教授）

翻訳：林子博（京都大学大学院教育研究科博士課程）、姜海日（京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程）
張語涵（京都大学大学院教育研究科修士課程）

日本語・英語論文



平田昌司 今中崇文 林子博 轟偉 吳天躍 猪股祐介 福田宏
姜海日 福谷彬 柴向南 櫻田涼子 阿部友香 瀬戸徐映里奈 陳佑真
中山大將 張語涵 馬嵐 方莉琳
落合恵美子 山崎典子 巫靚 松谷実のり (敬称略)

2013年8月12日
ワークショップ記念写真と討論の様子
论坛纪念照片以及现场讨论的情景



想像の共同体としての中華帝国
— 儒教思想の展開の観点から —
福谷彬*

はじめに

「想像の共同体」(imagined communities) とは、中国生まれのイギリス人の政治学者ベネディクト・アンダーソン (Benedict Richard O'Gorman Anderson, 1936～) が、その主著『想像の共同体』(1983) の中で、ナショナリズムの歴史的起原を説明する際に用いた概念である。本発表は、この「イマジンド・コミュニティ」論を中国研究においてどのように活かすことができるか、その射程を検討することである。

具体的には、ナショナリズム発生以前の中国の伝統的な世界観を、平岡武夫 (1909～1995) が『経書の成立』(1946) において提唱した「天下の世界」論に求め、「想像の共同体」論と比較し、更にこの儒教的世界観を発展させた思想家として日本の浅見綱齋を取り上げ、儒教が持つ世界観の特徴とその現代的可能性を論じたい。本稿が特に綱齋の説を挙げるのは、綱齋の主張にナショナリズムを超える論理が含まれると考えるからである。

1. 『想像の共同体』について

最初に結論を示すと、もともと経書に発する「天下の世界」を理念としたものであった伝統的な中華帝国は、アヘン戦争以来の経過で清末民初に「イマジンド・コミュニティ」に変貌を遂げた、ということである。これがすなわち中国におけるナショナリズムの発生である。そしてその後の「ネーション・ビルディング nation building」においては、ベネディクト・アンダーソンが唱える「イマジンド・コミュニティ」成立のための論理が中国でも存分に駆使されているものと思う。

たとえば清末の儒者の劉師培 (1884～1919) は「黄帝紀年論」を発表し、清朝の元号を用いず、かわりに黄帝紀元というものをを用いることを主張したが、これは中国人は皆、黄帝の子孫だという観念に基づいて、「中国」という国家を「想像」しようとしたものであったと言える。これは19世紀に世界各地で起こったナショナリズムと軌を一にするものであり、アンダーソンの「イマジンド・コミュニティ」論はたしかに中国近代においても適用されうるものと考えられる。

しかし中国は、「イマジンド・コミュニティ」の成立以前に、独特な伝統的世界観を持っており、その点で近代にイマジンド・コミュニティに基づくナショナリズムが勃興したことは、ほかの地域とは違った意味合いを持って来ると思われるのである。この点を論じる前に、まずアンダーソンの議論を整理しておきたい。

第2次世界大戦後に社会主義を標榜する諸国の間で多くの紛争が発生した。アンダーソンはこの想定外の事態を「想像の共同体」を論ずる上での出発点とした。アンダーソンは、これらの紛争は、紛争当事者が主張するようなマルクス主義における経典 (canon) と教義 (dogm

* 京都大学文学部中国哲学史研究室博士二回生。

a) をめぐる、正統 (orthodoxy) と修正主義 (revisionism)、あるいは異端 (heresy) との争いではなく、それぞれの国における民族主義 (nationalism) によって引き起こされたものに他ならない、と考えた。

本来社会主義はインターナショナルなものであり、民族主義を超越すべきもののはずである。そうであるのに民族主義によって社会主義が歪曲されたのはなぜか、というのがアンダーソンの設定した問題意識である。しかも、しばしば指摘されることであるが、その際の民族やネーションという概念は、もともとあったものというよりは民族主義によって作り出されたものとしての側面が強い。アンダーソンはヨーロッパや東南アジア、中南米のさまざまな地域における多くの事例を引証しながらこの点を強調する。そして彼は以下のように論証した。

つまり、ナショナリズムがこれほど大きな力を持ち得た理由は、まさに民族とネーションとといったものは、歴史的に基礎付けされたものではなく、いわば作り出された「観念」に他ならないからである、と考えた。民族主義が社会主義のインターナショナリズムを歪曲させるほどの力を持ち得たのは、それがまさに「想像」された「観念」であり、「観念」として制度化されて再生産され続けるからだ、とアンダーソンは考えた。これが「イマジンド・コミュニティ」論の核心である。

ところがナショナリズムの原理は「内外」の峻別であって、元来、排他的な面を持つ。ここに本来インターナショナルな社会主義との間で争いが生ずる。ヨーロッパの一部の国を除くと、社会主義はいわゆる帝国主義に対する闘争を通じて発展したから、社会主義はその点において、ナショナリズムとしての側面を帯びざるを得ない。中国も例外ではなく、列強の帝国主義的侵略に対して、「中国人」という一つの民族としての観念が生まれた。これは民国への移行に際しても強力な理念となったが、これは「想像の共同体」としての「中国」が大きな力を発揮したものと言える。この点でアンダーソンの議論は有効であると思われる。それでは次に、ナショナリズム勃興以前の伝統的な儒教的世界観である「天下的世界観」について考察したい。

2, 平岡武夫の「天下的世界観」について

京都帝国大学文学部出身の中国哲学研究者、平岡武夫 (1909~1995) は『経書の成立』(1946) において、『尚書』の思想的考察を通じて、これを中国の伝統的経書世界の世界観がいかなるものであるかを分析した。そして、周書の五誥 (大誥・康誥・酒誥・召誥・洛誥) が尚書全体の中でも最も早い成立になるものであって、一致した世界観が現れていると考え、その世界観を「天下的世界観」と名付けた。

平岡氏の指摘の中で、重要な点は、中国思想における「天」の概念は殷周革命を契機に成立したものである、ということである。平岡氏は殷代の物と推定される甲骨文字や金文の分析を通じて、殷においては、正統性の根拠は「先王」にあるのであって、「天」にはなく、「先王」はひたすら同氏族の「後王」に加護を加えるものと考えられていた、と論じた。また、このような考え方の中で、王と他氏族との関係は、征服と被征服の関係しか存立し得なかった、とした。

一方、周代においては、大誥篇に、「天惟喪殷」ともあるように、殷を滅ぼしたのは「天」である、とし、王朝の正統性の根拠を「天」に求める。また同じ大誥篇に、

矧今天降戾于周邦、惟大艱人。

矧んや今天を周の邦に降し、惟れ大いに人を艱ましむ。

とあり、「天」は周に恩恵だけをもたらすのではなく、災禍をもたらすのとしている。つまり、「天」が無道の殷を滅ぼしたのと同様に、周も道を外れれば、「天」に滅ぼされる、と考えられているのである。また、『尚書』泰誓中に、

天視自我民視。天聽自我民聽。

天の視ること我が民より視る。天の聴くこと我が民より聴く。

とあるように、絶対的な「天」は、周の民と一体的に捉えられている。つまり、周王朝の正統性の根拠は「天命」にあるが、「天命」の去就は、王の「民意」の獲得の如何にかかっているとされるのである。

ここで殷の場合と比較すれば、殷においては、絶対的な殷の氏族による他氏族の支配という関係が成立していたのみであるのに対し、周王朝では、この「天」の意識を基づく、超氏族的意識があり、民衆は同じこの「天」という観念によって統合されるに至った、と考えられるのである。また、『詩経』小雅 北山の詩が、

溥天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣。

溥天の下、王土に非ざる莫く、率土の濱、王臣に非ざる莫し。

と言うように、天下の国土、人民は全て周王に帰属する、と考えられる。しかしこれは王の元での平等が保証されていることを示すものではない。春秋時代初期の魯の僖公時代（前659～前627）の作とされる『詩経』魯頌 閟宮の詩には「戎狄是膺、荊舒是懲。」とある。このように、「夷狄」は「中華」によって征服され、教化を施される対象として記述されている。しかし、この華夷の別は絶対的なものではない。『孟子』離婁下には以下のように言う。

孟子曰、舜生於諸馮、遷於負夏、卒於鳴條、東夷之人也。文王生於岐周、卒於畢郢、西夷之人也。地之相去也、千有餘里。世之相後也、千有餘歲。得志行乎中國、若合符節。先聖後聖、其揆一也。

孟子曰く、舜は諸馮に生まれ、負夏に遷り、鳴條に卒う。東夷の人なり。文王は岐周に生まれ、畢郢に卒う。西夷の人なり。地の相去ること、千有餘里、世の相後れたること、千有餘歳。志を得て中國に行くことは、符節を合わせるが若し。先聖後聖、其れ揆ること一なり、と。

聖王の典型とされる、舜や文王が夷狄の出身であると明記されており、夷狄から中華へという変化が認めれているのである。この論理は中国の歴史においては、以下のような例に、その現実的効用を確認することができる。

清の雍正帝（1722～1735）は『大義覺迷録』の中で、攘夷を主張し排満主義を唱える儒者曾静に對して、以下のように言った。

不知本朝之為滿洲、猶中国之有籍貫。舜為東夷之人、文王為西夷之人、曾何損于聖德乎。詩言戎狄是膺、荊舒是懲者、以其僭王猾夏、不知君臣之大義、故声其罪而懲艾之、非以其為戎狄而外之也。若以戎狄而言、則孔子周游、不當至楚應昭王之聘。而秦穆之霸西戎、孔子刪定之時、不應以其誓列于周書之後矣。

本朝の滿洲為るは猶お中国之の籍貫有るがごときを知らず。舜は東夷の人為り、文王は西夷の人為り、曾つて何ぞ聖德において損わんや。詩に戎狄是膺、荊舒是懲と言ふ者、以其の王を僭み夏を猾、君臣の大義を知らざるを以てなり、故に其の罪を声にし而る

に之を懲艾す。其の戎狄為るを以て之を非するに非ざるなり。若し戎狄を以て言へば、則ち孔子周游して、當に楚に至りて昭王の聘に應ずべからず。而秦穆の西戎に霸たる、孔子刪定の時、應に其の誓を以て周書の後に列するべからざるなり。

このように、雍正帝は満州族を「夷狄」として蔑視して排斥しようとする態度は儒教精神に反するということを論証した。このように儒教の天下的世界観は、中央と周辺の流れ性を認める論理として機能していた、と言える。

以上は、平岡武夫の『経書の成立』に見る、天下的世界観と、その歴史上の機能について考察したものである。そもそも天下的世界観の成立は、殷周革命期において周王朝が直面した絶対多数の他氏族の統治という問題を解決するものであった。また儒教では『尚書』を初めとする「經典」(canon)や、漢字という統一言語によって、民族を超える共同体を「想像」してきた歴史があり、この点で、近代の「想像の共同体」との共通点を見出すことも不可能ではない。

しかし、その世界に対する認識の仕方に大きな違いがあることについては注意せねばならない。天下的世界は民族主義のようも「内外」を問題にしない。むしろ「中心」と「周辺」によって世界を認識する、と平岡は指摘する。また、天下的世界観においては、中心としての中華は、周辺としての夷狄に比べ優位に位置するものとされるが、その関係は飽くまで流動的で、夷狄も中華になりうるものとされている。

「想像の共同体」は自国と他国を「内外」で峻別する論理であるのに対し、天下的世界観では、中心と周辺という区別によって連続的に捉えようとする論理ということができる。この点で、天下的世界観は本来排他的ではなく、包容的な性格を持っているということができる。「想像の共同体」はその内外原理に基づいて、「外」の駆逐と「内」への一元化を目指すために諸々の対立を生み出すのに反し、(日本の「尊王攘夷」思想やその典型。)天下的世界は単に包容的であるだけでなく、多元的たり得る可能性を持っていたものと言える。ナショナリズムによって克服されたものとしてのみ天下的世界を捉えるべきではない。世界を多元的に捉える世界観として、天下的世界観のほうに見出されるものと思われる。ここで、この儒教の天下的世界観を軸に、多元的な世界を構想した儒者として浅見綱齋を取り上げたい。

3、浅見綱齋の華夷説について

浅見綱齋(1652～1712)は、日本朱子学の中でも最も厳格な学派である山崎闇斎(1619－1682)の門下で、主に京都で活躍した。山崎闇斎の学派で問題となったことの一つは、日本人が中国の教えである儒教を信仰するということは、中国への臣従することを意味するのではないか、ということだった。

この問題に対して、浅見綱齋は『中国弁』において、そもそも「中国」や「中華」とは何なのか、と改めて問題にし、以下の四点の観点からそれぞれ考察した。つまり、民族・地域・国力・文化の四点から「中国」というものを考えるが、どの観点で「中国」のことを説明しても結局矛盾が残る、と主張した。具体的には以下のように考えた。

もし中華が民族の名であれば、舜や文王は夷狄の出身であったが、今は中華の主とされることの説明がつかない。地域であるとすれば、『尚書』の淮夷狄徐戎の地は九州の内にあっても夷狄とされることと矛盾する。国力が最も強い王朝のことであるとしたら、春秋において周が中華とされ、呉楚が夷狄とされることが説明できない。更に興味深いのは、最後

の文化という観点にも浅見綱齋は疑問を持つことである。中国にも歴史上多くの無道の皇帝や乱臣賊子が存在するが、それにも関わらず中華は中華であるとされるではないか、と考える。それでは、「中華」と「夷狄」とは何なのか。

浅見綱齋は「華夷」とは「自他」の違いに他ならない、と結論付ける。つまり、唐に生まれた者にとっては、唐が「中国」なのであり、日本に生まれたものにとっては、日本が「中国」なのであり、またそのように考えることが、「孔孟の道」に他ならない、と考えた。それ故同じ儒教を信奉する国同士は、互いの立場を尊重し合って、濫りに攻め入るべきではない、と考えた。

「中華」という概念は、民族・地域・国力・文化いずれの概念によっても整合的に説明できない。これはそもそも、天下的世界観が、他氏族や夷狄という異質で雑多な集団を包摂する理論として発展してきた背景を持つためである。綱齋はこの「中華」の概念の包容力を、多元的な世界の在り方を許容するものとして捉え直したものと言える。経典と教義をめぐる、正統と修正という対立は中心の奪い合いであって、結局内外の峻別において内で外を塗りつぶすという発想である。綱齋の説はカノンとドグマそのものの解釈をめぐる提出されているのではなく、むしろメタ・レベルで建てられていることが重要だ。平岡武夫の天下的世界観はもっぱら経書に内在的に構成されたものであるが、浅見綱齋の論点を取り入れて補強することにより、その潜在性を引き出すことができるものと思われる。「中心周辺」原理の世界は中心と周辺との逆転を許容するのである。ただし中心が周辺になるのではなく中心が多元的にありうると考えられている点に注意しなければならない。

結論

言語と経典の共有によって、共同体を想像しようとする点において、天下的世界観と「想像の共同体」とは、同様の特徴があるものと思われる。しかし、両者には大きな違いがあるのであり、それは、天下的世界観には「内外」が無く、「中心」と「周辺」というように、連続的に世界を認識しているのに対し、「想像の共同体」は内外の峻別を目的とするものである、ということである。

清末民初においてイマジンド・コミュニティによって取って代わられた天下的世界観は排他的なナショナリズムに比して、かえって多元性をもちうる原理であった。これは清末民初における世界観上の構造的な変化として歴史的にも実証されねばならないものと思う。

人格化する国家と国家化する感動

— 『感動中国』の中の意識形態と日常実践—

馬嵐 (MA Lan, ま・らん) *

ポスト近代において、多元化、グローバル化の荒波の中で、人々が面する外部環境と内面世界とは非常に複雑化し、このような境遇においていかに失われた精神的拠り所を求めるか、いかに基本的な価値体系を新たに打ち立て、いかに民族や国家への帰属感とアイデンティティを育て強固なものにするのかは、極めて切迫かつ重要なことであるように見える。時代の変化に伴って、国家意識形態の表現の道筋や言説もまた変化しており、上からの説教と重要理論についての説明は、すでに民衆の実践参加動員には十分に有効ではない。旗を振ったり太鼓を打ち鳴らしたり、理論や路線を振りかざす厳しい批判も、より柔軟で迂遠な方法へと日々とって代わられ、国家も表舞台から幕の裏へと「隠退」してしまっている。

現代社会において、マスメディア、特にテレビは国家イデオロギーと族群文化を創り出す重任を担っている(李朝陽、2010)。国家は常にこの中立的に見える媒体を通して、自分の意思を表し、民心を獲得し、権力の存在と運用に正当性を与え、さらに、その土台を固める。とりわけ、いまはやりの儀式やセレモニーなどの形式を利用して、テレビ番組で式典を放映する。それはマスメディアと社会生活とを更に深く関らせ、今までのマスメディアにおいてイデオロギーを国家が直接的に主導するというイメージを変化させた。また同時に、国家イデオロギーの伝播ルーツを増やし、伝播の効率性を向上させてきた。本報告は、2002年にCCTV(中国の国営テレビ局)が製作した番組『感動中国』を実践例として、その中の言語表現実践や、意味の生産モデルおよび社会的アイデンティティの構造を読み解き、民族国家[†]がいかに式典の形式を利用・媒介にして人々の価値観を形作るかを示し、現代国家政権の新時代における宣伝方法と教化の道筋を明らかにする。

一、政治儀礼の中の国家の言説

「あなたはすでに長いこと感動させられていないのか？ある人が言うには、長い間感動させられていない心は、長い間水を得てない花のようなものだ。」これは2002年第一期『感動中国』の前口上である。当時中国のもっとも主流のマスメディアはこうした「主旋律」の中で、新たな受賞式の番組を始めた。この始まりの表現の中には次のような認識が含まれている。すなわち、感動とは完全な人格や美しい心に欠かせないものであり、日々失われてしまう貴重なものであるという認識である。これは予め「逸脱状態」の個人と社会—認知の離散、道徳の欠損、核心的価値体系の断片化—を想定している。感動ができず、感動もさせられづらい社会状況の中では、人々を感動させ、人々をどういうわけか感動するように形作り、その上「感動」を核心として普適性価値体系を構築する。「感動」というものはもともとときわめて個人的な体験である。司会者が番組の中で挙げた十歳の少女の「ある日の放課後、

* 1983年生まれ、女性。南京大学社会学院博士課程、江蘇省社会科学院助理研究員。

[†] 日本では nation state などの訳語として「国民国家」が一般化している一方で、national state に「国民国家」という訳語をあて、nation state には「民族国家」という訳語をあてる場合も見られる。原文で「民族国家」という表記をしていることと、中国政府が「中華民族」という概念によって民族概念と国民概念を重ね合わせようと試みていることから、「国民国家」とは訳さずに「民族国家」のままとした。

普段より授業が一時間延びただけで、学校を出たら、おじいちゃんが寒い風の中ずっと待っていて、それを見たら涙が出てきた」という類のものである。しかし、大衆的メディアが構築する公共の時空の助けを借りて、このような個人的感情は「共同の場」が実現されるので、外部から形成される可能性を備えるのである。

『感動中国』は終始一貫して儀式行為と儀式言語を用い、形式的構造においても完全な儀式性の特徴や儀式の存在と運用、往々にしてシンボルや記号と政治権力との不可分の関係性が見られる（陳蘊倩、2008）。ギアツ(Clifford Geertz)の言う通り、シンボル、式典と国家的な劇の形式は政治の現実化の一つの方法で、権力願望の実現の過程の中に用いる動員手段である(ギアツ、1999)。したがって、メディアの式典はまた「政治儀式」あるいは「国家儀式」となることができ、国家の表象となる。『感動中国』はまさにこうした国家表象の政治儀式で、政治的な意義、価値観及び社会感情の通達が目的で、さらに理想の国民を作り上げようと図るのである。これは民族国家の力が社会に浸透するための重要な方法である。

1. 儀式の時間：『感動中国』の放送される時間は大体、初十（旧暦の1月10日）前後である。時期の選択にもそれなりの意味がある。春節祝いと休日が終わったばかりで、人々が再び仕事に戻り、すべてが日常に戻る時期である。この時期において、昨年の重大事件を整理し、模範的人物を表彰することは、過去についての総括であると同時に、人々の新しい一年の思想と行動の方法のために指標を樹立して、その感動を新しい一年の仕事の中に持ち込むことである。元旦（新暦の新年）ではなく春節（旧暦の新年、中国では正月休み）期間が選ばれるのは、中国人にとって、春節に付随する文化的意味は元旦よりもはるかに大きく、人々は旧暦新年をますます生活上の出来事や記憶・言説の時期とみなす傾向にあるからである。これが大衆メディアを通して現われる政治儀式が人々の日常生活との間に出来る限りの親和性を保持し、都合よく受け止められている。

2. 形式構造：『感動中国』はすでに固定的な規格化された表現構造を形成しており、儀式過程は四つの部分から成り立っている。すなわち、人物事跡の紹介、表彰を受けた人物の身辺の人間のコメント、顕彰の言葉、栄誉の授与である。VTRの数分の時間の中で充実した情報を提供しようとし、その重点は表彰される人物の功績と事跡を示すことと、観衆の頭の中にひとつの想像上の英雄像を構築することにある。そして、表彰者あるいは関連する人物の本人出演を行い、「想像の個人」と「イメージの同席」の重合を実現する。本人出演のパートでは、重点は事業功績から個人の努力を述べることに移り、表彰者の生活者としての一面が映し出される。引き続き、司会者が表彰の言葉を読み上げ、その人物の具体的な事柄を巨視的かつ精神的に高く掲げる。最後は表彰で、英雄的人物の最終的な「戴冠」を完成させる。

3. 国家言説：『感動中国』が公共性メディアとして出来事を報道する過程において、たとえその年度人物（番組で表彰される人）の選択においても、またその年度人物を「国家偶像」にする過程においても、国家言説がすべて中心的な役割を担っている。選出された人物や出来事は基本的に広大な叙事詩の範疇に属し、民族国家価値体系の中の核心に置かれるのであり、以下の種類に分類することが出来る。(1)優秀な共産党員の代表や、党の優れた幹部であり、清廉で人民への奉仕のために心血を注ぐ人物。(2)自分の職業や研究分野で際立って優れており、民族と国家のために栄誉を勝ち取った人物。(3)個人の力で社会の公平と正義を維持するために、また人類生存の環境を改善するために多大な貢献をした人物。(4)危険を顧

みず、他者を救い、利他主義的な精神を表した人物。その人物の身分において、専門の学者、経済人、政治家、軍人や警察官、スポーツや芸能スターは基本的な分類で、すでに固定化されたカテゴリーであり、彼らはみな民族国家のエリート層に属する。その年度のテーマにおいて、その年度ごとの幅広い影響力のあった重大事件やシンボリックな人物はみな当然のことながら選出される。例えば 2008 年度は、国家的な重大事件が比較的に多い年で、年度テーマは「南方氷雪災害」、「汶川地震」、「オリンピック「神舟 7 号」という四つの重大事件に偏り、11 人の年度人物の中 9 人はこの四つのテーマから選ばれた人物であり、81%の比率に達した。これまでの回の中で最も国家的なテーマにより表象される人物が選ばれた(莫繼巖、2012)。ゆえに、その年度人物の選択は、国家イメージの人格化過程なのである。ただし、いったん選定されると、人物イメージを国家に向けて記号化する努力がなされる。表彰される人物ごとの表彰の言葉には国家の記号により個人事跡と民族国家の関連性が注入あるいは直接的に表われた。例えば中央財經大学の研究員・劉姝威氏は「中国の株式市場を一日も早く正常な軌道に乗せることを主張し、中国経済の発展を促した」とされた。バスケット選手の姚明氏は「強豪の多い国家的なスポーツ分野で、自分のポジションを確立し、中国人の誇りになった」とされた。宇宙飛行士の楊利偉氏は「中華民族の宇宙進出の夢を背負って、中国の宇宙開発成功の一步を象徴した」とされた。香港の俳優ジャッキー・チェン氏は「国際の映画界で中国映画人の魅力をアピールし、世界が中国文化を理解するための窓を開いた」とされた。陸上競技選手の劉翔氏は「加速度的に発展している民族を象徴している」とされた。37 年間約束を守り続ける陳健氏は「一度取り交わした約束を墨守することは、人間の基盤を支えるもので、これは個人においても、また民族にとっても同じである」とされた。ブルーカラーで専門家の孔祥瑞氏は「150 項目の革新、国家に 8,000 万元の利益をもたらし、労働者の成功の模範である」とされた。また、中国原水爆の父・銭学森氏は「国家を重んじ、家を軽んず、中華民族知識人の模範である」とされた。これら表彰の言葉は個人の行為のために国家と民族の集団的価値を賦与することを通じて、ミクロな個人からマクロな局面への転換を完成させ、個人の特色を薄らげると同時に一種の集団的イメージを構築した。個人としての年度人物は社会的役割が凝縮された、国家イメージの人格化の結果である。表彰儀式は過去一年間の中国社会及び中国人に対する「集団戴冠」を行っているのである。このメディアの式典は実質的に国家がその場で有効的に行った政治儀式である。

4. 中心と周縁：儀式はその実施と同時に、事前にそれに参加する人々及びその影響を受ける人々の範囲を設定している。儀式の過程で、「我々」という認識を強化し、「自他」の境界を明瞭にし、求心力を増す。毎年、年明けに行われる中国の最主流のメディアを通じた政治儀式である『感動中国』は時間的空間的に人々の関心を集め、意味上の中心的な概念を構築した。同時に、中心もまた周縁を入れて、さらなる包摂性を示している。周縁とはすでに地理的な辺境を指す言葉として用いられているが、経済的文化的に劣勢な地区をも指し、それゆえに少数民族や山村も周縁と目されるものであり、毎年、年度人物においてもこれが体現されている。今までの年度人物には少数民族の人々も以下の通り含まれている。まず、地震で家族 5 人亡くなったにも関わらず、群衆を率いて救援活動を続ける新疆ウイグル自治区チョンクルチャク郷 6 大隊の村党支部書記ダウティ・アシム氏である。そして、同じく新疆ウイグル自治区の民族孤児の母、アリパ・アリマホン氏と、青海省玉樹チベット族自治州のカム地区の男性ツアイワー氏である。また、僻地社会に貢献したとされる物は以下の通り

である。貴州の山深く一人で支援教育を行っている大学生の徐本禹氏、重慶市北碚区柳蔭鎮の郷村医師周月華氏、艾起氏夫婦、四川省涼山イ（彝）族自治州馬班郵路[‡]の郵便配達員王順友氏、涼山イ族自治州懸崖小学校の支援教師李桂林氏、陸建芬夫婦、26 年間にわたり滇池の環境を自発的に守る張正祥氏、チベット自治区で 12 年間支援教育を行った胡忠氏、謝曉君氏夫婦、四川涼山ハンセン病患者が集まる村の教育事業に身を投じる台湾同胞張平宜氏、南沙諸島で 97 ヶ月歩哨に立つ軍人の李文波氏である。『感動中国』は国家のメディア・ツールの力を借りて時空の境界を打ち壊し、同じ時間に異なる空間に置かれている多様な身分的特性を有する成員を集合させ、少数民族や後進的地域を社会的中心であるエリート層と並べて提示し、一方では民族国家の境界を改めて言明し、同時にまた周縁が中心へ向かう求心力を増加させ、民族国家アイデンティティを再生産するのである。

二、感動を身につける—自然感情の国家化

この番組の中心人物に選ばれると、ただ意識形態の標準に達しただけではまだ不十分である。キーポイントは人の感情の需要に迎合できること、人に「感動」させることができることである。感動とは何なのか？いかに人を感動させることができるのか？これはおそらく番組制作者の企みにおける核心問題である。

まず、大衆の目を引いて、一定の視聴層を形成することが必要である。『感動中国』は過去の業績説明式の報道形式を払拭し、物語を語るという形式で、人物の経験と出来事の細部に注目している。こういう細部の拡大はある程度、政治に伴う堅苦しさを緩和し、「パパラッチ」の「ゴシップ」感を増やし、儀式をさらに可視的で、また「やじ馬見物」的にした。では、人の目を引いた後、どうやって人を感動させるのか。心理的原動力因子から言うと、感動は崇拜や敬慕とは異なり、大きな業績自身が人を感動させられるわけではなく、人を感動させるものとは辛苦や忍従、犠牲あるいはある程度の諦観であり、相対的に志を喚起させる「硬力量（強い力）」、感動は「ソフトな軟力量（弱い力）」である（朱龔星、2012）。このような情緒を我々は「自然感動」と呼ぶ。それゆえに典型的なイメージは、一般人の生活の「ソフト」な一面として現われる時のみ、最も人の心を捕えることができるので、要点となるのはいかにこうした生活の中の人を感動させる要素を掘り出し、パッキングするということなのである。

その年度人物が成功を得るまで追及し、努力をし、粘り続ける過程に多くの場合、自身の身体の酷使や家族への粗忽、清貧や孤独を甘受すること、外部からの圧力を耐え忍ぶことなどが伴っている。また老年、柔弱、疾病、死亡、別離、孤独は感動から最も身近に発生する自然な出来事であり、極めて容易に人々の感情に共鳴を起こすものであり、これがストーリーの最高潮部であり、感動の頂点なのである。年齢、性別、身体等の自然要素と社会的成功が結びつくと、極めて容易に誇大に感情を煽る効果を生み出す。例えば、人々に尊敬されている医学専門家の呉孟超氏の VTR には、最初は呉氏が患者さんのために靴をベッドの前に置くシーンである。90 歳の白髪の医学専門家が患者のために靴を置く行為は、普通の老人が行っても人を感動させる。そこに呉氏の社会的地位——医学専門家、を加えれば、以上の自然な感動をさらに拡大する効果が生じる（何昊 2012）。また日中戦争中細菌戦で被害を受け

[‡] 中国四川省涼山彝族自治州で、車の通らない地域に対して馬に郵便物を載せて配達する方法。（訳者注）

た中国人被害者の訴訟原告団団長の王選氏を紹介する VTR によく出てくるシーンは王氏が一人で歩く姿である。それは王氏の終わりの見えない訴訟の道をも意味している。王氏の事例は大きなギャップを作ってきた。それは、歴史的事実と民族的名誉にかかわる重い使命を一人の女性が背負っているということである。責任の重さと女性一人の弱さ、困難な道と王氏の忍耐強さ、こうしたギャップはまさに人を感動させるものである。馬班郵路の郵便配達員王順友氏もいい例である。馬と一緒に山を通る夜、一人でたき火の近くに座り、お酒を飲みながら、メロディーにならない歌を歌う。広々としている山の中、ただその歌が響いている。こうしたシーンは人を感動させやすいセリフも加わって、「孤独は彼の生活の常態で、14、5日の間に自分の歌とその馬としかコミュニケーションができない。」「20年間、毎年少なくとも330日も一人で孤独で荒涼な山を歩く。20年間に歩いた26万キロとは長征路を21回も歩くこともできる距離であり、また地球を6回半まわることもできる。20年間、王氏は一回も配達を遅らせたこともないし、郵便物一つ紛失したこともなく、配達正確率は100%である。」(周建華、2007)

2002～2012年11期の『感動中国』の中で、物故者や、重病を患いながら最後の最後まで仕事を続ける人、人の財産や生命を救い出すために献身を行う人、あるいは危機に際して自己を犠牲にして人を救う人、またすでに逝去している著名な人物が16名もいた。死は人生における不可逆的な終局の事件として、人の感情をかき立てる上で、最も重みのあるものである。こうした物故者の表彰者については、往々にしてその親や仲間を招いて本人出演を行い、彼らは自分の物故者に対する感情を言葉で表現し、声や情調、涙たっぷりの場面は視聴者を感動させる最も効果のある触媒である。

このような自然感動と人物の社会的成功とが付与される国家言説が結びつくとき、「ソフトな軟力量」により生産される感動と広大な大叙事詩が招く感染が共に織りなされ、ともに分かちがたく、感動の国家化の過程はたとえ無意識的であっても当然ながら完成するのである。こうした感動はもはや個体のマクロな感覚ではなく、英雄的人物の主体性は組織が同意するある精神的表象へと転化することに成功しており、完全な国家、完全な民族に属するという一種の群集心理となり、国民に普遍的アイデンティティを与える一種の価値判断なのである。

三、隠退していく国家

たとえ本質が政治儀式であっても、『感動中国』は表現形式上は出来る限り政治的色彩を下げており、これがもちろんのこと視聴者に親近感を与えるのである。番組の推薦委員会は各分野の有名人から構成されており、彼らに共通する特徴は教育水準と知名度が比較的に高く、社会影響力が強いということである。また、職業や専門の分野は比較的幅広い。このようにそれを明らかにすることでメディアとしての権威性と代表性示され、同時に彼らが非公務員であることから政治から独立した「民間の声」であることを強調する(莫継巖、2012)。実際には、これらは「輿論指導者」として民族国家の社会的エリートとその代弁者なのである。このほかにも、年度人物を推薦する時の文章も彼らが執筆する。推薦と表彰の言辞は一種の文学的構造(周建華、2007)や文学的優美さ、洗練された言葉、重厚な文学的表現を採用し、政治言説上の「上綱上線(高邁な議論に依る針小棒大な批判)」の特徴から何とか免れて、人々を深く感動させる精神と芸術の共演に変わってきた。表彰については、以前は公

的機関が榮譽を授与していた形式を改定し、小学生が表彰する方法で落ち着いた。感動を基準として選出された人物はいかなる機関や個人に表彰されてもいかにも時宜に合っておらず、いっそのこと、純真と希望を表象する小学生によって表彰が行われることで常套を脱することができるのであり、さらに「小さなお友達」を賞杯と花束の贈呈者にすることで、観衆が感じるのは、ただの表彰という一事だけではなく、国家の希望まで感受し、このように人を感動させる組み合わせも民族精神の拡大と永続を表彰している。

十数年の歴史のなかで、『感動中国』も時代と共に歩んできた。総じて言えば、基準は次第に寛容になり、視点もマクロになり始め、年度人物となるべき人物の身分の特徴も変化が生じている。最初の数回の『感動中国』ではやはり功績の広大さを主として、突出していたのは幹部や軍人、医者、知識人、模範的労働者や文化・スポーツのスターなどの「大人物」および彼らが国家のために行った「大偉業」であった。2004 年、腎臓を母親に捧げた現代の孝子である田世国と、山奥深くで一人で支援教育を行う大学生の徐本禹氏が表彰され、番組に変化が現われ、こうした「小人物」も感動の舞台に引き出されたのである。我々は小人物を「目立った身分にない一般人で社会的に貢献した人物、あるいは日常生活中でたゆまぬ努力で中国人のすぐれた伝統と伝統の美德を体現した人物」と定義する。2005 年に、このような「小人物」がさらに増えてきた。3 回も河に飛び降り、人命を救助した河南省の青年・魏青剛氏、山の中の最後の徒医者李春燕氏、妹をつれて大学に通う洪戦輝氏、37 年間約束を守る上海の知青[§]陳健氏、涼山イ族自治州馬班郵路の郵便配達員王順友氏、青蔵鉄路の建設者などである。筆者が 12 回の『感動中国』の中の小人物の統計（表 1）をとったところ、2005 年、2009 年、2011 年、2012 年の「小人物」の人数が、その年度全体の年度人物の過半数を占めていることがわかった。

もし農村で支援教育をする徐本禹氏、山の中の徒医者李春燕氏、26 年間滇池の環境を自発的に守る張正祥氏、馬班郵路の郵便配達員王順友氏、留守児童^{**}のために学校を作る女子大生李灵氏などの例を、「愛国敬業奉獻堅守」の「齒車」的な精神の代表とすれば、腎臓を捧げて母を救った田世国氏、肝臓を分けて子供を救った陳玉蓉氏、妹を連れて大学に通う洪戦輝氏、約束を遵守する陳健氏、妻を携えて初恋の女性の世話を焼く韓惠民氏、志高い身障者少年の黃舸氏などの「小人物」は個人的な出来事に属し、さらに個人や家庭、友情、愛情などの範囲を出ておらず、これらは「個人的出来事」により国家の舞台へと上った人物であり国家が関与する範囲が弱化したように見えるが、その背後には一定の社会的背景があり、実際には国家価値の指向を隠れた形で示す方法なのである。

[§] 知青：特に文化大革命中には都市の初級・高級中学の卒業生を指し、彼らは辺鄙な農村を支援するために動員され、そこに住みついた人々。（訳者注）

^{**} 留守児童：近年中国社会に現れてきた社会現象の一つである。中国近代化の発展に伴い、農村の労働力が都市に移動し、その子供が農村に残り、親と離れて生活する現象である。（訳者注）

表 1

年度	小人物					
	社会貢献		自強不息、伝統的美徳			
	人数	割合	人数	割合	合計	割合
2002	0	0	0	0	0	0
2003	0	0	0	0	0	0
2004	1	1/11	1	1/11	2	2/11
2005	4	4/11	3	3/11	7	7/11
2006	2	1/11	1	1/11	3	3/11
2007	0	0	3	3/11	3	3/11
2008	2	2/10	1	1/10	3	3/10
2009	4	4/11	2	2/11	6	6/11
2010	2	2/13	2	2/13	4	4/13
2011	5	5/11	2	2/11	7	7/11
2012	4	4/11	2	2/11	6	6/11

改革開放後、中国社会は物質生活の面で大きな発展を収めたが、生活の急速な変化は、価値体系を以前のそれとは大きな隔たりのあるものへと変え、そして、いかに共通認識を作り出し、良好な社会秩序を維持するかは為政者が解決すべき問題なのである。ある種の道徳と観念上の共通認識は、国民の素質の養成、社会的統合性に対して重要なものである。こうした一種の社会資本は、ただ宗教や文化伝統から提供され得るものである（陳明、2007）。伝統価値体系は中華民族の財産であり、また極めて民衆を動員しやすい歴史的資源であり、「忠」「信」「篤」「敬」「義」に代表される伝統的美徳は世を救う一種の良薬となる。これらの社会問題が次第に耳目を集めるようになり、義務教育の困窮、義を見て勇気ある行動をすることへの躊躇、誠信質朴の欠如、親愛の情の希薄化など、こうした問題の解決において、手本となる小人物は非常に人々を感動させやすい。彼らは平凡な一般人であり、ときには一種の卑近な存在であり、日常生活に近いものであり、現実的に近付ける能力であり、深く知ることによって直接的に人々の内面に届き、教化作用をもたらすのである。ゆえに、『中国感動』は国家のために巧妙にその意識形態を植え込み充分な弾性を持つ空間を提供し、草の根の英雄人物の表彰の背後には、依然として、国家意識形態の「影」が見えるのである。他の人の家庭の話を見聞きする時、巧妙な方法で、ひそかに国家が仕向ける使命を完成させるのである。

現代社会において、人の感情は次第に外部の社会的力（組織、権力、資本）による統制下に置かれるようになる。それと同時に、感情表情が次第にシンボルリックになり、感情の伝達はますますマスメディアに主導され、単一方向の形式になっている。それも権力集団に利用されやすくなった（王寧、2000）。伝統的な宣伝形式が衰微する状況にあって、国家意識形態は表現形態の刷新の導入を模索し、『感動中国』はまさに最も身体化、感覚化、親密化の方式を採用し、放送と浸透性と高い発信力を実現する。また、構築されたひとつの儀式的

な情景により、普段は潜在し、散在する感情を儀式という具体的時空の中で、引き起こされた感覚は容易に高揚した情緒的爆発へと転化し、このような爆発が強烈に艱難辛苦や生死の克服と感情の共鳴へと昇華させ、不断に、社区（コミュニティ）や国家、民族の集団への理想とアイデンティティを引き起こし、社会的動員の名目となるのである。

参考文献

- 李朝陽、2010、「「春晚」の身分決定と機能？」、『深討と争鳴』第5号。
- 陳蘊倩、2008、「謁陵儀式と民国政治文化」、『開放時代』第6号。
- ギアツ、クリフォード、1999、『ヌガラ：19世紀バリの劇場国家』、趙丙祥訳、上海人民出版社。
- 莫繼巖、麦尚文、2012、「ニュース儀礼、公衆の性格、国家の記号：『感動中国』の影響力が生む機能の分析」、『テレビ研究』第5号。
- 朱龔星、「『感動中国』から見る新時代の典型的人物の選択と報道」、『中国記者』第5号。
- 何昊、張兵、2012、「感動の力を探す：『感動中国』2011年度人物受賞パーティー制作談」、『テレビ研究』第4号。
- 周建華、2007、「精神と芸術の宴を創り出す：「感動中国」年度人物受賞儀礼の文学的修辞の分析」、『ニュース・ファン』第3号。
- 莫繼巖、2012、「大型テレビ番組制作と社会資源開発の道筋：CCTV「感動中国」記事を事例として」、『ニュース知識』第1号。
- 陳明、2007、「公民宗教儀礼」、『原道』第14号。
- 王寧、2000、「感情を略論する社会的方法：感情社会学研究ノート」、『社会学研究』第5号。

（翻訳者注：上記では、中国語文献も名称等を和訳してある。原題等は中文論文を参照）

（翻訳：中山大将、巫覡）

残留日本人とは誰か
—北東アジアにおける境界と家族—
中山大将*

1. エラスムス計画南京派遣

2010 年および 2011 年の夏に、京都エラスムス計画により南京大学へ京都大学文学研究科 GCOE 研究員 3 名と大学院生 3 名が派遣された。京都エラスムス計画とは、若手研究者をアジアや世界の他地域の大学へと中・長期的に派遣し、ネットワークを作るプロジェクトである。南京大学の派遣の特徴は、中国研究や華僑華人研究を専門としない者、あるいはこれからそれらの分野の研究を始めよとする者が募集されたということである。

派遣者は、南京大学海外教育院での中国語教育を受けたほか、南京大学社会学院の大学院生とのフィールド調査などの共同研究を行った。共同研究実現の背景には、派遣者の一人が同社会学院の教授の後輩であるという、長年の日中国際学術交流の蓄積もあった。2011 年、2012 年には共同ワークショップを南京大学で行い、2013 年度を場所を京都大学へと移し、また新たに設立されたアジア研究教育ユニットのプロジェクトのひとつとして今回のワークショップが実現した。

本報告では、報告者のエラスムス計画での経験と、GCOE 研究員としての研究を関連付けながら、自身の最新の研究を報告したい¹。

2. 中国農村調査

エラスムス計画での南京派遣期間中に、報告者は南京大院子生とともに江蘇省の青龍社区、開弦弓村、安徽省の宅坦村での農村調査を行った。その中で最も大きな関心は、改革开放後の中国農村社会において、社会主義制度がどのように変化したのかを確認することにあった。それはすなわち、非社会主義国である日本社会と、従来より独自の社会主義路線を目指していた中国の現代社会との相違とは何なのかを考えるための作業であった。

1920 年代から始まった日本における中国農村社会研究は、マルクス主義的理論から始まった一方で、日本の中国への帝国主義的進出によって大規模なフィールド調査を実現し、実証的データをを得ることで展開し、冷戦期には日本人の中国大陸での調査活動が困難になったためこの時期のデータを用いた新中国以前の中国農村に関する研究が続いた²。

日本人の大陸中国への入国と活動とが容易になった 1990 年代以降、日本の農村社会学者や農村史研究者らによる中国農村研究が新たに始まっている。これらの研究は、人民公社を頂点とする中国の農業集団化が崩壊した後の中国農村研究である。

我々の農村調査も、集団化の崩壊過程とその崩壊後の中国農村社会を観察することを目的とした。その調査内容や成果は報告書にまとめられているので、ここではそれらについては言及しない³。

* 北海道大学スラブ研究センター・日本学術振興会特別研究員 PD。元・京都大学文学研究科 GCOE 研究員（2010・11 年度）。

¹ 本報告論文は、中山大将「サハリン残留日本人」（蘭信三編『帝国以後の人の移動』勉誠出版、2013 年、733-781 頁）を基にしている。詳細についてはそちらを参照されたい。

² 石田浩『中国農村社会経済構造の研究』晃洋書房、1986 年。

³ 中山大将、司开玲、巫觐、笠原真梨子、李德营、福谷彬「从日本的中国农村社会经济结构研究观点来探

結果から言えば、現在の中国農村では、多くの論者が指摘するように社会主義的経済システムは崩壊しているが、社会主義的政治システムはなお現存している。日本社会では社会主義国家と非社会主義国家（資本主義国家）との本質的相違がその経済的システムの相違にあるという認識が一般化しているが、これは事実ではないことがフィールド調査を通じて理解できた。

本質的相違を生むのは、政治的システムの違いなのである。つまり、民主集中制と議会制民主主義という違いである。議会制民主主義は民主集中制を恐れる。なぜならば、民主集中制の一方独裁はブルジョアの複数政党制を否定するからである。一方、民主集中制は議会制民主主義を恐れる。なぜならば、複数政党制の選挙制度はプロレタリア独裁を否定するからである。民主集中制において重要なのは正しい思想の学習であり、議会制民主主義において重要なのは自由な議論である。こうした二つの政治システム間の対立と不信は、その他の様々な要因と合わさって、冷戦という国際的対立を生み出し、商品、金融、情報そして移動の制限が生じるようになったのである。

3. サハリン残留日本人

「残留日本人」とは日本帝国の崩壊と、この冷戦とが重なることで生じた存在であり悲劇である。ディアスポラ（祖国・故郷からの追放、喪失）はこの 10 数年以上日本の人文社会科学で重要なキーワードとなっている。しかし、ディアスポラという概念だけで、帝国主義やあるいは冷戦の生み出した人口移動やその制限が生み出した悲劇を充分に理解することができるであろうか？ 報告者が GCOE 研究員として始めた研究は、境界変動の影響を家族の視点からアプローチすることであった。

日本では「残留日本人」という場合、まず思い浮かぶのは中国の、とりわけ中国東北部残留日本人であるが、本報告ではあまり社会的にも認知されていないサハリン（樺太）残留日本人に光を当てる。サハリン残留日本人とは、単なる境界変動によって生まれた存在ではなく、社会主義世界と非社会主義世界との不幸な関係もその重要な発生要因とする。しかし、そうしたマクロな政治的要素だけではなく、家族というミクロな関係性もサハリン残留日本人発生の重要な要因であるというのが、報告者の見解である⁴。

4. サハリン島と冷戦

サハリン島は黒竜江河口対岸に位置する細長い島であり、その南側に位置する北海道と同程度面積を持つ。中国の文献ではサハリン島は「庫頁島」と呼ばれていた。「庫頁」とはサハリン島の先住民「アイヌ」民族を意味し、清帝国は愛琿条約までアイヌ民族などの先住民と交易関係を結び、その後 19 世紀末から第二次大戦終結まで日本帝国とロシア帝国

索現代中国农村研究方式：根据南京及苏州农村调查的试论」平井芽阿里・中山大将編『京都エラスムス計画 2010 年度中国社会研究短期集中プログラム成果報告—南京市・江蘇省南部の都市と農村—』京都大学大学院経済学研究科「京都エラスムス計画」事務局・京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター、2011 年 2 月 24 日、55-75 頁、および、中山大将、巫靚、李德营「中国农村的公共宣传：从“原子化”以及“组织化”的观点来看」櫻田涼子・中山大将編『京都エラスムス計画 2011 年度 中国社会研究短期集中プログラム成果報告—京都大学・南京大学若手研究者共同フォーラム報告論文集—』京都大学大学院経済学研究科「京都エラスムス計画」事務局、2012 年 1 月 16 日、60-65 頁。

⁴ 中山大将「樺太移民社会の解体と変容—戦後サハリンをめぐる移動と運動から」『移民研究年報』第 18 号、2012 年 3 月 31 日、101-119 頁。

というふたつの帝国の係争地になった。1905年の日露戦争とポーツマス条約後、この島の北半分はロシア帝国領、南半分は日本帝国領となり、これが日本の植民地・樺太である。日本人や朝鮮人が日本本国や朝鮮半島から樺太（南サハリン）へと移住をした。

1945年8月23日ソ連軍が南サハリンを占領し宗谷海峡を封鎖し、その後、国境線が実質上、北緯50度線（サハリン島のほぼ中央）から宗谷海峡まで南へと移動したのである。これはサハリン島にとって、20世紀で4度目の境界変動であった⁵。1945年8月のソ連の南サハリン侵攻以前、サハリンには約38万人の人口があり、このうち約2万3千人が朝鮮人で、約2千人が先住民族、200名前後が外国人であった。1945年8月23日までにおよそ9万人の日本人と朝鮮人が北海道へと避難した。その後、約2万4千人の日本人と朝鮮人が自力で北海道へと密航した。1946年12月から1949年7月までの間に、約27万人の日本人が引揚げ、その一方で約50万人のソ連人が大陸からサハリン島へと移住した。

しかし、実際には1949年8月時点で約2万3千人の朝鮮人と一部の日本人がサハリンに残留していた。報告者の調査によれば、約1,400人の日本人がその時点でサハリン島に存在していた。彼らは何者だったのだろうか。また、冷戦後に民間人によって始められたこれらサハリン残留日本人の帰還運動に対して、日本政府はなぜ「サハリン残留日本人など存在しない」と言い放ったのだろうか。本報告ではこれらの問いに答えるために、日本政府の公文書や各種団体の資料、およびサハリン残留日本人へのインタビューを用いる⁶。

5.疎開と引揚げ

サハリン島から日本人が退去する第一の波は、1945年8月13日から23日までの「疎開」で、第二の波が、1946年12月から1949年7月までの「引揚げ」である。この「引揚げ」は米ソの協定に基いており、この協定では朝鮮人の退島を許可していなかった。

しかし、日本政府引揚援護局（引揚者を扱う部局）はソ連から送られてくる引揚者の中に「朝鮮人」が含まれていることを認識していた。引揚援護局にはその原因がわからないままであった⁷。どうしてこのような現象が起きたのか。そもそも朝鮮人とは誰なのだろうか。

日本政府にとって、「朝鮮人」とは日本帝国期に朝鮮の戸籍に登録されていた人々のことであった⁸。その一方で、ソ連政府にとってはソ連国内身分証の民族籍が「朝鮮民族」と記載されている者のことであった。ソ連政府は、1946年にサハリンにいる日本人や朝鮮人に身分証を発行した。この際に、人々は自分の民族を自己申告した。したがって、朝鮮の戸籍を持っていたとしても、このときに「日本人」と申告した者は、日本政府にとっては朝鮮人で

⁵ ロシア革命とそれに続く内戦に乗じて日本軍は1920年に北樺太を占領し軍政を行った（保障占領）。

その後の1925年に日ソ基本条約に基づき日本軍は北樺太から撤退し、ソ連が施政を開始した。これらが20世紀第2、第3の境界変動である。

⁶ 使用する主な公文書は外務省外交史料館が所蔵する以下の史料である。『ソ連地区邦人引揚関係一件引揚実施関係 第四巻』～同『第九巻』、『ソ連地区邦人引揚関係樺太残留者引揚関係』。また、国会会議録や在日韓人歴史資料所蔵の李義八氏寄贈資料も用いた。報告者は、2010年から2013年にかけて、日本サハリン同胞交流協会、サハリン北海道人会、社会福祉法人北海道社会福祉協議会 北海道中国帰国者支援・交流センター（日本）全国樺太連盟、サハリン州韓人会、安山市故郷の村永住帰国者老人会（韓国）の協力を得て資料提供を受けたほか、サハリン残留日本人15名とサハリン残留朝鮮人9名への聞き取り調査を行った。

⁷ 函館引揚援護局『函館引揚援護局史』函館引揚援護局史、1950年、44-45頁。

⁸ 本研究でもこの便宜上この定義を踏襲する。

あるが、ソ連政府にとっては日本人だったので、こうした人々はソ連政府により日本へと引揚げさせられたことがあり得た。もともと日本人と朝鮮人の外見は似ており、朝鮮人の中には、日本語を日本人のように話せる者も多く、また戦後になっても日本名を使っている者も多かったので、ソ連の役人では区別することが難しかったのである。

6. 冷戦期帰国

1956年に日ソ国交正常化が成り、1956年から1959年までサハリン残留日本人の集団的帰国が実現する。この際にサハリン残留日本人約800名だけでなく、その朝鮮人家族約1,600名が日本へと帰国した。冷戦帰国者の名簿によれば、冷戦帰国者世帯全体の約7割が日本人女性と朝鮮人夫を含む世帯であり、そのうち約8割は戦後に形成された世帯であるが、残りの2割は戦前からすでに形成されていた世帯であると見られる。つまりサハリン残留日本人の約7割が日本人と朝鮮人からなる世帯で、朝鮮人の引揚げが許されないために残留することとなった世帯で、残りの約3割が特別な技術者など、ソ連政府に引揚げを許可されなかった日本人世帯であった。

冷戦期帰国に際して起きたのが、自称日本人朝鮮人問題である。これは引揚げ船に乗船した朝鮮人と類似していて、ソ連の国内身分証では日本人と記載されていた人々である。たとえば、ある朝鮮人は自分の朝鮮人の親方が身分証発行時に今後のことを考えると日本人の民族籍を得た方が有利だと言ったので、自分も日本人の身分証を得た。この親方は妻が日本人であり日本へ帰国することにしたので、自分も帰国申請をしたのであった。また別の事例では、自身は朝鮮人であったが、日本人の養父母に育てられ、日本人の家庭に婿入りしていたので、日本人として帰国できると疑わず帰国申請をした。彼らはソ連政府にとっては（書類上は）日本人だったのでサハリンの港で日本政府に彼らも引き渡したが、日本政府にとっては朝鮮人であった。

両者とも日本人の妻子がいたが、1945年8月の疎開で日本へ渡ってしまっていた。日本へ帰ってこの妻子に会いたいと言うのも、彼らが日本帰国を希望する大きな理由であった。こうした日本人との間の戦前からの家族関係が、日本帰国への願望を生み、自称日本人朝鮮人を生み出したと言える。

7. 豊原事件と偽装結婚問題

日本人女性の夫として問題なく入国した朝鮮人は、妻が希望するからという消極的な理由で帰国した人々ばかりだったのだろうか。サハリン残留朝鮮人の中にはある程度、日本への帰国願望を持つ人々がいた。このことは豊原事件と偽装結婚問題に表われている。

豊原事件とは、冷戦期帰国開始直後に、サハリン州の州都ユジノ・サハリンスク（日本名：豊原）で起きた事件である。日本人の帰国が実現するという知らせを聞いた約800人の朝鮮人が、日本人家族がいなくても関わらず、「帰国」の手続きのために役所へ押し寄せ、それを止めようとした朝鮮人共産党員との間で争いが起こったのである。朝鮮人共産党員にとって、偉大なる共産党が領導する理想的な「祖国」ソ連から退廃的な資本主義国家でありかつての帝国主義的抑圧者であった日本へと同胞が移住を希望することは許されがたいことだったからである。

偽装結婚問題とは文字通り、日本へと帰国したい朝鮮人男性が、独身の日本人女性と結

婚し、日本人女性の夫として日本へと入国しようとしたことが頻発したことを指す。

また 1970 年代の樺太帰還在日韓国人会（日本人妻と日本へ冷戦帰国した朝鮮人の団体）の調査によれば、韓国あるいは日本への帰国を希望しているサハリン残留朝鮮人の約 3 割は韓国ではなく、日本への定着を希望していた。

こうした朝鮮人はなぜ日本への帰国を願ったのか。家族や親族が日本にいることや、慣れない社会主義国家ソ連での暮らしよりも、慣れた日本社会での生活への希望があったと考えられる。

一方、この冷戦期帰国の機会を逃した人々の多くは、朝鮮人夫が日本への帰国に同意しなかった人々であるようである。残留日本人の中には、国内身分証に朝鮮名が記載されているだけでなく、民族籍を朝鮮民族にしていたり、北朝鮮国籍やソ連国籍を取得している場合も珍しくないのである。またこうしたことのためにソ連政府や日本政府が日本人として認めず、帰国船に乗れなかったケースも多い。こうして、女性を主としたサハリン残留日本人は、サハリン朝鮮人社会とソ連社会へ二重に埋没していくこととなったのである。

8. 日本政府の認識の変遷

1950・60 年代において日本政府は、ソ連地区未帰還者の早期の帰国をソ連政府に要請していた。ソ連地区未帰還者とは、上記のサハリン残留日本人だけではなく、旧関東軍軍人を含むシベリア抑留者も指している。シベリアに不当に抑留され、強制労働に従事している日本人の一日も早い送還は日本政府にとって急務であった。実のところ、サハリン残留日本人の冷戦期帰国は、その副産物でもあった。

自称日本人朝鮮人問題や偽装結婚問題が国会議員から問題視されていたにも関わらず、これらの朝鮮人の入国を「人道的見地」から日本政府が許可した背景には、何か問題が起きて帰国事業自体をソ連政府が停止することを日本政府が恐れていたことがある。また、そもそも朝鮮人の入国自体に否定的な意見が国会で出ていたにも関わらず、各省庁がその入国を容認したのは、朝鮮人家族との離別を嫌って、帰国を諦めるサハリン残留日本人が増えると、帰国事業終了の口実をソ連政府に与えかねないと各省庁が恐れていたからである。

1970 年代になると、シベリア抑留者のうちまだ未帰還の者は、現地で家族が出来たなどの理由で自分の意思に基づきソ連に残留している者であると日本政府はみなすようになった。しかし、サハリンについては本国の家族への連絡などもあることから、帰国希望者がいることが国会では共通認識になっていた。

しかし、80 年代になると、日本政府はサハリン残留日本人とは、消息不明者のことを指し、現在サハリンに残留にしていることが判明している日本人は全て自己意思残留者であるという立場をとるようになった。

なぜ日本政府はこのように態度を転換したのか。それを知るためには日本政府の水面下の動きを知る必要がある。それが 1965 年に行われた、法務省、外務省、厚生省の三者協議である。この協議の発言概要は外交史料館に残されている。冷戦期帰国者から得た情報により、サハリン残留日本人の大部分が朝鮮人の家族となっておりことや、北朝鮮国籍やソ連国籍の取得が進んでいること、日本への思慕や日本生活経験がないどころか、日本語もまったく理解できない次世代が増えつつあることを日本政府は認識し始めていた。次世

代の出生、成人などによって残留日本人問題が複雑化することを避けるためには「一定のところで打切ることが必要」であるという意見が出たのである。

また、この協議の席では、もはや日本国籍保持者ではない朝鮮人の入国を許してしまった 1950 年代末の冷戦期帰国は失敗であったと認識されていた。日本政府は国内の民族的複雑性の深化を嫌い、サハリン残留日本人の帰国自体を打ち切ろうという姿勢をすでにこの段階で見せ始めていたのである。

そして、これが 1990 年代のポスト冷戦期帰国運動に対する「サハリンには日本人はない」、いたとしても「自己意思残留者」であるという発言へと結びつくのである。

9.さいごに

冷戦期帰国時の豊原事件、偽装結婚問題、自称日本人朝鮮人問題は、何かしらの理由で日本への帰国を希望していたサハリン残留日本人が存在していたことを意味している。しかし、日本政府はこれら旧帝国臣民である朝鮮人を、「残留日本人」とは決してみなさなかった。なぜならば、内地籍を有していなかったからである。

さらに、内地籍をかつて有していても、サハリン残留日本人の多くは朝鮮人の妻や子であり、サハリン朝鮮人社会とソ連社会に二重に同化をし、家族関係を有していることから、民族的複雑性を嫌う日本政府はこれらの人々を自己意思残留者とみなして、残留日本人からは排除するようになった。1980 年にはサハリン残留日本人という概念は、日本政府内で形骸化した。サハリン残留日本人とは消息不明者を指し、消息が判明した者は自己意思残留者とみなされたからである。

この状況が変わったのは、1986 年以降のペレストロイカとソ連崩壊の過程で本国の日本人がサハリンへと比較的自由に入域できるようになってからである。市民運動団体やマスコミがサハリン残留日本人の存在と帰国願望を訴え、日本政府の態度にも変化が現われ、ポスト冷戦期帰国が実現したのである。

サハリン残留日本人がサハリンに残留したことと、国家や民族への忠誠心との間には何の関係もない。人間にとって最も大切な目の前の生活や家族との関係を優先した結果、自分の意志ではどうにもならない境界変動や冷戦によって彼らは残留を強いられたに過ぎない。彼らの悲劇は、祖国からのディアスポラではなく、かつての家族や生活圏との離別である。

Chai Xiangnan
Sociology major
School of Social and Behavior Sciences, Nanjing University
Nanjing city, Jiangsu province, China
210000, cxn19901012@gmail.com

How political capital contributes to a stratified rural China **— based on investigation in Z village, Anhui province, China¹**

Gradually, with the increase of domestic economy, stratification has appeared in rural China in the past twenty to twenty-five years. Stratification in this paper is confined to economic stratification which includes household income per year and total assets. A domestic characteristic of such stratification in rural China is obvious that political capital owner plays the most important role in the process. The political capital owner means that who occupy political positions in rural areas. They can achieve social, economic, and cultural capitals through political capital. Such inequality on opportunity mainly contributes to a divided rural China. In addition, the amazing improvement of urbanization in China today also has influence on the stratification, to a certain extent. It seems that ‘socialist village’ model, typical as the Huaxi Village model (华西村模式), can solve the increasingly severe stratification issue through a collectivism way on economy, for instance, establishing village-owned enterprise sharing out bonuses. This way, however, just works superficially. Even, on the contrary, such model will cause more serious political and economic inequality in rural area. Form a modern village public sphere, as one probable way to solve the economic stratification problem, confronts the dilemma under current CCP political system in rural district.

1. Hypothesis and methodology

Under current political system, political capital contributes to the stratification issue through two ways, on the one hand, directly converting into economic capital and cultural capital, and such inter-convert is without equal distribution among villagers and elites; on the other hand, indirectly through urbanization process.

We did a field empirical research in Z village in December, 2012. Necessary information was collected by our team through structural and semi-structural

¹ This paper is used for applying for the Kyoto University – Nanjing University Sociology & Anthropology Forum, on August, 2013, the city of Kyoto, Japan. I myself take all responsibility for this paper. Timeline: primary thought and empirical investigation, Nov. to Dec., 2012; first draft, Jan., 2013; thanks for the help on sentence revise from Peter Bollig from Kansas University, and Zoe Elizabeth Noyes from the Law school, American University. The second draft was used as a presentation on Professor Webb’s ‘Modernity’ course, Jan., 2013; third and forth drafts, Apr. and May, 2013. This current version is the forth draft. This paper will be perfected continuously.

interviews². As for the sample selecting, firstly we got to know basic information of Z village in advance through talking with village director. Then our team made an exploratory research in order to primarily know economic situation of Z village and modify interview questions. After this step, we select different households on different economic income levels in order to make samples we selected typical on the whole. The final sample number was around 203. After information collection, my teammates and me worked together to arrange and exchange important information.

Here is the basic information of Z village. It locates in Jixi Town, Xuancheng City, Anhui Province, PRC. With nearly one thousand year long history, Z village which contains five natural villages develops well in current time. Now there almost 1,700 people live there. Among all these residents there are eighteen family names, and the family name Hu (胡) occupies around ninety percent of the whole. Z village is around 5.21 square kilometers with average 0.7 square kilometers cultivated land per person. Residents mainly develop crop farming and forestry. Furthermore, inhabitants pay much attention to education for their children.

2. Brief review: stratification in rural China from 1949 to today

Before the year of 1976, in Mao's socialist China, positive or negative, Central Government policy always had huge impact on every aspect. Recurring upheavals happened in the fragile rural China, a main stage of kinds of socialist movements. Dramatically, rural China stepped into a time of economic development as well as stratification after the reformation initiated by Chen Yun and Deng Xiaoping in 1978, another vital turn point for China in last century.

(1) From 1949 to 1978

After the CCP came into power in 1949, China's mainland turned into 'Mao Zedong's time'⁴. Until 1976, in his time, rural China was regarded as subordinate to urban China, and agriculture was subordinate to heavy industry. In the political dimension, Liu Shaoqi gave a lecture on "how to be a good communist" to call for cadres to selflessly "serve the people"⁵. In the economic dimension, peasants' private lands obtained from the third Land Reform in 1952 gradually became collectively owned. Including the 'Great Leap Forward' from 1958 to 1960, and the 'People's Commune' beginning at 1960, this series of communist movements finally made the countryside a non-stratified society from economic perspective, which was the goal of Mao's socialism and communism. Then, "between 1970 and about 1977, a special place was occupied by the campaigns to 'learn from Dazhai' (Tachai, 大寨)"⁶. Why

2 Interview questions are seen in the accessory I in both Chinese and English versions.

3 In order to collect more information to support my research, I will do more interviews in future.

4 'Mao's time' for short

5 Larry M. Wortzel, *Class in China Stratification in A Classless Society*, New York: Greenwood Press, 1987, p.83.

6 Frank Leeming, *Rural China Today*, New York: Longman Group, 1985, pp. 25.

Dazhai became the most typical socialist model then? Mostly because Dazhai combined political principle that laying emphasize on absolute equality and economic principles paying attention on agricultural production together perfectly in that special era⁷, which distinctly reflected the huge influence of the socialist political system then. Hence, economic stratification from 1949 to around 1976 was effaced by political movements gradually.

Furthermore, in the period from 1976 to 1978, these two years was seen as a transnational period. Economic situation in rural China was still worse off as a consequence of the ‘Cultural Revolution’ together with the rigid bureaucratic system, which stimulated Chinese peasants and initiated a bottom-up rural reformation regarded as the forerunner of the Reform and Opening Policy.

(2) After the Reform and Opening Policy, particularly after 1984

After fierce political struggles, in this period, “enrichment of the people, especially the working class, is now a proclaimed aim of the Chinese system”⁸. In rural China, grain production was the biggest problem for peasants who strived against long-term famine, starvation, and penury mainly causing by inflexible political system and ridiculous economic decisions then. They were in badly needs of food growth. The Reform and Opening Policy, which originated from the spontaneous land reform by peasants in Anhui and Sichuan province, was the turning point of economic stratification in rural China. People’s communes in this period were canceled formally⁹. After the upsurge of grain production, before 1984, the year of the urban economic reform, Chinese peasants earned money just from agriculture. After the urban economic reform, the process of Chinese urbanization speeded up. Meanwhile, the *Hukou* (户口) system which plays a significant role in national population organization of PRC¹⁰ embraced itself reformation. Even some scholar believes that the real Chinese miracle happened in 1980s originated in rural China¹¹. Because of the loosening of limitation on urban household registration for normal peasants¹², economic stratification in rural China appeared gradually, which will be analyzed in detail later.

3. As a reality: rural China now is divided into three classes

In this paper, the theoretical hypothesis of the stratification phenomenon in rural

7 Ibid., pp. 25.

8 Ibid., pp. 3.

9 Ibid., pp. 38 – 40.

10 Fei-Ling Wang, China’s Evolving Institutional Exclusion: the Hukou System and Its Transformation, China Papers, New Zealand Contemporary Chin Research Center, 2009, No. 18, pp.1 – 28.

11 Yasheng Huang, Professor of Global Economics and Management, *China Boom: Rural China in 1980s*, July 1, 2010, presented on the website: <http://asiasociety.org/essays/detail/212>

12 In the beginning of 1980s, such political loosening just aimed to village cadres’ families.

China is: economically speaking, there exist three classes, namely the upper-class, the middle-class, and the lower-class in rural China today. This assumption can be proved from three aspects as follows:

(1) Relative research overview: the stratification is inevitable

Some Chinese scholars have noticed this stratification issue in rural areas. As Yan Yunxiang mentioned¹³, Chinese rural reform in the early 1980s held the slogan that ‘let some peasants get rich first’, however, who would get rich first was the core issue at the beginning of reformation. Based on his empirical research on Xiajia village, Heilongjiang province, he classified this village into four classes based on economic performance. And he put forward that “political capital including social networks and fixed salaries”¹⁴ made four households the top ten richest in this village. Lu Xueyi did his analysis on consumption in rural areas. He found that the difference on consumption among farmers has taken place¹⁵, which meant that the economic stratification in rural area has appeared to some extent. He also quoted data in 2004 provided by State Statistic Bureau to prove his viewpoint¹⁶. Zhang Qian Forrest once did analysis on Chinese social hierarchy from history to today including the socialist political hierarchy in Mao’s time¹⁷. He thought that “in both rural and urban areas, a new economic elite has emerged”¹⁸, and there existed the “official-commoner division”¹⁹.

How many classes are there in rural China? To some extent, skill differentiation and distribution of economic capital in rural China lead to the stratification. For instance, the incomes of peasants who work in non-agricultural industry, township enterprise, and agriculture are different²⁰. Based on such differentiation, some scholars provide an eight-class division²¹, or ten-class division²². All in all, regardless of how many

13 Yunxiang Yan, The Impact of Rural Reform on Economic and Social Stratification in a Chinese Village, *The Australian Journal of Chinese Affairs*, No. 27 (Jan., 1992), pp. 1-23, The University of Chicago Press, College of Asia and the Pacific, The Australian National University, Australian National University is collaborating with JSTOR to digitize, preserve and extend access to The Australian Journal of Chinese Affairs. At 1 – 3.

14 Ibid., pp. 14.

15 Xueyi Lu, Institute of Sociology, Chinese Academy of Social Science, *The Changing in Agriculture, the Countryside and Farmers in China*, presented on the website: <http://www.sociology.cass.cn/english/papers/P020070306306524375309.pdf>

16 “in 2004, the rural people can be divided by annual income level as: less than 600 RMB: 2.25%; 601-1000 RMB: 6.07%; 1001-3000 RMB: 51.3%; 3001-5000 RMB: 25.29%; above 5000 RMB: 15.02%. These numbers are indicative to the stratification of rural population in terms of asset/income.” Ibid., pp. 9.

17 Qian Forrest, Zhang, Singapore Management University, Status and Hierarchy: A Framework for Understanding Stratification and Inequality in Today’s China, *In Understanding Chinese Society* (pp. 96-110). London: Routledge. Available at: http://ink.library.smu.edu.sg/soss_research/1037

18 Ibid., pp.2.

19 Ibid., pp.13.

20 何朝银, 人口流动与当代中国农村社会分化 [J]. 浙江社会科学, 2006.02, 95 – 102. pp.98.

21 朱宏军, 郭玉亮, 转型期农村社会阶层分化的现状及特征分析 [J]. 南京林业大学学报(社会科学版), 2005, 04, 15 – 19, pp.16 – 18.

divisions we choose to classify Chinese rural society, the phenomenon of stratification, surely speaking, really exists.

(2) CGSS Data analysis

According to national statistic data, the average income of rural people in the year of 2008²³ is 4,700 Yuan, with a GDP per capital of 22,640 Yuan to all Chinese citizens. These two data in this paper are going to be used to measure and identify rural class division. What's more, through analyzing the latest database, the CGSS 2008²⁴ by statistic software STATA, the three-class division is clearer, concreter, and more specific.

According to data analysis, as a matter of fact, different self-identifications given by rural residents show the subjective class stratification. From Chart 1.1 we can see that, 33.49% of them regard themselves as belonging to the lower class, while 54.64% think they belong to the middle class. Although only 1.74% of them have the upper-class identification, the upper-class truly exists in rural area.

Belongs to	Freq.	Percent	Cum.
Lower	866	33.49	33.49
Workers	262	10.13	43.62
Middle-lower	639	24.71	68.33
Middle	774	29.93	98.26
Middle-upper	41	1.59	99.85
Upper	4	0.15	100.00
Total	2,586	100.00	

Chart 1.1: Self-consciousness on social stratum

Objectively speaking, based on the GDP per capital date mentioned before, the income gap among rural Chinese indeed takes place. And moreover, such a gap is huge to some extent. Through Chart 2, we can see the income differences among the three classes.

Variable	Observation	Mean	Std. Dev.	Min	Max
Lower	503	1770.119	1333.227	0	4,600
Middle	488	10209.18	4725.123	4,800	22,600
Upper	73	53824.25	79571.82	23,000	612,000

Chart 1.2: Different classes' average income per year

22 陆学艺，张厚义，张其仔，转型时期农民的阶层分化——对大寨，刘庄，华西等 13 个村莊的实证研究 [J]. 中国社会科学，1992, 04, 137 – 151, pp. 140 – 144.

23 Rural people mean those who hold the rural household registration.

CGSS 2008: China General Social Survey in 2008, collectively made by Ren Min University and Hong Kong University of Science and Technology. It is legally downloaded.

(3) Empirical research: investigation in Z village in Anhui Province, China²⁵

Although Z village is not a very wealthy village, the stratification inside is surprising. Based on information obtained through the investigation to villages²⁶, the richest household in Z village could earn hundreds of thousands Yuan per year. However, such a household is rare, like, for example, the family of village secretary of Z village, who established a family-owned toy factory several years ago. Most villagers earn thirty to fifty thousand Yuan per year, and they regard themselves as middle class. And some villagers just relying on agriculture see themselves as lower class. Here are four interview records:

Record one: male, around 50 years old, lives with his wife. His son works in Hangzhou city, and daughter works in Nanjing city. He and his wife earn money from a small scale farmland. His class identification is “I belong to the middle class, and maybe even lower class. I can’t earn too much in one year. I am much worse off than the rich in our village, also there are some villagers who are worse off than me in my village though”.

Record two: male, around 50 years old, his elder daughter works in Hangzhou city, and young daughter works in Shanghai city. He has own medium-scale business in the village. His life quality is better than average level of Z village. And his class identification is “I belong to the middle class, and I am better off than other families, like my neighbors. From this perspective, I am the member of upper class. However, I am not as rich as those who own factories, like our village secretary. So, all in all, I regard myself as middle class, or middle-upper class”.

Record three: male, the village director, around 55 years old, his daughter now works in Japan, and his son has set up a company in Hangzhou city. His wife lives in the town. He runs his own business in Jixi town.²⁷ He thinks that he belongs to the middle-upper class. “I am the village director, so I have responsibility to create better life for villagers. I have my own business in the town. My wife takes care of it. In this village, of course I am not the richest. But I am better than the average level. So I can say that I belong to the middle-upper class”.

Record four: Male, around 45 years old, the village Party secretary. His father had once been the village Party secretary. His father set up a factory in the town which now is ran by him. This factory can bring lots of economic benefits to him per year. He says that “Maybe I am a little bit richer than some other villages, and all money is legal. Running a factory is not an easy work. I regard my household as middle-upper class because some other villagers are richer than me actually. They have business in cities. I have responsibility to make our village better, not just my family.”

25 I did this investigation in Zhai Tan village (‘Z village’ for short), Jixi county, Anhui province, China, in December, 2012.

26 I use structured interview to collect information.

27 Ruled by the Constitution, people in rural area enjoy self-governance, and the village director is not official as such. Thus, they can run business legally. Because of this reason, it is easier for the inter convertibility between political capital and economic capital in rural China.

From these records, we can clearly know that the economic stratification is to some extent usual in Z village. Income gap sometimes can be large in rural area, not only in Z village but also in many other Chinese rural areas. Now we should to analyze the reason which mainly leads to such stratification.

3. Reasons of stratification in rural China

In this paper, holistically speaking, stratification in rural China is caused collaboratively by two reasons, the internal reason and the external reason.

(1) Internal cause: how political capital influence stratification

a. Capital theory: Bourdieu, Coleman, Lin Nan, and Granovetter

Bourdieu's capital theory is based on 'social world' framework, an "accumulated history". He thought that "capital, which, in its objectified or embodied forms, takes time to accumulated and which, as a potential capacity to produce profits and to reproduce itself in identical or expanded form, contains a tendency to persist in its being, is a force inscribed in the objectivity of things so that everything is not equally possible or impossible"²⁸. His capital theory shows that Bourdieu regarded capital as the potential capacity for an individual to hit his or her goal in specific social occasion, and that, capital is attached to one's social identity which has a positive relation with the quality and quantity of capital he or she can use.

In fact, Bourdieu's capital is not limited to economic capital. Bourdieu put capital into the social structure, which is broader than economic structure. He firstly "expanded the ideas and metaphor of economic interests to include non-economic goods and services"²⁹. Then he provided three different types of capital, namely the economic capital containing money and property; the cultural capital containing cultural goods and service like educational credentials, and personal taste; the social capital containing acquaintances and social networks³⁰.

To Bourdieu, political capital belongs to social capital. It is a "variation of social capital"³¹. His analysis on political capital is somewhat limited. Instead, he focused more on cultural capital than political capital. Cultural capital, in European tradition and society, is a symbol of social status. However, in rural China, it is political capital that functions behind cultural capital, and especially reflects on the issue of education which will be further discussed later.

From the perspective of social exchange theory, Coleman thought that social actors

28 Only in the social world framework can capital function. Pierre Bourdieu, *The Forms of Capital*, New York: Greenwood, *Handbook of Theory and Research For the Sociology of Education*, 1986, pp.241 – 258.

29 Ibid., pp. 241.

30 Kimberly Casey, *Defining Political Capital: A Reconsideration of Bourdieu's Interconvertibility Theory*, Illinois State University Conference for students of Political Science, April 4, 2008, pp.2.

31 Ibid., pp.3.

exchange social resources with each other for the sake of self-interest. Such tremendous times of exchanges firstly form social knots and ties, then the whole social network. That is to say, social ties consist of social structure, and they themselves are social capital³².

Lin Nan concentrated on the direct and reciprocal relation between social capital and other factors, including individual social status, economic benefits etc. He provided seven assumptions that constitute his capital theory. Combining Bourdieu's 'social structure', Coleman's 'social exchange', and Lin Nan's 'social resource', we can see that capital functions in a specific system in which embed different kinds of social resources. Therefore, Granovetter's 'embeddedness theory'³³ seems quite eloquent and useful. Granovetter figured out that capital is embedded into social-economic structure.

All in all, based on Bourdieu, Coleman, Lin Nan, and Granovetter's capital theories, political capital seems to be "the sum of combining other types of capital for purposive political action or the return of an investment of political capital which is returned into the system of production"³⁴.

b. Political capital in rural China today

Why pay much attention to political capital in rural China today? It is mostly because the current political situation in China today, that is dominated by the CCP political bureaucratic system has a deep influence on not only urban regions but also countryside. Based on the Constitution of PRC, the governance in rural China is self-autonomy by villagers. Nonetheless, the effect of Party organization on basic level is still huge in today's countryside.

Inasmuch as there is an entire political structure in rural area which has direct connection with higher level bureaucratic system, and also political factor plays a key role in daily affairs, political capital which exerts function in political structure should be paid great attention.

Therefore, we should define what actually the political capital in rural China is. In this paper, based on hypothesis, information obtained from investigation, and relative capital theories, political capital in rural China means the capacity to directly or indirectly gain economic, cultural, and social resources for individuality, family, or clan through his or her political position and status.

c. Two kinds of political leadership identity in rural China

As Fei Xiaotong pointed out in his classic³⁵, in rural China, there existed a 'gentry

32 Gao Lian-ke, On the Theory of Coleman's Social Capital, Journal of Bei Hua University (Social Science), 2005,6 (2).

33 This theory is provided by Granovetter in his book *Embeddedness*. Embeddedness is the core concept.

34 Op, cit., Kimberly Casey, pp.4.

35 费孝通, 乡土中国[M], 北京: 北京出版社, 2005.

group' between national power and local peasants. Such a Chinese gentry group was vital for local social control and management before 1949, a period during which Chinese society was mutually constructed by the state and clan³⁶.

From 1949 to 1978, the gentry group was eliminated by socialist and communist movements. The Party organization replaced the gentry group to control villagers as well as manage social affairs. A turning point occurred in the year of 1982 when the basic principle of 'villager autonomy' that regulates the village direct-democracy was formally ruled by the Constitution³⁷. This kind of villager autonomy, similar to the situation before 1949, needs village elites. However, local power should be controlled by the Party organization. Based on this logic, therefore, the leadership constituted by village elites after the year of 1978 in rural China has two identities. One is that they belong to local gentry group; second is that they are members of political power system. Their elite identity is the basis for their political leadership, and their leadership identity is directly and tightly connected with the whole political power system.

d. How political capital in rural China contributes to the stratification?

To begin with, "political capital as the capacity to influence political decisions"³⁸ which "includes big as well as small decisions that are taken everyday in a great variety of public and private arenas"³⁹, brings political resources to political capital owners. Namely, when you have power to make decision(s) on daily affairs, you gain the political capital which can potentially bring about benefits.

Secondly, political capital can consequently bring about social, economic, and cultural capitals. Such capital inequality contributes to stratification in rural China consistently. Why can political capital result in capital gaps in other forms of capital? It is because different kinds of capital are related with one another. Bourdieu thought that different types of capital are inter-convertible one into another. As Casey said, "Inter-conversion is strongly metaphysical in orientation since exchanges between material and non-material forms are involved"⁴⁰, and also it is not equally possible in all directions⁴¹. Based on the context of rural China, political capital and social capital are close to each other. Social capital is the possibility of using social resources in social network. In the Chinese cultural context it corresponds to 'Guanxi (关系)', or 'social connection', the Chinese way to gain social resources. Social capital can be seen as the bridge between political capital and economic capital.

36 即家国同构：国家权力在家族运作中的复制，所谓的“国法”、“家规”，以此维系社会稳定。

37 The Constitution of PRC in 1982, Article 111.

38 Daniel Schugurensky, *Citizenship Learning and Democratic Engagement: Political Capital Revisited*, The 41st Annual Education Research Conference: Conference Proceedings, pp. 417 – 422, at 420.

39 Ibid., pp.420.

40 Op.cit., Kimberly Casey, pp.3.

41 Op.cit., Kimberly Casey, pp.3.

According to Lin Nan's theory⁴², a higher structure position can lead to more social capital; the one who has more social capital can get a chance to have more access to better economic resources, in China, which means chances like establishing a factory or natural resources trading. Actually, pragmatically speaking, economic capital refers to many aspects including average income per year, quality of daily life, quality of education, and to most Chinese especially the concept of 'face'⁴³ etc.

The economic capital in rural China seems to have greater importance than in urban areas. Two reasons can explain this. First, the gross economic capital in rural China is much less than that in urban area. There is less of a chance for both quantity and diversity for people in the Chinese countryside to gain economic capital. Hence, as a scarce resource, competition for economic capital among people in rural China is furious. Second, based on what aforesaid, however, because economic capital is connected to other capital, especially the political capital, the chance to gain economic capital is not equal to every household, which means that higher political positions brings more economic capital. Unlike when there is a mature economic system on urban area, economic capital embeds itself into social network and political structure deeply.

Based on investigation in Z village, it is obvious that upper class persons in this village mostly belong to the local political elite, typical as the secretary of the Party and the village director. The secretary has a family-owned toy factory. And his father was the former secretary of the Party. The village director runs his own business in the Jixi county town. Actually, his entire family is living in the county. Both of these two political elites are richer than any other villages. As a matter of fact, their economic capital including the chance to set up a factory and business information, are all benefits from their status as political elite.

(2) External cause: in rural China, which kind of people can gain more benefits from urbanization?

Urbanization should be seen as the external cause for stratification in rural area. 'External' means the process of urbanization happens in cities, which of course is outside of the rustic region. Although now China is under an 'urban-rural' division on every dimension, the economic connection between these two parts can not be ignored. Urbanization exerts its influence on stratification indirectly. When analyzing the influence of urbanization, political capital also should be taken into very consideration.

42 Op.cit., Lin Nan. In his book, as aforementioned, Lin Nan put forward to seven assumptions to explain the relationship between social capital (wildly speaking, including political capital) and economic capital. He used several instances to prove his series of assumptions.

43 面子，门庭，皆需经济能力之装饰。这是中国社交文化中必不可少的一环，亦是极为重要之推动力。面子涉及诸多方面，如一家之收入、房子建设之水准、子女教育质量等。在Z村的实地调查过程中，村民对于面子之重视，一如普天下的华人群体。而普遍而言，访谈对象对于自身之经济能力与获取经济收入的途经（经济资本），有着较为清晰的认识。

a. What can urbanization provides to rural area?

The urban-rural dichotomy in China nowadays causes unbalanced development. Li Changping wrote a letter to Premier Zhu Rongji emphasizing the ‘ACF Issues’, namely issues of the agriculture, the countryside, and the farmer. In China, the central government initiated ‘feedback from industry to agriculture’ in the year of 2004. As Joseph Stiglitz who won the Nobel Prize on economy in the year of 2001 once said, the high-tech in America and high-speed urbanization in China are two main engines promoting global economic development. Certainly, Chinese urbanization has huge influence on rural China. What urbanization can provide to rural areas concentrate on three aspects:

Firstly, cities, suburbs, and towns can provides jobs for surplus male and female labor forces in rural areas. Peasants who work in urban areas form the peasant-laborer group. “There are 490 million labor forces out of the 900 million rural population, in which 300 million or more are farming, and the rest 200 million are non-farm job takers, 120 million of which are working out of their home village or home province.”⁴⁴ Secondly, urbanization provides huge market to rural China, which can promote township enterprise’s development. Thirdly, urbanization provides much better cultural and medical conditions for peasants.

b. In rural China, different classes benefit from urbanization differently

In fact, not everyone in rural China benefits the same from urbanization. The profit distribution is influenced by political capital directly.

To those capital owners, political capital and economic capital can convert into each other. They can turn their political into economic capital. For example, the village director in Z village set up his own factory in Jixi town several years ago. His daughter now works in Japan, and his son set up a company with the director’s financial aid. Extremely speaking, in some provinces which have plentiful natural resources, village directors or Party secretary can gain ownership of mineral resource, which brings amazing wealth to them.

To most peasants, working in city is the best way for them to earn money. In Z village, most male labors choose to work in Jixi County, or cities around, like the city of Nanjing, Hangzhou, or Shanghai. Based on investigations, their monthly incomes range from 3,000 Yuan to 6,000 Yuan. Although such a wage level is higher than the average level of Chinese rural area aforesaid in the Chart 1.2, they are still considered as middle class when comparing with the real upper class in Z village.

To some peasants who have no specific skills or other kinds of human capital⁴⁵, they can just make daily ends meet because their income is meager. I met a man around fifty years old in Z village. He has no children, and he and his wife live off a small

⁴⁴ Op.cit., Xueyi Lu, pp. 8.

⁴⁵ Here the human capital means individual ability to earn money, such as a specific skill, or educational background.

farmland. His yearly income is just several thousand Yuan. He has never been political leader in Z village. What he gets from the urbanization is almost nothing.

4. Stratification solidification: current situation in rural China

Based on Sun Liping's theory, the stratification in Chinese society today is solidifying gradually⁴⁶. Interest groups, who gain economic interests from political capital under the current CCP bureaucratic system, fabricate their social networks in which they can accumulate amounts of social, economic, and cultural resources. And they consist of a fixed relationship circle which the outsider has no chance to enter. Such serious social inequality decreasing opportunities for the mass brings about a series of side-effects, such as social and political instability.

In rural China, the process of stratification has not finished yet. Nonetheless, the danger of solidification of stratification has occurred. The upper class in rural areas consolidates its preponderance position through two ways.

(1) Use economic capital to keep the 'ownership' of political capital

Based on Bourdieu's inter-convertibility theory, economic capital can convert into political capital reversely. Generally speaking, economic elites in rural China are always those who have strong social ability. Thus, they have more advantages to get or maintain political capital. As Lu Fuying said, "economic elites governing a village is now a form of self-governance by villagers themselves. Since their authority rises from the villagers, those elites are naturally subject to the approval of the village"⁴⁷. Obviously, the economic capital can help to maintain the political capital, and further to help to maintain the advantageous position in the social stratum.

(2) Strengthen cultural capital through investing in education

Cultural capital always plays a significant role in Chinese society. Cultural capital, to Bourdieu, means educational background, aesthetic taste, and cultural identity etc. In Chinese society, due to the fact that education is directly connected with one's future, especially to people in rural China who lack other opportunities for social mobility. Hence, education is of great importance to the distinction between different classes. Indeed the educational inequality among different classes is more and more obvious. Bourdieu once did an analysis of the French university education system. He found that students from the upper class are more likely to enter better universities at a younger age, and choose better majors than students from middle or lower classes inasmuch as their better ability, such as linguistic competence, which they get from

46 孙立平,《断裂-20世纪90年代以来的中国社会》,[M].社会科学文献出版社,2003;《失衡-断裂社会的运作逻辑》,[M].社会科学文献出版社,2004.

47 Lu Fuying, Village Governance by Economic Capable Persons: A New Pattern of Rural Politics in Rural China, *China Economist*, Vol.7, No.4, pp.98 – 106, July – August, 2012. pp.101.

highly-qualified high schools as well as family education⁴⁸.

For economic purposes, the higher one's education background is, the better career and income one can expect. Based on their economic advantage, the upper class in rural China invests more in their children education than the middle and lower classes. This has far-reaching influence on the stratification solidification in the next generation. Namely, generally speaking, the higher educational level that children from the upper class enjoy, the better their future will be, as compared to children from middle or lower classes. Actually, the next generation will inherit its class identity from their parents. Like in Z village, most children from the middle class study in Anhui Technology University, or other provincial universities. In China, Anhui province is lack of resources of high education when compared with Jiangsu province, Beijing city, or Shanghai city etc. By contrast, the village director's daughter once studied in Japan. His son got his bachelor degree from a university in Hangzhou, and although his university is not famous, the city of Hangzhou is much better than cities in Anhui province.

6. Inequality in this generation, and such inequality will be inherited by the next generation

As for this generation in rural China, stratification is heavily influenced by the unequal distribution of political capital. Although the process of stratification has not been fully accomplished yet, the danger of stratification solidification has appeared.

Capital can be inherited. Although political capital can not be inherited directly under the autonomy principle in rural China, it can transform itself into economic and cultural capital. These two important capitals are beneficial to the next generation. Due to this, the inequality will increase consistently, and then bring about even more severe instability to rural areas. Is there any benign development model for rural China to establish a relative equal society? In this society, not only the capital owner but also all villagers can benefit from the political capital.

7. Huaxi model: a real equal socialism model that can solve the stratification problem?

In many years, Huaxi village is considered as a very successful socialism model in China. Deng Xiaoping, Jiang Zeming, and Hu Jintao, CCP three generation leaders all spoke highly of Huaxi village because they saw it as a typical token of socialism with Chinese characteristics.

Huaxi is unusual because of its the communal fund as a holdover from a village-owned enterprise⁴⁹. Huaxi is proud of its collectivism joint-stock economic

48 [法] 布迪厄, 帕隆索 (P. Bourdieu, J-C. Passeron), 邢克超译, 继承人(*Les Héritier*), [M]. 北京: 商务印书馆, 2002.

49 Nathaniel Flagg, Branding Heaven: Commodity, Fantasy, and Conceptual Architecture in the Chinese Countryside, *Columbia East Asia Review*, pp.19 – 38, at 23.

model. It seems that every villager can gain relative equal profits, which can avoid the stratification. However, we should question that whether this equality is real. Because residents in Huaxi village are much richer than any other villagers in rural areas, some essential issues are concealed.

In the Huaxi model, superficially speaking, political capital is not used to increase personal interests, but to develop the village-owner enterprise, which brings about benefits for everyone. It seems that there is no lower class in Huaxi village, all belong to middle class. However, there is in fact an upper class in Huaxi village, which controls almost all village-owner wealth under its current political-economic system. From this perspective, the stratification in Huaxi village is extreme, different from other Chinese villages, has its own character. Different from the Z village in which village political elites focus more on public affairs, leaders in Huaxi village, especially the Party secretary Wu Renbao concentrate the most on developing collectivism economy.

However, there are several serious inside issues in Huaxi village. First, the connection between political capital and economic capital is tighter than any other places in China. Wu Renbao's family members are almost considered to be the leader group in Huaxi village. Thus, they control almost all political capital. Based on these political capitals, they can further control economic capital like by making decisions regarding the affairs of village-owner enterprises under the collectivist system. Certainly, their incomes are higher than average villagers. We can see that the inter-convertibility between political capital and economic capital is even easier than Z village. Secondly, based on the first point, is Huaxi a real non-stratified village? Wu Renbao's four sons occupy 90.2% amount of village capital⁵⁰, thus making the family the upper class in Huaxi village. Especially after Huaxi village expanded its area to several surrounding villages, the new Huaxi village confronted even more severe inequality in its economic. Thirdly, Huaxi village insists on its so-called socialist way through collectivist governances on social, economic, political, and cultural dimensions, which is close to a totalitarian rule. Thus, the Huaxi model can not really solve the stratification issue in rural China under current CCP system, although villagers in Huaxi village are relative rich.

8. Brief conclusion: the dilemma in front of rural China

Obviously, political capital in rural China can bring about inequality on economic and cultural capitals, which not only impacts this generation but also has side-effect influence on the next generation. The stratification in rural areas has appeared, and has the tendency to be consolidated. Under current political system, no model can be used to solve the stratification effectively. From relative sociological theory, a modern

50 周怡，中国第一村：华西村经济转型中的后集体主义，中国高校人文社会科学信息网：
<http://www.sinoss.net/2010/0313/19437.html>.

public sphere should be established to undermine the huge influence of political capital.

Tocqueville once analyzed the democracy in an American town. He thought that the American town's democratic way was great. However it confronts the danger of totalitarian rule⁵¹ because the mass will be accustomed to being ruled by a political elite. The situation in rural China today is much more complicated than American town then. Under the current CCP political system, direct democracy in rural China is limited due to Party members, who have priority to gain political capital. Hence, it is difficult to form a real public sphere in rural China. As Harbermas said, the public sphere is where "citizens act as a public when they deal with matters of general interest without being subject to coercion, thus with the guarantee that they may assemble and unite freely, and express and publicize their opinions freely"⁵². Middle and lower classes in rural China need to protect their personal interest through a mature public sphere. However, decision-making on political and public affairs in rural China are mostly determined by elites in political system.

Hence, now, rural China confronts a dilemma: if the political capital owners concentrate on personal interests, the stratification in rural areas will continuously enlarge; if the political capital owners take a collectivism socialism path like Huaxi village, the danger of stratification will decrease, but also increase from a modern perspective.

Bibliography:

- [1] Larry M. Wortzel, *Class in China: Stratification in a Classless Society*, New York: Greenwood Press, 1987.
- [2] Lin Nan: *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press.
- [3] Frank Leeming, *Rural China Today*, New York: Longman Group, 1985.
- [4] 孙立平, 断裂: 20 世纪 90 年代以来的中国社会[M].北京: 社会科学文献出版社, 2003.
- [5] 孙立平, 失衡: 断裂社会的运作逻辑[M].北京: 社会科学文献出版社, 2004.
- [6] [法] 布迪厄, 帕隆索 (P. Bourdieu, J-C. Passeron), 邢克超译, 继承人(Les Héritier), [M].北京: 商务印书馆, 2002.
- [7] [法] 托克维尔 (Tocqueville), 张扬译, 论美国的民主 (*De la Démocratie en Amérique*), [M].湖南文艺出版社, 2001.
- [8] Pierre Bourdieu, The Forms of Capital, *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, New York: Greenwood, 1986. pp. 241 – 258.
- [9] Nathaniel Flagg, Branding Heaven: Commodity, Fantasy, and Conceptual Architecture in the Chinese Countryside, *Columbia East Asia Review*, pp. 19 – 38.
- [10] Daniel Schugurensky, *Citizenship Learning and Democratic Engagement: Political Capital Revisited*, The 41st Annual Education Research Conference: Conference Proceedings, pp. 417 – 422.
- [11] Gao Lian-ke, On the theory of Coleman's Social Capital, *Journal of Bei Hua University*

51 [法] 托克维尔 (Tocqueville), 张扬译, 论美国的民主 (*De la Démocratie en Amérique*), [M].湖南文艺出版社, 2001.

52 Jürgen Habermas, The Public Sphere, *Princeton Readings in Political Thought*, pp. 709 – 714, at 709. In the village director's eyes, there has appeared a public sphere in Z village because villagers can organize kinds of activities in daily life. For instance, they organized a team in order to help the elderly in village. Indeed these activities reflect the development of villager autonomy, however, a modern public sphere which builds on modern political system. We cannot ignore the difference.

- (*Social Science*), 2005.6(2).
- [11] Kimberly Casey, *Defining Political Capital: a Reconsideration of Bourdieu's Inter-convertibility Theory*, Illinois State University Conference for Students of Political Science, April 4. 2008.
- [12] Jurgen Habermas, The Public Sphere, *Princeton Readings in Political Thought*, pp. 709 – 714.
- [13] Jialu Liu, Human Capital, Migration, and Rural Entrepreneurship in China, *Indian Growth and Develop Review*, vol.4, NO.2, 2011, pp.100 – 121.
- [14] Lu Fuying, Village Governance by Economic Capable Persons: a New Pattern of Rural Politics in China, *China Economist*, Vol.7, NO.4, July – August, 2012, pp. 98 – 104.
- [15] G William, Skinner, Marketing and Social Structure in Rural China, Marketing and Social Structure in Rural China, *The Journal of Asian Studies* (pre-1986), Nov. 1964, 24, 3 – 44.
- [16] Xia, Min, Social Capital and Rural Grassroots Governance in China, *Journal of Current Chinese Affairs*, 40, 2, PP. 135 – 163.
- [17] Zhang, Xiaohe; Flnley, Christopher; Watson, Andrew. Growth of China's Rural Enterprises: Impacts on Urban-rural Relations, *The Journal of Development Studies*, 31.4 (Apr. 1995): 567.
- [18] Peng, Yusheng, Kinship Networks and Entrepreneurs in China's Transitional Economy, *The American Journal of Sociology*, 109. 5 (Mar, 2004): 1045 – 1074.
- [19] Yao, Shujie, Economic Growth, Income Inequality and Poverty in China under Economic Reforms, *The Journal of Development Studies*, 35. 6 (Aug 1999): pp. 104 – 130.
- [20] Fei-Ling Wang, China's Evolving Institutional Exclusion: the Hukou System and Its Transformation, *China Papers*, New Zealand Contemporary Chin Research Center, 2009, No. 18, pp.1 – 28.
- [21] Yunxiang Yan, The Impact of Rural Reform on Economic and Social Stratification in a Chinese Village, *The Australian Journal of Chinese Affairs*, No. 27 (Jan., 1992), pp. 1-23, The University of Chicago Press, College of Asia and the Pacific, The Australian National University, Australian National University is collaborating with JSTOR to digitize, preserve and extend access to The Australian Journal of Chinese Affairs.
- [22] Xueyi Lu, Institute of Sociology, Chinese Academy of Social Science, *The Changing in Agriculture, the Countryside and Farmers in China*, presented on the website: <http://www.sociology.cass.cn/english/papers/P020070306306524375309.pdf>
- [23] Qian Forrest, Zhang, Singapore Management University, Status and Hierarchy: A Framework for Understanding Stratification and Inequality in Today's China, *In Understanding Chinese Society* (pp. 96-110). London: Routledge. Available at: http://ink.library.smu.edu.sg/soss_research/1037
- [24] Yasheng Huang, Professor of Global Economics and Management, China Boom: Rural China in 1980s, July 1, 2010, presented on the website: <http://asiasociety.org/essays/detail/212>
- [20] 周怡, 中国第一村: 华西村经济转型中的后集体主义, 中国高校人文社会科学信息网: <http://www.sinoss.net/2010/0313/19437.html>.
- [21] 何朝银, 人口流动与当代中国农村社会分化 [J]. 浙江社会科学, 2006.02, 95 – 102. pp.98
- [22] 朱宏军, 郭玉亮, 转型期农村社会阶层分化的现状及特征分析 [J]. 南京林业大学学报 (社会科学版), 2005, 04, 15 – 19, pp.16 – 18.
- [23] 陆学艺, 张厚义, 张其仔, 转型时期农民的阶层分化—对大寨, 刘庄, 华西等 13 个村 庄的实证研究 [J]. 中国社会科学, 1992, 04, 137 – 151, pp. 140 – 144.
- [24] 张瑞, 改革开放以来国内学者有关农村阶层分化研究的综述, [J]. 农业经济, 2012, 06, pp. 60 – 62.
- [25] 刘洪仁, 杨学成, 陈淑婷, 我国农民分化的测度与影响因素分析, [J]. 山东农业大学学 报, 2007, 02, 89 – 96.

温州龍船と地方社会変遷の民族誌研究
吳天躍 (WU TianYue, う・ていえんゆえ) *

一、はじめに

本民族誌¹は、温州地区の伝統的龍舟（端午の節句にレースを行う龍を象った船）と現代的スポーツとしての龍舟活動「健身龍船」（訳者注：以下、「スポーツ龍船」と呼ぶ）を研究対象とし、清の晩期や民国期から現代までの長い歴史的時間の中で考察を進め、1980年代の改革開放後の変化に重点を置く。この一帯の地方的特色を濃厚に残す龍舟活動を手がかりに、限られた視野ではあるが、地方社会の文化変遷を描くことを試みる。

手法において、主に日本の民俗学者である福田アジオの「個別研究法」あるいは「地域民俗学」の概念を借用するのであり、異なる資料間の比較研究（重出立証法）を採るわけではない。このため、本文中では龍船競争現象の起源や、各地の競争習俗の文化伝播とその相違については論じず、地域社会の集団の長期的相互作用と実践から、特定の地域の人々の繋がりや特定の民俗事象が伝承する条件、そしてその原因と意義を明らかにする。

具体的な資料となるのは以下の三種類である。1、歴史史料。主に参考とするのは、宋代以降の温州地方史（瑞安市を主とする）や『東瓯逸事匯録』、『岐海瑣談』、『張綱日記』、『厚莊日記』などの文人の著作である。このほか、地域の重要な碑文、民間伝承、中華人民共和国建国後の瑞安市档案馆所蔵の政府が龍船を禁止した際の公文書などである。2、参与観察とインタビュー。地域に詳しい古老（郷土史家や一般住民含む）へのインタビューを行い、重要な口述資料を収集した。自ら現在のスポーツ龍船クラブの関連活動にも参加し、インタビューを行った。3、現代の報道や、政協委員の提案や龍舟フォーラムの情報。これらの報道や提案、ネット上のやり取りについては、初歩的な言説分析(discourse analysis)を行った。

本民族誌は、文化の「深い描写」を通して、以下の問題へ回答しようとする試みである

- 1) 温州の伝統的龍舟活動の過程全体、現地の人々が言うところの、「深度遊戯(deep play)」とは何か。伝統的龍舟活動はどのような社会関係を構築していたのか。
- 2) 現代のスポーツ龍舟はどのように温州に伝わったのか。また、いかに伝統龍舟と形式的に組み合わせたのか。

龍船活動解禁の後、積極的に省級および国家級の非物質文化遺産への登録を申請し、「中国龍船名城」にするための努力を行った。これらの事実、国家や地方政府と龍船の間のどのような複雑な関係を反映しているのか？

* 2012年南京大学社会人類学研究所修士課程修了（法学[社会人類学]修士）。現在、中央美術学院人文学院文化遺産専攻博士課程に在籍。

¹ 本報告論文は、報告者の修士論文『温州龍船と地域社会変遷の民族誌研究』を圧縮して書き直したものであり、紙幅の関係から多くの文献名や図表、データが省略されている。日本国立民族学博物館の外来研究員・今中崇文氏には本論の修正に対して的確な意見をいただいた。今回の研修時に、国立民族学博物館の河合洋尚助教から広州西関地域の龍船に関する考察も教えていただき、それも本論に大きな示唆を与えているが、日を待って補充をしたい。心より感謝申し上げる。

二、伝統的龍舟活動と社会関係の構造

渡辺欣雄は香港長洲島の水上市民と漁民が中心となる「龍舟祭」を考察した後に、「龍舟祭」は儀礼表現により構成される複合的な祭祀であることを指摘した。儀礼過程の三つの側面、すなわち龍舟の聖化儀礼、厄払い（祝福攘災）儀礼、龍舟競漕儀礼と温州龍舟の基本儀式構造には共通性がある。吳麗平は温州韓田村端午龍舟競漕への観察を通して、龍舟競漕は地方社会が共同して死者の世界とともに一種の良好な秩序を打ち建てるためのものであると考えた。（吳麗平、2007:352-366）

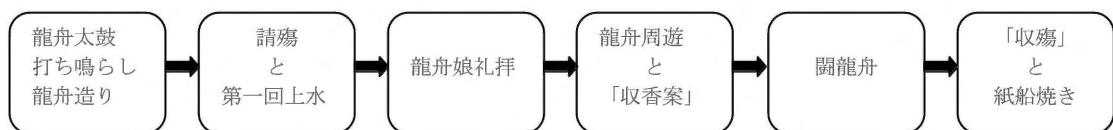
しかし、伝統的龍舟競漕は鬼神の世界と作り出す一種の秩序であり、また人間同士の互惠的交換でもある。本報告では、世俗的側面の互惠関係に重点を置く。つまり、地方社会がいかにして龍舟競漕の助けを借りて、社区（学術上はコミュニティとも訳されるが、最小行政単位という側面も持つ）の境界や集団間の関係を確認し調整するのかということである。

温州地区龍船の活況は客観的には、中国東南沿海地区密集している河川網に非常に関係がある。本研究が対象とする瑞安龍船は主に温瑞塘河一帯で活動している。温州では、山岳部の泰順、文成などを除いて、沿塘河、瓯江兩岸の住民は等しく龍船の悠久伝統を有している。本稿が考察する村落も温瑞塘河沿岸に分布している。比較の便宜のため、瑞安の中の莘塍鎮、塘下鎮および都市部（元・城関鎮、元・安陽鎮）を最終的に主なフィールドとした。瑞安を選択したのは、瑞安龍船は温州龍船の中で「最も迷信的で、最も封建的である」口承があり、多くの龍船の事件がここから生まれており、さらに郷鎮を跨いだ活動を有し、瓯海や平陽などとの密接な往来の習慣がある。統計によると、1980年代に瑞安全县は毎年数百の龍船が水上活動に参加しており、中でも1985年には408隻にいたり、温州市全体の龍船総数の3分の1を超過しており、浙江省全体の龍船活動の流行年には総数の30%前後を占めている。期間も長く、龍船活動の長い年には農曆4月から始まり、農曆「六月六」に終わる（瑞安龍船活動簡史、2004: 23）。しかし、瑞安の龍船は2008年から政府による禁止を受け、瓯海区新橋鎮と潘橋鎮、樂清樂成鎮の伝統的龍船はなお活況なので、比較対象とした。

蛇行した塘河の兩岸には、数百の村落が存在している。端午の節句になると、その数百の村落が龍船試合のために集まり、格闘技の大会を彷彿とさせ、歴史的記憶や、世代の怨讐や悲喜栄辱のすべてが噴出する。

温州一帯の龍舟のスケジュールは、一般には農曆4月の頭から始まり5月下旬に終わるというものであり、この活動は基本的には以下のように図示できる。

表1 温州の伝統的龍舟の行事過程の模式図²



毎年端午の競漕の集団的狂騒は民衆の日常生活のリズムとはかけ離れたものであり、内部では各種の博打や喧嘩が起きている。以下では、異なる社会的役割の文化実践（cultural practice）および異なる部分の社会的意義を分析する。

2 ここでは理解しやすくするために簡略化している。

(一) 龍舟娘と龍舟活動の区域区分

龍舟活動は現地の影響が深く入り込む曆の伝統として、一定の実践を墨守し、地理空間上に固定的な記憶を形成する。このため、龍舟活動の開催は、現在の行政区の区分に基くものではなく、歴史上の区画である「片区」に従っているのである。この片区とはまるで「勢力図」のようなものである。瑞安龍舟を事例にすると、慣習に従って、4つの片区に分けられる。ひとつの片区の龍舟は競漕時には基本的にその片区の龍舟だけが闘龍をする。瑞安では、片区ごとにその片区に所属する龍舟娘を持つ。龍舟娘とは何か。龍舟娘も社区のあるひとつの龍舟、一般には各片区の古い龍舟のことを指し、闘龍には参加せず、主に各龍舟間の争いを調停を行い、「裁判」の役割を担う。龍舟娘は通常はその村の民間信仰の廟に括りつけられている。その片区の所有する龍舟は、名義上はすべてその龍舟娘の子龍や孫龍なのである。これらは同じ一つの龍舟娘の龍舟に所属し、現地の人の言によれば、すべて「兄弟龍」³なのである（訳者注：現代中国語では「娘」は日本語の「母」の意を表す場合がある）。毎年、各村の龍舟は「上水」や散河、収香時には、すべて各自が所属する龍舟娘を参拝するのである。

瑞安龍船は慣習に従い、4つの片区に分けられる。ひとつの片区の龍船は競漕時には基本的に自分の片区の龍船と闘龍をする。具体的に言えば、市区（老城区が所轄する範囲で、安陽新区を含まない）と上望鎮がひと組になり、莘塍鎮と汀田鎮、東山鎮がひと組、塘下鎮と大典下がひと組、飛雲鎮は単独でひと組となる。これら片区およびそれらの歴史は龍船娘を以下のように定めている。

1) 市区および上望。龍船娘は三隻に限る。西門河埠頭（竹排頭）、三官殿的太白老龍、東門硐橋頭の青龍（城内と西郊、北郊龍船は塘河へ出るときに必ず通る場所なので、このため格が比較的に高い）、南門濠河潭天後宮の金龍。

2) 莘塍、汀田および東山。これら地方の龍船娘はすべて莘塍下村東堂廟の大青（別称、烏龍娘、青龍娘）。

3) 塘下と大典下。この両地方はの龍船娘は塘西にある。

4) 飛雲鎮。平陽県と接しており、龍船を造る習慣は瑞安ではなく平陽に近い。飛雲一帯は水域に沿って、数村でひとつの龍船社を構成しており、俗には18社、24社、36社あるとも言われるが、18社が18隻の龍船を所有している。各社が1隻の龍船を所有していることになる。その他の龍船はすべて兄弟龍である。ひとつの社の中に、地域で最も優勢な村があり、社の中に河主がおり、これが「大兄」と呼ばれ、龍船が集まる時に、河主の龍船は巡回と秩序維持のみを行い、他の龍船も挑発行為は行わない。

注意すべきは、温州の龍船がもしもひとつの村の事であれば、今日のような状況にはならなかったであろうことであり、またこれまで地理的要因や生態学的特性が看過されてきたと

³ 同じ「龍舟娘」に属し「兄弟龍」と称していても、塘下のフィールドワーク時に現地の人が言うには、龍舟の間の殴り合いは「兄弟龍」の間でも起きると言う。村民が笑って言うには、「これはよくわかるよ、兄弟喧嘩なんてよくあることじゃないか」とのことである。「兄弟龍」という概念は広義と狭義に分けられ、村民は異なる状況では異なるもののことを指していると推定される。「兄弟龍」の対置するのが「恩怨龍」で、歴史上衝突を行ったことのある龍舟のことである。恩怨の龍舟もおなじ「龍舟娘」に帰属することは可能である。瑞安塘下を事例とすると、塘下本鎮龍舟と恩怨の龍舟の関係にあるのは、肇平垵、前池、上馬、新坊、大典下の龍舟である。「恩怨龍」が存在する村の友人の間では、端午の節句の期間は行き来がなくなり、それが過ぎると普段の状態に戻る。

いうことである。温州の塘河は、温瑞や瑞平も含めて、村落の間を絹の織物が結び付けているかのようで、競漕に適した広い川面が広がっている。かつて東甌と呼ばれた一帯は、1980年代以来の大規模工業化や城鎮化以前は水郷であったが、80年代以降は水面の多くが埋められてしまい、龍船を造る条件が著しく損なわれた。

自然地理的要因も、フランスの人類学者のモースの言うところの「社会形態学」にあたる。各村落の龍船造りは、隣り合った村落同士で影響し、また競い合うものなのである。さらに村落共同体は、百年以上通婚圏を成しており、近隣村落の龍船は、自分の村落から嫁いだ女性の香案を貰いに行く。このような互酬制は、村落間の関係を強め、モースの言うところの「全体的社会事実」を構築する。

（二）龍舟頭家

龍舟頭家は、龍舟活動の組織者であり、村民から自発的に生まれるものであり、決して公衆が選出するものではない。頭家は一般にはひとつの団体を有している。大体10数人、現地の老年協会の老人が積極的に参加し、頭家およびその団体の構成員には、一般には既婚成人男性になる。新旧の構成員が構成する団体が共同で龍舟競漕に参加するのがこの地方の祭日の特色である。若者は案内状発送や、龍舟銀（龍舟作りの資金）集め、「収香案」の処理、「闘龍」の実行などを主に担当し、「請神」の儀式、喧嘩の仲裁、橋の上の巡回などは年上の人々により準備され指揮される。一般には、村幹部や工場経営者は龍舟頭家にはならない。というのも、龍舟競漕は事故がたびたび起きるので、頭家には責任がかかるからである。近年、龍舟頭家が「チンピラ化」する現象の遠因の一部はここにある。

（三）龍舟銀集め―「媛主銀」と「擺香案」

龍舟競漕は新旧の龍舟の建造や修理を必要とし、各種の器具や衣装、爆竹の買い入れや競漕後の宴会の準備等で資金が必要となるので、十分な資金が龍舟競漕の順調な進行を保証するのである。民間では、このための資金が「龍舟銀」と呼ばれている。明代の姜准、清代の張綱は著作や日記の中で一様に言及している。彼らの言及している「祭戸」や「祭戸之姻親」はすべて龍舟銀を納める習慣であり、今に至るまで続いており、今日の「媛主銀」（別称「新婦銀」）や「利市」に類似している。前者は、父母がその年の花嫁の娘に与える金銭や財産で、「媛主銀」と呼ばれ、花嫁への加護を意味している。後者は、よその村に嫁いだ娘（訳者注：中国語で「外嫁女」というので、以下：「外嫁女」）が「擺香案」の時に実家に送る龍舟の金銭のことであり、姻戚関係を確認するためのものである。外嫁女は社会ネットワークの結節点であり、実家と夫の家と妻の家を結ぶ両村落にとっての重要な紐帯であり、このような婚姻の事実によって発生する社会関係は「擺香案」の過程の中で強化することができる。このほか、擺香案も美名や声望と関係しており、外嫁女は実家に向かって夫の家の経済的社会的地位を見せると同時に、自分の村の人々に対して「面子がたつ」のである。

今のところ、「龍舟銀」の大きな部分は、現地の企業家や工場主から提供され、もし出費がかさめば、龍舟上で「端香闘」を行うが、こうした行動も「端発財」「討吉利」という意味が含まれている。「擺香案」の主体は一番初めは外嫁女であったが、次第に村の集団や工場等の社会単位へと変わっていった。「龍舟銀」で集まるのは、だいたい20万元前後で、これらの資金は1ヶ月ほどの時間のうちにすべて消費されてしまう。

費孝通や楊美恵ら研究者は、改革時期の「温州モデル」の背後の非経済的發展力に注意を払っている。彼らは、市場経済論理の外に消費あるいは「儀礼経済(ritual economy)」の論理があると考え、こうしたロジックは人に自分の存在の限界を越えさせるとした。強調されるのは、請求ではなく、散財である。(趙旭東[赵旭东]、2009)

楊美恵(2000)(2009)(訳者注：楊美恵「伝統、旅行する人類学と中国現代的言説」『中国農業大学学報』(社会科学版)第24巻2号、2007年、30-42頁、および楊美恵「<温州モデル>の中の儀礼経済」『学海』2009年、21-31頁)は、自身の長年の温州フィールド調査において、温州経済の奇跡的特徴に関心を持った。すなわち、「儀礼経済」の復興と拡大である。楊はこれら儀礼における散財は温州経済構造に匹敵する個人の蓄財や富の再分配と社区建設において重要な役割を果たした。温州の儀礼経済はジョルジュ・バタイユの言うところの、「自主存在」を追求する自由と権利である。

ここでは、龍船活動の中での儀礼経済描出を試みる。これらの事例は、いくつかの方面では、上記の研究者の観察が実証できると同時に、龍船活動の中での消費の中で見出された事実は彼らの議論に挑戦するものでもある。つまりは、彼らは温州儀礼経済の描出に対して、いくばかりかの理想化や美化を行っている疑いがあるのである。人々の内部に様々な声があることは無視してはならない。

(四) 械闘と衝突

まさに歴史学者の陳熙遠[陈熙远](訳者注：陳熙遠「競漕の中の社会と国家：明清祝祭文化の中の地域アイデンティティ、民間動員と官によるコントロール」『中研院史語所論集』第79巻3号、2008年、417—496頁、原文中文)が指摘している通り、明清以降は、中国の伝統的祭日の中の端午の節句は他の祭日、たとえば元宵(訳者注：陰暦1月15日の夜)に比べて、地域アイデンティティをより強く呼び起こすものとなっている。温州では、宗族の伝統が濃厚で、伝統的龍舟は小社区(村落あるいは城鎮)の共同財産とみなされ、小社区ごとにひとつかふたつの龍舟を有し、舟体の色や旗、衣装には小社区ごとに異なり、各社区を表象するものであった。異なる社区の龍舟は端午の機関には周期的に「闘龍」に集まり、清晩期や民国期以来、龍舟事故を引き起こす械闘(訳者注：素手でなく道具を使った喧嘩)や衝突が頻繁に行われるようになった。競漕中の不正や龍舟事故は地域の歴史的記憶となり、長く続く怨恨を残すので、新時代の政府が民間の龍舟祭を管理する時に、事前に社区間の遺恨を調査し、解消する必要があった⁴。

械闘と衝突の原因は、表面上は龍舟事故により引き起こされることであるが、深く見ると、村落間の各種対立などが集中的に爆発したものなのである。郷土史家の許希濂は、瑞安一帯の龍船造りに現れる故事は都市部と郷村部に分けることができていると考えている。清末民国期に、瑞安都市部の械闘と派閥争いは関連しており、瑞安の農村の塘下、莘塍の械闘は宗族勢力とに関連性を持っている。解放前、瑞安都市部では、内部の水運が発達し、温州における最も有力な交通手段は水路であり、この水路は温瑞塘河に通じている。今日でもなお、西門河埠頭にその旧跡を見ることができ、当時は各種の密輸品、農具、生活用品がこれら港

⁴ 瑞安莘塍鎮の役所でインタビューを行った際に、思いがけず莘塍鎮の龍舟調査チームが作った「龍舟に関する歴史的怨恨情報一覧表」を入手した。その表には、非常に詳しく鎮内外で起きた龍舟に関する衝突の区域、発生原因及び程度が記録してある。

から温州小南門にいたるまで取引され、交易が非常に繁栄していた。ここで、西門派、南門派が形成され、勢力争いや埠頭の争奪戦を繰り広げた。水運は「担幫」を必要とし、多くの荷役夫がいた。埠頭労働者の間では生業の奪い合いが起き、喧嘩も絶えず、埠頭労働者の間で係争が起きても訴訟にはならず、責任は問われなかった。毎年龍船行事が来ると、その場を借りてこのときの怨恨が晴らされることになったのである。

上述の多くの要素、龍舟娘と片区区分、「媛主銀」と「擺香案」、祭日の集中する闘龍などはみな地域社会のネットワークに関連する構造に深く作用し、1年に1度の龍舟競漕はある程度龍舟片区の濃厚な感情を喚起し、古い共同体の境界を再確認させるのである。

三、スポーツ龍舟⁵の地域における伝播

龍舟活動により地域の衝突や械闘がたびたび引き起こされ、龍舟経費の割り当ては各種の不满を募らせ、1991年から2004年に至るまで、温州政府は龍舟を禁止した。2004年の解禁に至り、韓国の江陵による「端午祭」の世界無形文化遺産申請を受けて、中国国内では議論がわきあがった。温州の管轄する異なる県市が管理する龍舟の政策は一致しておらず、瑞安等は2008年以後にもまた禁止された。ここに至り、伝統的龍舟の衰退は明らかとなり、伝承者の断絶（龍舟の禁止は、世代間の龍舟活動の伝承に壁を持ちこんだ）や温州塘河の汚染、端午競漕と大学入試の時期的重なり、高級官僚と民間企業家の反対、巨額の運営コストなどの原因が、伝統的龍舟活動の伝承力の不足へと導いてしまった。生業様式の変化や伝統的住居構造の破壊、外来人口の増加、龍舟活動のための片区共同体の境界の曖昧化が、地域アイデンティティを弱化させた。こうした背景の中、スポーツ龍舟が若年層に関心を持たれ始めたのである。

温州地区がスポーツ龍舟を受け容れた時期は非常に遅く、2004年であった。温州樂清石馬龍舟クラブは最も早く公認されたスポーツ龍舟である。スポーツ龍舟の関心は一方では国際的龍舟のコンテストに関係している。なぜならば、参加するだけで、かならず標準の競漕龍舟が必要となるからである。温州では、スポーツ龍舟の推進と普及は「伝統的龍舟禁止」の流れを借りて、体育局の強制ではなく、完全に自発的な形で進んだ。

今のところ、温州樂清参網龍船掲示板のニュースは基本的には上記のスポーツ龍船が中心で、異なる地区の龍船の間では不定期に「集会」が行われる。「集会」とは、何席かの龍船が約束の場所に集合し、技術を切磋琢磨することである。スポーツ龍船は、新しい外来文化で、自然に「クラブ」の形式になじみ、かつての宗族の色合いは薄い。多くの若者が、スポーツ龍船を受け入れようとしているが、その背景は、これが気軽で気ままな競技だからであるということがあり、樂清の鄭氏が言うように、スポーツ龍船はルールが簡単で、また時期的にも柔軟で、伝統からのプレッシャーも多くないのである。

スポーツ龍船が伝統龍船と衝撃することは明らかなことである。伝統龍船を製造していた職人も多くの取引を失った。温州では今ではほとんどすべてのスポーツ龍船の製造地は、杭州祥瑞や大連である。杭州祥瑞標準龍船会社の唐代表は浙江省富陽の出身で、以前はカヌー製造工場の工場長であった。彼の父親もまたカヌーの製造者であった。ここにもスポーツ龍

⁵ スポーツ龍舟は、競技龍舟であり、標準龍あるいは22人龍と呼ばれる。主に現在のスポーツ行事で用いられる。具体的には、国際標準龍舟と国内標準龍舟は規格が一致してはおらず、大きさが異なる。

船とカヌーとの深いつながりが見られる。スポーツ龍船の普及は、同時に新人の漕ぎ手を伝統的民俗から引き離す結果をもたらしている。スポーツ龍船はすでに広く受け入れられており、温州各地で5人乗り龍船も試され始め、2010年には国家体育总局により各地域で5人乗り龍船についての講習が行われた。スポーツ龍船は常に自身を刷新し続けており、伝統龍船に比べて、もうひとつの「場」と見なせる。スポーツ龍船の発展論理は簡略化する傾向にある。

我々は、スポーツ形態のスポーツ龍舟を一種の文化体系とみなすことができる。このような新しい外来文化は、自然にクラブという形式と関係し、過去の宗族の色合いを拭い去り、龍舟の形状や競技規則はさらに標準化され、時期もまた自由となった。30代、40代の若者は巧妙に伝統的龍舟への愛着をこのようなスポーツ龍舟へと転移させた。過渡期においては、彼らはスポーツ龍舟専用の衣装を着用して、地域社区の伝統的大龍「上水」を手伝い、特定の宗教儀式を完成させ、出来る限り態度の上では比較的気の向くままにしていた。これと同時に、女子スポーツ龍舟クラブも現れ始めた。

調査対象の瑞安動感龍舟クラブを事例とすると、大部分のメンバーは、友人を通して紹介されたり、お互いにネット上で知り合ったりしている。彼らは元々は、各自の社区の中では伝統的龍舟の主力であったが、今では地域の境界を打破して集い、かつては所属していた社区の龍分舟が競争の相手となっている、クラブの普段の活動経費の一部分は会員費で、一部分は外の企業の賛助で賄われ、定期的にネットワーク上で会計を公開している。動感龍舟チームは、自費で国内でだけではなく、香港や台湾の龍舟大会に参加している。よい成績を収め、温州の龍舟クラブ業界では名高い。

四、国家と地域の相互作用の中の温州龍船

無形文化遺産への関心が高まる中で、温州政府は龍舟活動に対して、迅速に新たな動きに出た。新任の市委員会書記の陳某が浙江省の嘉興から温州へ着任し、嘉興時代に全国龍舟大会の招致に成功していたことから、今度はそのモデルを温州へと移植しようとしたのである。2011年以降、まず「温州市第1回龍舟大会」を開催し、温州龍舟協会を設立した。まもなく、龍舟拠点建設した。注目すべきは、龍舟大会や龍舟拠点はみなスポーツ龍舟のためのものだということである。「中国龍舟の街をつくろう」というスローガンがすぐ現地政府の行政の仕事の一つになった。また「龍舟旅行ブランドをつくろう」は近年来全国で流行っている「無形文化遺産申請運動」に呼応したものである。観光産業の発展と伝統民族文化の保護が「文化が台頭すれば、経済も盛んになる」という役人の主流の意識の下で縛られていくようになった。温州政府は伝統民族文化発揚の名の下に、海外華僑華人を動員して龍舟チームを設立させ端午の節句に龍舟競漕に参加させさせた。

温州龍舟は歴史上はずっと地方政府の統制を受け、役人の意識形態の変化が深い影響を及ぼしてきた。現在では、温州龍舟は「地域文化資源」というイメージの特色をもって現われ、開放性の中で新しい意義が求められた。様々な事跡は地域文化伝統を改めて重視しているかのように見える。どうして温州では龍船の解禁と禁止が繰り返された伝統龍舟が姿を変えて改めて歴史の舞台に立ったのか。ここでは、範可(2007)の観察を「他山の石」とすることができる。伝統あるいは文化遺産は「地域」は構成する「地域」の重要な資源となる。多くの地域のイメージ建設もグローバル化と関係している。1980年代には福建省の一部の官吏

が、もし十分に地域の特色を打ち出せれば、外部の関心を惹くことができ、地域の経済発展につながると考えていた。観光業の発展に伴い、世界各地で観光誘致目的の地域文化の伝統復興運動が起きた。温州「地域龍船文化」も新しい意義を見出した。しかし、温州龍船文化復興は、官民双方の局面において、完全に異なるロジックを有し、相互協力は「貌合心離（表面上のみの同調）」であった。民間の関心は外部の関心を集めることにはなく、伝統の慣性によるものであるが、近年では伝統の伝承もおぼつかなくなっている。

五、伝統龍舟からスポーツ龍舟へ―異なる「場所感覚」の構築

かつての研究者はおしなべて伝統的龍舟民俗とスポーツの形をとって現われたスポーツ龍舟とを切り離して論述しており、進化論的な観点を得ただけで、この二者は現地の人々の生活の中ではいかに異なる意味を持っているかについての関心が少なかった。本報告は温州龍舟自身の歴史的文脈を考察するにあたって、伝統龍舟とスポーツ龍舟とが異なる「場所感覚（the sense of place）」を構築することが明らかになった。

伝統的龍舟活動の参加者は過去からの地元宗族や村落連盟の義務に基く「機械的団結」（mechanical solidarity）から解き放たれ、独立した身分でスポーツ龍舟ゲームに参加している。この一連の変化は、外部の中国社会の「個人化」過程が反映している。元々、龍舟に凝集していた「場所感覚」は希薄化あるいは萎縮してしまい、一種のアイデンティティの希求へと転じ、こうした新たなアイデンティティは、さらに開かれた外部世界へと自我を開示することなのである。スポーツ龍舟ゲームの参加者は従来の地域的境界を打破し、「深度遊戯」はここにおいて最も素朴な意味での「競技ゲーム」へと失墜した。スポーツ龍舟活動の区域も徐々に元々の所属していた共同体からは乖離し、物理空間上で言えば、「龍舟拠点建設」が実施され、従来使用していた水域は歴史上の龍舟片区とは無関係な物へと変えられた。感情の面から言うと、スポーツ龍舟の栄枯盛衰は「地域」の発展とは無関係になった。次に、女性は前後の二つの龍舟活動で異なる役割を担っていたが、彼女らも無形のこうした「場所感覚」を作り変えた。女性はかつては社区共同体の付属物の性質があったのが（祭日儀式の準備や、「媛主銀」、「擺香案」）、スポーツ龍舟に参加する独立した個人となった（各種の龍舟大会では、女性のための女子龍舟が設けられている）。興味深いのは、グローバル化を背景として、地方政府は龍舟の特色を借りて「地方性(locality)」文化価値を追求していることである。普遍性（標準化）を追求するスポーツ龍舟と地方の特色を表象する伝統的龍舟のそこでの力関係は考えさせられるものである。

本稿を提出する前に、筆者は故郷の温州に帰って、追跡のフィールド調査を行い、2013年8月8日の温州龍門陳龍船の大会を見学した。会場で筆者は、以前のフィールド調査で知り合った樂清籍の龍船人鄭爽氏と再会した。彼が言うには、ここ2年のスポーツ龍船は、樂清も瑞安も数量的には下降傾向にあるとのことであった。彼の考えでは、その原因は、大きな大会の後には、敗者は意気消沈し、クラブ解散にいたってしまうことにあるという。ひとつの龍船クラブを運営することは容易なことではない。この両年で多くのクラブの間で吸収合併が起き、大会時にメンバーの貸し借りも見られ、こうしたことがいつも練習に参加しているのに、実力から乏しいため大会に参加させてもらえないメンバーの意欲を損なっている。こうした状況を受けて、異なる村落間で端午の節句には、伝統的龍船のメンバーも自由に合流参加し、地域身分もこだわらなくなり、これがまた旧来龍船によって作られていた社区の

境界を薄めるようになった。政府が行う龍船大会もこの過程を激化させた。2012 年の研究の初期段階は、温州龍船の歴史と現状の外観を得るためのものであったが、いまだに細かい具体的な議論には立ち入ることができていない。河合洋尚先生や今中崇文氏ら日本の研究者の薫陶を受けて、温州龍船と外部経済体制の変遷とを考察し、さらに社区内における人間関係が龍船に関連してどのように変化するのかをミクロなレベルから分析すべきであると考えるにいたった。これは今回の京都大学でのワークショップにおける最大の収穫である。

参考文献

(本論文に直接関係する文献のみ以下では挙げている)

- 1 渡辺欣雄『漢民族の民俗宗教：社会人類学的研究』天津人民出版社、1998 年。
- 2 吳麗平「伝統節句と地域社会の関係の構造：温州韓田村端午龍船競漕を事例として」『民俗典籍文字研究』第 4 号。
- 3 中国共産党瑞安市委党史研究室、瑞安市郷土史編纂室編『瑞安龍船活動略史』2004 年（内部資料）
- 4 趙旭東「散財のロジック：温州モデルと金融危機の背景」『探索と争鳴』2009 年 11 号。
- 5 Mayfair Yang.2000."Putting Global Capitalism in its Place:Economic Hybridity, Bataille, and Ritual Expenditure", *Current Anthropology*, Vol.41, No.4:447—509.
- 6 楊美恵「＜温州モデル＞の中の儀礼経済」『学海』2009 年 3 月。
- 7 陳熙遠「競漕の中の社会と国家：明清節祝祭文化の中の地域アイデンティティ、民間動員と官によるコントロール」『中研院史語所集刊』第 79 卷第 3 号、2008 年 9 月。
- 8 範可「伝統と地方：＜申遺＞現象が引き起こす思想」『江蘇行政学院学報』2007 年第 4 号。

(翻訳者注：上記では、中国語文献も名称等を和訳してある。原題等は中文論文を参照)

(翻訳：中山大将、巫靚)

Emerging Chinese Public Sphere in Multi-ethnic Malaysia:
A Case Study of the Hungry Ghost Festival and Philanthropic Activities

SAKURADA, Ryoko*

Introduction

Malaysia is a land of diverse ethnic groups where people who speak different languages, follow different religions, and enact different practices coexist. According to Tan, Chinese religions in Malaysia are very diverse among worshippers. They may worship different Chinese deities and visit various types of temples, but they all participate in the overarching complex of Chinese Religion (Tan 2000: 284). Chinese religion in Malaysia combines Chinese folk religion with elements of Taoist and Buddhist traditions and Confucian ethics (Tan 2000: 283).

In the seventh month of the Chinese lunar calendar, it is common to come across the vivacious ritual of the Hungry Ghost Festival in the Chinese communities of most Southeast Asian cities as seen in figure 1 below. It is the most widely observed festival in Malaysia, second only to the Chinese New Year (Wong 1967: 136). This ritual is believed to have origins outside of Buddhism and Taoism.



Figure 1: The Hungry Ghost Festival on the street of Singapore
August 25, 2012

* Lecturer at Ikuei Junior College, Gunma Japan. A cultural anthropologist by training, particular area of expertise is housing culture and Chinese kinship in Malaysia, including religious practices among them.

The Hungry Ghost Festival, also known as Zhong Yuen Jie (中元節), or Yu Lan (盂蘭) is the most popular and important folk ritual festivity practiced by Chinese culture in many countries. Traditionally, Chinese have considered the seventh month of the Chinese lunar calendar as the 'ghost month' in which ghosts, spirits, and deceased ancestors are believed to migrate from the lower realm (陰間) of the dead to the upper realm (陽間) where living descendants conduct their lives. During ghost month, people of the Chinese community believe that the deceased come up from the lower realm to visit their living descendants who pay them homage and request their protection.

This short paper is based on fieldwork conducted in Johor, Malaysia in the summer of 2012. By referring to brief ethnographic data of the Hungry Ghost Festival as practiced in a Chinese community of an average modern housing estate located in a Johor suburb, I will discuss how this extremely ethnic and intimate ritual event came to acquire significance as a public celebration for its support of community and philanthropic traits.

1. The Hungry Ghost Festival at Home and in the Community

The Hungry Ghost Festival is also popularly known as 'the feast for the wandering souls', and is held on the seventh lunar month. In this month, ghosts, sprits and the souls of dead ancestors are released from lower realm to wander the earth for 30 days, where the livings subsist. The souls of the dead who are ignored by living descendants or relatives may act out in mischievous ways. Therefore, descendants and relatives must prepare and burn a sufficient amount of paper money (紙錢), joss sticks, paper clothes (燒衣紙) and fine goods made of paper such as laptop computers, cell phones, and luxurious wrist watches in order to satisfy the material needs of the visiting ancestor spirits. Various foods and fruit are also offered so that the deceased souls are not hungry. Rice (both cooked and uncooked) and candies are thrown onto the road to gratify any straggling ghosts (Wong 1967: 136).



Figure 2: Paper-made cell phones for ancestors
August 25, 2012

In 2012, the 'ghost day' (the fifteenth day of the seventh lunar month) fell on August 31st. On that day, most Chinese families in Malaysia conducted the domestic rituals for the deceased ancestors by preparing ritual food such as fried rice vermicelli (炒米粉), roasted pork belly, boiled whole chicken, fried whole fish, and Chinese biscuits. The main focus of the Hungry Ghost Festival seems to be paying respects to deceased relatives and ancestors by preparing and offering a feast as though the spirits were still living members of the family. Mass celebration opportunities also occur in the community; the Hungry Ghost Festival society organizes community events to hold Taoist rituals, traditional Hokkien opera (閩劇), concerts (歌台), and a charity dinner accompanied by an auction (平安宴).

From September 2nd to 4th, 2012, the community-based Hungry Ghost Festival was held at *Taman Tawar Jaya*. This is a modern housing estate pseudonym used in this paper. I participated and observed this festival from the first day of preparation to the charity auction dinner on the final night. Usually, Chinese Malaysians organize the Hungry Ghost Festival according to the social groups to which they belong such as occupational, regional, and clan associations, ritual communities, street communities, and so on. Therefore, the Taman Tawar Jaya Hungry Ghost Festival is considered a community event that connects residents. Each family who wish to participate in the society has to pay RM360 (USD110) a year. In the year of 2012, 288 families participated the Taman Tawar Jaya Hungry Ghost Festival.

Ceremonial rituals were carried out in the open space of the Taman Tawar Jaya housing estate and were conducted by the same Taoist priest every year, accompanied by traditional music, and gong drums. A shed was erected in order to house the improvised altar, tablets, and joss stick pots accompanied by offerings such as whole roasted pigs, fruit, tea, rice wine, and cake. The main purpose of these offerings is to satisfy wandering ghosts so that they do not interfere in the business of the living. The offerings are also for the spirits of ancestors (Chang 1993: 51). After completing all rituals, the Taoist priest allowed people to collect small ritual offerings as candies, tealeaves, uncooked rice, and coins by throwing into the crowd. Organizers also let the crowd bring food back for them (分福物). Every participant was given a 25kg packet of rice, one thick slice of roasted pork, multiple cakes, 5kg of cooking oil, and a bucket filled with other foods.

After cleaning up the ritual space, participants were at the eight-course dinner banquet at the association hall located in the center of Tawar. Every family who paid participation fee was given two admission tickets for the banquet. During the dinner, all participants enjoyed charity auction where men and women zealously placed a bid for expensive liquor, such as brandy, whisky and wine. Total sum of proceeds were donated to the local ethnic Chinese schools, lions club, undeveloped area such as *Kampung Baru*, or New Village where major residents are Chinese Malaysians. In 2010, donation was used for renewing streetlights of *Kampung Baru*.

2. Modernization of Malaysia after Independence and Housing Estate

Following Malaysian independence from British colonial rule in 1957, the government of Malaysia strove to industrialize the nation by relocating "economically inferior" Malays into the larger cities

such as Kuala Lumpur. In colonial times, British administrators had arranged the importation of Tamil and Chinese laborers to work in tin mines and on rubber plantations. Those plantations were mainly located in the central area of the Malaysian peninsula, so after independence it was possible for Chinese workers to benefit from urbanization and easily advance economically. However, the Malays had been forced by the colonial government to engage in rice farming in the northeastern region of the peninsula. Relocating village populations into urban centers in order to achieve industrialization was the centerpiece of the national policy following Malaysian independence.

House ownership became part of the objective of the New Economic Policy (NEP) from 1971 to 1990 because urbanization and industrialization were promoted. Providing affordable public low-cost housing that satisfied the basic needs of citizens is one of the most important social objectives to date, and is called “home-owning democracy” (Mohd Razali Agus 1997: 30). Since 1981, the Ministry of Housing and the Local Government of Malaysia have introduced and implemented a concept of low-cost housing, providing homogeneous housing units to low-income groups as part of a welfare solution.

Table 1: Standard Low-Cost Housing in Malaysia

Selling Price	Not exceeding RM25000 (USD 7770) per unit
Target Group	Households with a monthly income not exceeding RM750 (USD 230)
Housing Type	Flats, single-story terraced house, detached house
Floor Plan	Standard built-up area of 550-600 square feet Two bedrooms, Living room, a Kitchen and a Bathroom-cum-toilet

[Mohd Razali Agus 1997: 39]

Low cost housing is defined as houses sold at a price not exceeding RM25000. This ceiling was set in 1982 and has been a contentious issue for developers and consumers alike because the cost of construction of low-cost housing is typically higher than the selling price. It is obvious that the policy expects some form of cross-subsidy. Buyers of the low-cost housing units must provide evidence of a combined household income not exceeding RM750 per month. In 1980, about 60% of urban households in Malaysia fell within this income range (Ghani and Lee 1997: 24).

The policy specifies that each low-cost housing unit must have a minimum finished area of 550 to 600 square feet comprising of two bedrooms, a living room, a kitchen, and a bathroom. The property may be of any type including flats, terraces, or even detached houses.

3. Social Significance of the Festival as Community Event

It is clear that housing estates, popularly known as *taman* in Malay, are a politically oriented universal space for citizens of Malaysia. Here, we should pay more attention to the fact that this residential space is designed to be totally detached from the multicultural/ethnic backgrounds of

Malaysians. It is arguable that this is a political attempt to produce *Bangsa Malaysia*, or Malaysian people, to build a harmonious society. Modern housing estates of Malaysia are places where traditional human relationships based on the place they live are cut off and dismantled. However, people try to reconnect their dispossessed connection by organizing and practicing a community-based Hungry Ghost Festival.

References

- Chang, Pat Foh (1993) *Chinese Festivals Customs and Practices in Sarawak*, Sarawak, Malaysia: Ministry of Social Development.
- Ghani, Salleh and Lee Lik Meng (1997) *Low Cost Housing in Malaysia*, Kuala Lumpur: Utusan Publications and Distributors Sdn Bhd.
- Mohd Razali Agus (1997) "Historical Perspective on Housing Development", In Institute of Strategic and International Studies (Malaysia) ed., *Housing the Nation: A Definitive Study*, pp29-69, Kuala Lumpur: Cegamas Berhad.
- Tan, Chee-Beng (2000) "The Religions of the Chinese in Malaysia", In Lee, Kam Hing and Chee-Beng, Tan eds., *The Chinese in Malaysia*, pp.282-314, Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Wong, C. S. (1967) *A Cycle of Chinese Festivities*, Singapore: Malaysia Publishing House Limited.

毛沢東時代における労働者の婚姻
—洛陽の工場労働者の研究—
方莉琳 (FANG LiLin, ふぁん・りりん)*

婚姻問題は人間社会の永遠のテーマである。建国後の中国における婚姻・家庭問題に関する研究は数多く、概説的な研究のほかに、大型の婚姻・家庭社会調査や、フィールド研究もなされている。ただし、大型の社会調査は主に 1978 年以降の家庭の変化に関する調査で、フィールド調査は建国後の新しい婚姻制度の影響に焦点をあてているものの、大部分は農村の婚姻・家庭問題の研究である。また、同じ時期の異なる集団同士は異なる特徴が現われ得る。このため報告者は、毛沢東時代における農民集団以外の重要な集団である労働者集団の婚姻を明らかにすることをめざす。しかし、婚姻は、選択の基礎の上に成り立つものである。いかに婚姻選択が行われ、労働者の婚姻生活状況を左右したのか。本研究では、労働者の婚姻選択から、毛沢東時代の労働者の婚姻問題を読み解くことを試みる。

新中国建国後の中国工業発展の分布と先行研究における婚姻問題に関するフィールド調査地域の分布（主に東部、東南、西南部に集中）を考慮して、本研究では「一五」計画期の重点工業建設都市であった河南省の洛陽市を研究調査対象とする。洛陽工場労働者へのインタビュー調査を通して、毛沢東時代の婚姻問題にアプローチする。本調査では、32 人名についてインタビュー調査を行った。その内訳は、地方転業幹部が 5 名、軍隊転業幹部が 2 名、技術幹部が 3 名、技術労働者が 3 名、工場医が 3 名、労働者家族が 5 名、現場労働者が 13 名で、男性が 18 名、女性が 14 名である。

一、伝統的な配偶者選択基準の衰退

婚姻の成立はまず配偶者選択の上に成り立っている。マルクスは「結婚とは既婚者のふるまいからわかるものではなく、既婚者のふるまい自体が結婚の本質に従っているのである」¹と言った。ここからわかるように、配偶者選択は個人の主観的意識による独断によってなされるものではない。異なる社会背景のもとでは、配偶者選択基準も異なりなのであり、同じ時代背景のもとでも、職業が異なれば配偶者決定の基準もまた異なるのである。中国の伝統的配偶者決定とは、つまるところ「門当戸対（家柄のつり合い）」であり、男女双方の家庭の財力や家柄のつり合いが重視され、なおかつ婚姻交渉の過程において最も発言力と決定権を持つのは、男女双方の父母であり、本人ではない。「父母の望む娘を娶り…結婚後は、ともに愛しともに敬い助け合い、仲睦まじく手を取り合い、労働に励み、幸せな家庭を作る」²。父母とは自身の経験の教訓を子供に伝え、家長の権威を子供に伝える。伝統的結婚の中にも美しい縁もないとは言えないものの、多くの場合は個人の幸福が家族の利益の犠牲となっている。

新中国成立後、「新婚姻法」の発布に伴い、家族の利益を本とする婚姻観念は封建社会制度重要な要素と定義された。毛沢東は、『湖南農民考察報告』の中で、中国の男性は三つの体系的な権力支配を受けてきたと指摘した。すなわち、封建主義的な政治権力、家族権力、宗教的

* 南京大学社会学院社会学修士課程 (yilin6630@gmail.com)。

¹ 張志永『婚姻制度の伝統から現代への移行』中央社会科学出版社、2006 年、169 頁。

² 張志永『婚姻制度の伝統から現代への移行』中央社会科学出版社、2006 年、170 頁。

権力である。そして、中国の女性は、これらの三種の支配のほかに、さらに封建主義的な夫の権威的支配を受けている。旧い婚姻制度には、包弁（親の独断）、脅迫、売買、幼少婚、重婚、納妾（妾を囲う）、童養嫁（嫁にする目的で養女を育てる）そして家庭における義父母や夫による嫁への虐待など、夫権を中心とした家庭内の父母や夫の妻への支配関係により生み出されたものばかりである³。だからこそ、新中国はこれら「家庭内奴隷制」を覆し、男女平等を実現し民主的で自由な社会生活を実現し、婦女と子供の正当な利益を保護しようとしたのである。

1951 年の『人民日報』に掲載された「私の結婚は完全に自発的なものだ！」という文章を旗印とし、李秀蘭は伝統的包弁婚との戦いに号令をかけた。

編集者同志へ。私は太原の縫製工場の女工で、今年で 19 歳になりました。仕事をしながら、私と張斌同志は恋愛感情を抱きあいました。我々は恋愛期間を経て相互に理解し合い、革命の道を手を携えて進み革命夫婦になりたいと思っています。しかし、私の父は私たちの結婚を認めてくれません。私は再三父を説得しようとしたのですが、効果はありませんでした。父は 1 月 11 日の夜に私を脅し、私と張同志の仲を裂こうとし、拒むならば麻縄で私を絞め殺すと迫ってきたのです。私は本当に父が私を殺すのではないかと恐れ、嘘の答えをしました。次の日、私は自分の生命を守り、封建的家庭の連鎖から抜け出すために、家出をしました。工会の支持のもと、私と張同志は婚姻法に従って 1 月 15 日に結婚しました。我々の結婚後、父はいまだに不服で、封建思想から抜け出せずにいます。彼は事実をねつ造し、張同志を侮辱し、彼が私をだましたぶらかしたのだと言うのでした。父は張同志を訴えたのです。このような状況で、私は自分の態度を表明したいのです。私の結婚は自分の意志に基づくものであり、誰かにだまされたり、たぶらかされたものではありません。私は新しい社会の女性であり、私は婚姻法を理解し、さらに新中国の女性が勝ち得るべき社会的地位のために戦うつもりです。

父は事実をねつ造するべきではありませんし、勝手に張同志を訴えるべきでもないと思います。さらに娘に張同志と離縁するように脅すべきでもありません。父がこのような包弁婚の封建思想を堅持することに対し、私は断固反対します。みなさんが私の手紙を紙面上に公にし父を教育し父の封建思想を改変させてくれることを望みます。⁴

これは新中国の青年が家族本位の配偶者選択基準に対して起こした挑戦である。ここより、伝統社会の配偶者選択基準が次第に衰微し、個人本位の新しい基準が形成され始めた。1953 年の「新婚姻法」に伴い、全国規模で喧伝され、人々の経済生活水準も改善され、過去の売買婚などは減少して行き、さらに一五計画の実施に伴い大量の青年が家庭を出て、社会主義建設に参加し、父母の子供の婚姻に対する影響力も衰退していき、これとは対照的に、単位や組織、工会などが個人生活を指導するようになっていった。これより、伝統的なものとは異なる新中国の配偶者選択観が形成された。

³ 「新民主主義の婚姻制度を实行する」『人民日報』1950 年 4 月 16 日号、第 1 版。

⁴ 李秀蘭「私の結婚は完全に自発的なものだ！」『人民日報』1951 年 2 月 13 日号、第 2 版。

二、新たな配偶者選択基準の登場

1. 職業に貴賤有り

新中国の成立以前は、中国の経済発展は停滞しており、職業上の細かい区分は実際には存在しなかった。新中国成立以後は、中国社会の階級が明確に区分され、主に労働者、農民、幹部、知識分子、市民とに分けられた。その後の発展により、労働者階級の概念が規範化し、労働と幹部はひとつの階級とされたが、内部では自身による区分が存在していた。新中国成立初期、幹部に実行されたのが配給制であることから、ほとんど何の収入もなく、幹部は経済的利益を核心とした家長としては大きな吸引力を持たず、人々の間で「海昌藍（幹部）に嫁に行くなら、交通員（給料制）に嫁に行った方がましだ」という言い草が流行った。これとは異なり、労働者は結婚市場で、人々には「香饅饅（おいしいお菓子）」に映った。

1954 年、各地から洛陽の支援のために技術労働者や技師、派遣幹部、建八師などが続々と洛陽へとたどり着いた。当時は 7 万人しか人口のいなかった洛陽は遅れた地域であり、澗西区はいまだに一面麦畑であった。工場はまだ建設中で、来たばかりの労働者たちは臨時の宿泊所に暮らし、昼は現場で、夜は宿泊所でしばしの休息をとり、労働者の家族が呼び寄せられると、付近の農家に間借りするようになった。1955 年に到り、ほとんどの農家が 1 戸あたり 3 世帯が住むようになった。これらの家族は間借りする農家の中では、普段は家事を除いては、重労働をすることはなかった。これが農民には農業の前途がないと感じさせ、工業に従事することを希望させるようになった。これらの洛陽に来て、工業建設に動員された未婚青年労働者は、こうした理由から農村の若い女性の理想の結婚相手となったのである。こうした労働者がやって来たので、洛陽の結婚市場は混乱した。

孫旗鎮からは 43 人の青年女性の中で軍工と結婚したのは 3 人（うち 1 人は離婚）、婚約中が 1 人、交渉中が 5 人、軍工と結婚するつもりの方が 2 人、合わせて 11 人。南村（自然村）では未婚の青年女性が 12 人、軍工と結婚したのが 1 人、交渉が成立した者が 2 人、交渉中が 5 人である。唐村の未婚青年女性は 6 人で、軍工と正式に交際中の者が 2 人（1 人は離婚経験者）、交渉中が 1 人である。李金英も軍工と交渉した後に、自分の恋人（市民）に婚約を解消するよう要求し、岳花子は去年 10 月に前夫（教員）と離婚し、軍工と結婚した。孫旗鎮と南村の統計から、すでに婚約解除した、あるいはその予定の者は、13 人おり、その中で、相手が初等中学生の者が 3 人、農民 4 人、幹部 5 人（うち 2 名は男性側から申し出）、労働者学生 1 人である。離婚（離婚後に軍工と結婚）した 2 人のうち、解放軍 1 人（早くに離婚）、教員 1 人（去年 10 月離婚）である。軍工と結婚した者 5 人、恋愛中の者 5 人、結婚にいたっていない者 13 人、軍工を希望している者 2 人、合わせて 25 人である。⁵

農村青年女性の中では、「一に労働者、二に幹部、三に教員、百姓に嫁ぐくらいなら死んだ方がまし」という考えが流行った。多くの婚約済みの女性が婚約の解消を望み、その後に労働者の結婚相手を探した。これら労働者がその他の職業に優越する現象は決して偶然ではなく、それは労働者階級の新中国における地位が決定的だったからであり、彼らは中国の指導階級だ

⁵ 洛陽市档案馆「工場村建設の婚姻問題に関して市委に向けた報告」1955 年 6 月 14 日。

ったのである。労働者階級の政治上の指導的地位により、さらに一五計画の実施により、国家工業化建設は労働者に対する強烈な依存、労働者の社会全体における地位が新中国では相当に高まっていたのである。

工場建設初期は、幹部は困難に面していて、…。幹部が労働者に言うには、「張さん、李さん、私を必要としてください、私が話に行くのを手伝ってくださいね」。これら労働者は…⁶

ここからわかるように、労働者の地位の優越性は、政治的地位は体现しているだけでなく、経済上の待遇の体现でもある。17 級の県級幹部の給料は 8 級労働者と同じで、なおかつ文学大革命以前は、労働者にはボーナスもあったが、当時の行政幹部にはなかった。しかし、同じ労働者と言えども、内部ではさらに差があり、技術労働者は往々にしてさらに優位にあった。

呉さんは小学校教師です。彼女は結婚していました。政治上の原因で夫と離婚しました。現在、彼女は結婚相手を探しています。彼女の条件は、政治的に潔白で、進歩的で、人民の事業に忠実でありさえすればよくて、文化水準や職業は二の次だそうです。映画を観に行ったときに偶然知り合ったのが李さん。李さんを技師だと思っていたのですが、実は李さんは炊事係だとわかり、そそくさと離れて、後で李さんに手紙を書きました。「私たちはお友達ではありません。決して誤解しないでくださいね……私はただお願いしたいのです。他の人には私たちが知り合いだとは言わないでくださいね。」⁷

この話から、炊事係と技師は同じ労働者であると言えども、結婚選択においては、その地位が全く違うということである。技師以外では、労働者階級では、運転手が歓迎された。職種が違うので、保有する資源もまた異なる。

労働者の間で、運送会社の運転手と鉱山工場の運転手、医者が必要とされる。運転手の給料は同じだが、運転で遠くへへ行けるので、地元では買えない物を買うことができ、ちょっと待っていれば、素敵な物を持って帰って来てくれる。⁸

労働者階級の地位と資源は、労働者に栄華をもたらし、労働者に嫁ぐことが、女性の理想となった。しかし、大躍進運動の後、工業も規模が拡大され、労働者が急増し、洛陽市は「三年大発展」を経験し、労働者の人数は、1957 年に 78,301 人、1961 年には 127,174 に急増し、国有会社の労働者は 82% 増加した。工業の成長スピードは緩和したため矛盾が生じ、工業と農業、都市と農村の関係を調整し、国民経済の難局を乗り越えるために、中共中央と国務院は 1961 年 6 月 16 日に「城鎮人口の減少および城鎮食料消費の圧縮に関する 9 つの方法」を制定した。6 月 28 日、中共中央はまた「労働者を削減する問題に関する通知」を提出し、この「通知」において、三年以内に必ず 1960 年末の城鎮人口を 2,000 万人以上減少させることを要求

⁶ Z 氏談。

⁷ 「彼は技師じゃなかった」『新中国婦女』1954 年 11 号。

⁸ M 氏談。

し、その中で、1961年には少なくとも1,000万人削減し、1962年には少なくとも800万人、1963年上半期には残余を削減することを要求した。削減の主要な対象は、1958年以来農村よりやって来た新しい労働者、1957年末以前に農村よりやって来て、自発的に農業生産に参加する者、およびその他の方面からやって来て農業生産に自発的に従事する労働者である。労働者の急激な増加のために、都市圧力は大きな問題になり、工場は労働者を各自の郷里へと返そうとし始め、農業生産に参加させた。1961年9月末、洛陽市第一次削減任務が基本的に終了し、労働者55,414人が削減された。この削減で、国営企業内部の労働者削減は20.5%、地方工業は30%、基本建設単位は43%削減し、文教関係は12.4%削減された⁹。この労働者の「下放」は、労働者の結婚市場における地位を低下させた。多くの者が労働者に嫁いだり、労働者を娶った後になって、労働者が下放され居住地が分かれてしまい生活に矛盾が生じることを心配した。

同時に、幹部たちの身分も人知れずに変化していた。労働者の給料は相当高かったが、幹部たちの特殊性も次第に現れ始めた。

指導上の特殊性は、主に食、住、旅行、救済、人事などの方面に現れる。労働者が食券を持たず食料を買えなくても、所長は銭も払わず、ご馳走を食べた。風邪が流行した時も、労働者が長期間病院で診てもらえないのに、張所長の子供が病気になると、もともと配給所の医者に見せて治療できるが、張所長は衛生所の医者に家に来てもらって、自分の息子を診させようとした。人事のことになると、指導者はまず自分の親戚を雇用し、労資所の所長の弟のひとは農村では何もせず、工場に来てからは清掃労働者になり、多くの労働者の家族の要求に応じていない……¹⁰

これらの変化はある程度洛陽の結婚市場に変化をもたらした。工場建設期には労働者が第一だったのが、幹部集団が結婚市場における「第一候補」になった。

その頃、工場の中では労働者を結婚相手を見つけることができれば、それで充分よくて、普通はなかなか見つけれない。給料はまだよかったけれど、とりわけ大工場はそうだったが、誰が望んで労働者のところに行くだろうか。普通は幹部を探したよ。もしも自分自身の条件や家庭の条件が特に良いのでなければね。私も当時は大工場がいいと思ったし、大工場でなければ、別にいいと思った。…、鉍山工場、当時はみんな大工場で、その時は仕事は楽で保障もあった。そんな感じ。普通は小さな工場じゃ、だめだね。¹¹

上記の通り、配偶者選択において、1958年以降、幹部が労働者の優位に立ち始め、なおかつ格差が今でも続いている。労働者も同様で、一般の国営工場の労働者は集団工場よりも優位であった。これは、国営工場の労働者の給料が平均して集団工場よりもいくらか高かったからである。なおかつ、社会経済的地位も、国営工場の方が高く、安定も高かった。1961年の削減で、国営企業内部の労働者削減は20.5%、地方工業は30%、基本建設単位は43%削減し、

⁹ 洛陽市総工会『洛陽労働者運動史』1992年、289-292頁。

¹⁰ 洛陽市档案馆「洛陽市労働者代表大会において討論された企業内の人民間矛盾問題状況に関する報告」1957年5月8日。

¹¹ G氏談（本人は工場医師で、夫は工場技術労働者）。

文教関係は 12.4%削減された¹²。国营工場と集団工場の区別は、概ね「大工場と小工場」の区別と重なっている。報告者が洛陽市の档案馆で見つけた 1966 年から 1975 年までの洛陽市の某工場区の一月ごとの結婚登録統計表を整理したところ、以下のクロス表のようになり、大工場の男性労働者 46.4%が大工場の女性労働者と結婚し、16.5%の大工場の労働者が小工場の女性労働者と結婚し、24.7%が農民と結婚している。異なる職業の男性は、配偶者の職業の選択に対して、著しい差がある。

夫婦の職業のクロス表

			妻の職業				合計
			農民	小工場労働者	大工場労働者	その他	
男方职业	農民	人数	1	2	3	0	6
		夫の職業中の割合 %	16.7%	33.3%	50.0%	.0%	100.0%
	小工場労働者	人数	8	11	9	6	34
		夫の職業中の割合 %	23.5%	32.4%	26.5%	17.6%	100.0%
	大工場労働者	人数	99	66	186	50	401
		夫の職業中の割合 %	24.7%	16.5%	46.4%	12.5%	100.0%
	その他	人数	3	3	9	11	26
		夫の職業中の割合 %	11.5%	11.5%	34.6%	42.3%	100.0%
合計		人数	111	82	207	67	467
		夫の職業中の割合 %	23.8%	17.6%	44.3%	14.3%	100.0%

(Sig=0.001<0.005)

2. 地域に差別有り

洛陽へやって来た人々は全国各地から来ていたが、ソ連からも専門家が来ていた。洛陽鉍山機械工場を例にとると、最初の工場建設時には上海から技術労働者がやって来て、工場幹部の多くは豫南や豫北から来た転業幹部であり、工場労働者は撫順、瀋陽、大連、太原などから集まった。54 年、58 年そして 70 年に洛陽の工場は再度労働者の大募集をかけ、これらの募集では、多くの労働者が豫南や豫東、および洛陽周辺農村からやって来た。これらの各地から集まった人々はともに暮らし、思想や教養、技術水準、風俗習慣、個人的趣味には相違が尽きなかった。大都市出身者は、農村出身者を見下し、技術者は管理部門を見下し、南方出身者は米を好み、北方出身者は麺を好み、上海出身者は河南省の方言を好まず、河南省出身者は「阿拉」(上海方言の一人称)のような上海方言を聞くのをきらった¹³。このような大きな相違も結婚選択に影響を与えた。このような現象は上海出身者に顕著であった。上海出身労働者の中には、「上海は大都市であり、洛陽は三等都市に過ぎない」という意識があった。また国家が上海出身の労働者に特殊な待遇を与えたので、上海勢の優越感はさらに後押しされた。上海から洛陽の工業建設のために来た労働者は上海と同じ水準の給与を与えられていたのである。下表は、上海から来た労働者と洛陽出身の労働者の給料の対照表である。

級数	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級
上海(元)	42.4	49.4	57.5	67	77.8	90.6	105.4	123
洛陽(元)	32.5	38.3	45.1	53.1	62.6	73.7	86.9	102.4

¹² 洛陽市総工会『洛陽労働者運動史』1992 年、289-292 頁。

¹³ 洛陽市総工会『洛陽労働者運動史』1992 年、207 頁。

表より、上海から来た労働者の1級労働者の給料は洛陽出身の2級労働者よりも高い。経済上の優越性は、彼らを人々の羨望の的にさせ、同時に彼らは優越感を持つようになった。結婚選択の場面でも、このことは現れており、

—上海人として、絶対に現地の人を娶ろうとは思いませんでした。何といっても、当時は文化の差が大きかったので。現地の農民は、服装も、生活も言葉も、笑ってしまうほどで、どうして結婚なんてできますか。その頃、彼女たちのズボンは、2尺でした。この辺の水質は良くなく、この辺の人は南方人と違って、歯がみんな黄色かったのです。文化の面でも格差は大きかったです。誰かに紹介されても、私は応じませんでした。言葉の面でも、みんな方言をしゃべるのです。今では洛陽も方言がなくなってきて、標準語に近い言葉を使っています。でも、以前は地元の方言をしゃべっていて、我々にはまるで漫才のように聞こえて、なかなか何を言っているのかわかりませんでした。¹⁴

上海出者の固有の優越感は、他の地域から来た労働者と自分たちとを差異化させた。「当時、上海人同士では上海弁をしゃべっていたので、私たちには何を言っているのかわかりませんでした。」上海出身者のこうした「傲慢と偏見」のために、上海出身者労働者の婚姻問題は組織における特殊な問題にさえなった。工場建設初期には、上海の技術労働者に著しく依存していたので、当時は既婚者は、もし家族が洛陽にいないなら、そして洛陽に来ることを希望しているなら、申請さえすれば組織が解決してくれた。未婚の上海出身青年労働者は、他の労働者のような婚姻問題の解決方法以外に、上海出身者として、特別な待遇を受け、組織内で上海出身者同士の見合いが行われた。

あの時、彼等（組織）はただ我々を安心させてここに留まらせることだけを望んでいた。申請すれば、必ず配偶者を転職させてこちらへ寄こしてくれた。また、鄭州に行って女の子をこっちに呼んだりもしてくれた。鄭州にはいくつかの棉紡績工場があって、その女工には上海から来た人が多かった。その中の未婚の女性を呼んで、大きなバスで、一回50人ぐらい、こっちに来てもらってお見合いする。気に入る人がいれば、連絡をとる。もし成功すれば、すぐこっちに転勤させてくれる。¹⁵

このほか、上海出身労働者の繊細さと東北出身労働者の粗雑さは好対照をなしていた。ごた混ぜ状態のため、お互いに対比をし、東北出身労働者は、亭主関白と見なされ、結婚選択の上では、東北出身者も二の次とされた。工場建設初期に、労働者の配偶者選択は、明らかな出身地域による差異があり、一般に上海出身者は上海出身者との結婚を望み、それが叶わないなら、江蘇省や浙江省などの人を望んだ。東北出身者は東北出身者を望んだ。その後、工場が発展すると、各地出身の労働者の間で徐々に融和が図られ、このような出身地域差は少なくなっていく。次の世代になると、このような傾向はすでに弱まっていた。

¹⁴ H氏談。

¹⁵ H氏談。

文化交流や相互交流を通じて、次世代では交わるようになってきた。なぜなら、子供は幼稚園でほかの子と一緒にいるし、小学校に入っても一緒。河南弁、洛陽弁をしゃべらないとだめだから、家に帰っても洛陽弁をしゃべって、上海語をしゃべらない。

しかし、統計から見ると、このような区別が弱まっているとはいえ、存在し続けている。下表は、1966 年から 1975 年までの洛陽市某区の月ごとの夫婦双方の本籍地の状況であり、ここから男女双方ともある相関があることがわかる。

夫婦の本籍地のクロス表*

		妻の本籍地			合計
		河南	河南以外	江蘇、浙江、上海	
夫の本籍地 河南	人数	265	23	3	291
	夫の本籍地中の割合 %	91.1%	7.9%	1.0%	100.0%
河南以外（江蘇省、浙江省、上海を除く）	人数	52	50	16	118
	夫の本籍地中の割合 %	44.1%	42.4%	13.6%	100.0%
江蘇省、浙江省、上海市	人数	18	11	29	58
	夫の本籍地中の割合 %	31.0%	19.0%	50.0%	100.0%
合計	人数	335	84	48	467
	夫の本籍地中の割合 %	71.7%	18.0%	10.3%	100.0%

(Sig=0.000<0.005)

このような都市間の差異に加え、婚姻選択上で非常に重要な点は、都市と農村の差別である。当時、棉紡績工場の一部の女性労働者の結婚相手の条件は「二高二不要」であった。「高い地位、高い給料、顔が悪いのは不要、都市出身者でなければ不要」。というものである。このような結婚観のため、当時棉紡績工場には十数人の 30 代の未婚女性労働者が結婚相手を探し続けていた。ある女性労働者の結婚条件は、都市の基準にあてはまるものであった。

タイヤ工場の女性労働者のうち 5 人は、現役軍人の婚約者で、お互いに農村へ戻されるのを怖れていて、両者の関係はしっかりしたものではない。心の中では、復員を待っているが、もし故郷に帰されるようなら恋愛関係は解消する気である。ある男性が女性に仕事を探してあげる条件は、仕事が見つからなければ離婚するというものであった。¹⁶

このような顕著な都鄙差別をもたらす要因は、当時の厳格な都市農村戸籍制度である。1955 年「市政食料定量配給暫定実施法」の実施は、経済上の区分を都市と農村間にもたらし、1958 年の「中華人民共和国戸籍管理条例」の公布、および 1959 年の「農村人口の都市への流入を厳格に制限する」という通知が出て、都市農村間の格差は決定的なものとなった。戸籍は食料配給の教育医療などの福利システムの分配料を左右するものとして、人々の生活の質に決定的な影響を与えた。労働者は婚姻選択において戸籍に極めて敏感になったのである。

¹⁶ 洛陽市档案馆「現在の結婚家庭分野に存在する問題に関する報告」1965 年 2 月 20 日。

3. 政治が軽視される

張志永『婚姻制度の伝統から現代への移行』の中で、かつて建国初期の中国の婚姻と特徴は「政治宣伝や婚姻法貫徹などの教育の影響下で、人々は思想を追求することをひろく営とするようになった。配偶者選択において、より多くの人々が婚姻の自由の権利を得て、社交の条件の限界もあり、人々は相手の政治条件や外面的な要素を重視し、物質的な面への要求は弱くなることが見られるようになった」¹⁷と結論付けている。新中国成立後は確かに張志永が言うように、政治条件を最優先される結婚恋愛観が強く唱導された。

我々は門閥、金銭を条件とする婚姻恋愛に反対するが、恋愛とは無条件のものではない。まず我々は反動的政治思想を持つ者と恋愛をすべきではないし、もちろん民族の敵や階級の敵も対象外である。恋愛において、政治条件は重視されるべきものである。政治の様相を理解し、政治的質を考慮すべきである。もちろん、政治条件は第一条件であり、唯一の条件ではない。このほか、知識、健康、性格、容姿、趣味、年齢なども考慮すべき条件である。理想の伴侶とは政治思想上の一致がなければならず、生活上も調和しなければならない。¹⁸

しかし、政治要素はいったい工場労働者の婚姻に大きな影響を及ぼしたのか、張志永が言うように「人々は相手の政治条件や外面的な要素を重視し、物質的な面への要求は弱くなる」のか。このように政治的条件を優先条件にする恋愛観は、労働者の間にはひろく受け入れられていたわけではなかった。政治的栄光は、婚姻選択において項目のひとつには入っても、経済要素などの物質的条件が依然として、重要な要素であり続けた。

60年代の中ごろには、結婚の三条件は、百元(bai yuan)、技術員(ji shu yuan)、黨員(dang yuan)の、三つの「yuan」でした。結婚には、腕時計、自動車、ミシンという「三転」が必要でした。我々が結婚した頃は、このように黨員や技術員の給料が高かったのです。中等専門学校を卒業した技術員でも労働者よりも給料が低ければ、ダメなのです。¹⁹

黨員、技術員の優越性は、依然として比較的の高い給料を基礎としていた。政治知識は経済的要素を満たした上で、付け加えられる評価項目であった。下記のトラクター工場の青年労働者の結婚相手探しの準備から、これが垣間見られる。

数人の青年男性は、結婚相手を探すために積極的に準備をし、金銭で女性を誘惑した。トラクター工場の一青年は、三年計画を立て、革靴、生地、腕時計、自動車を用意した。これを持って、相手探しを始め、さらに入団しようとして言うには、「みんなそろえてしまったので、あとは団章があれば完璧ですから」²⁰

¹⁷ 張志永『婚姻制度の伝統から現代への移行』中央社会科学出版社、2006年、175頁。

¹⁸ 程今吾「正しい恋愛観を確立する」丁玲等『青年の恋愛と結婚問題』1950年6月。

¹⁹ X氏談。

²⁰ 洛陽市档案馆「現在の結婚家庭分野に存在する問題に関する報告」1965年2月20日。

国家が強く政治的に唱導しても、人々は配偶者選択にあたって、まず経済的要素を考慮した。双方が同様に工場労働者で、一方の家庭経済の状況が比較的によければ、家計の負担も少なく、よい結婚相手を見つけることができた。党や労働模範といった荣誉は、同等の条件のもとでの付加価値に過ぎなかった。その原因は、まず党员と労働模範は極めて少数で、ほとんど求めることができなかった。次に、洛陽は新しい新興の工業都市で、資本家や知識人はほとんどおらず、政治成分を比較する意味はほとんどなく、なおかつ、工場労働者は農村農民と異なり、政治成分の区別はそれほど顕著ではなく、政治成分がよくない者の割合も、農村で占める割合ほどは多くなかった。加えて、工場では政治成分がよくない人物に対しする糾弾が農村ほど苛烈ではなかった。このため、政治は工場の配偶者選択の中に思ったような影響力を持てなかったのである。1957年6月10日に洛陽市全範囲で始まった反右派闘争において、政治成分が婚姻に与える打撃もそれほど大きくはなく、当時は右派として攻撃された洛陽の工場は少なかった。文化大革命においても状況は同様であった。

三、結論

新中国の「婚姻法」の公布は、家庭や父母の婚姻の決定における地位を覆した。国家は自由恋愛を支持し、個人が家族の拘束から脱し、自発的に配偶者を選択するようにしむけた。しかし、具体的な配偶者選択の基準については、国家も宣伝唱導、訓育を通して人々の心の中に一種の国家意識を打ち立て、一種の英雄的情緒的結合、つまりは社会主義・共産主義建設に対する偉大なる使命感を打ち立てようと試みた。婚姻は私的な事柄ではなく、国家的、社会的な問題だからである。労働者階級は祖国の工業化の偉大なる使命を負わされており、洛陽の工場労働者はすべからず社会主義の建設者であり、新中国の指導階級であるべきであった。このため、婚姻選択においても、革命的結婚観を樹立すべきであり、国家の大事と集団事業に貢献することを優先的な基準とし、職種や物質的要素などのブルジョアジーが考慮するような要素を勘案すべきではないとされた。

しかし、上記のフィールド調査から見てとれるのは、洛陽労働者の中で婚姻選択の基準はいまだ国家が唱導する路線に沿ってはいなかったということである。労働者の婚姻選択においては、まず考慮された要素は依然として、経済的要素であり、労働者の婚姻選択において、職業の選り好みがあり、これも経済的要素に由来していた。結婚選択において、政治的要素は、広い宣伝や強い唱導があっても、人々に決定的な影響を与える要素となることはなかった。労働者の結婚選択の出発点は、依然として個人と家庭にあり、国家は労働者の内面に革命的な結婚観を植え付けようとしたが、成功にはいたらなかった。労働者を決死の覚悟で社会主義建設に貢献させるために、国家は労働者の要求に対し、満足と妥協と与えるしかなかった。

(翻訳者注：脚注では中国語文献も名称等を和訳してある。原題等は中文論文を参照)

(翻訳：中山大将、巫靚)

個人的な移住における移住先選択要因
—南京在住日本人を事例に—
松谷実のり*

*本論文はインフォーマント保護のため Web 公開をしておりません。

* 京都大学文学研究科社会学研究室博士後期課程

*本論文はインフォーマント保護のため Web 公開をしておりません。

*本論文はインフォーマント保護のため Web 公開をしておりません。

*本論文はインフォーマント保護のため Web 公開をしておりません。

*本論文はインフォーマント保護のため Web 公開をしておりません。

*本論文はインフォーマント保護のため Web 公開をしておりません。

*本論文はインフォーマント保護のため Web 公開をしておりません。

誰がより多くのリスクを負うのか？
 —社会経済的地位と環境リスク配分の差異—
 聶偉(NIE Wei, にえ・うえい)*

一、背景と問題

近年、有害な産業の用地の選定による大規模な環境をめぐる抗争事件が増加し続けている。2007 年以降、相次いで厦門（アモイ）、北京、呉江、広州、大連等の都市で大規模な環境問題への集団的行動が勃発し^[1]、中でも廃棄物処理場の選定と運営に反対する集団的事件が最も突出しており、環境汚染とその紛糾は集団的事件勃発の重要な誘因となっており、社会の安定と調和に影響を与え続けている。廃棄物処理場の建設は、一方では都市社会の福祉のためのものであり、また一方では周辺住民の生活環境や、健康、生命に対する潜在的脅威となるもので、まさに潜在的危険であり、「我が家の裏庭にはいない」というのが公衆が有害廃棄物処理場の選定に対して抱いている共通の心情であり^{[2] [3]}、ある側面から見ると住民にとっての廃棄物処理場や環境リスク、社会的公平・正義の関係性が反映しており、公正な社会秩序の確立が渴望されているのである。環境的公正が意味しているのは、環境資源や機会の使用と環境リスクの分配上、個人間で平等で均一であること、同等の権利を享受すること、そして同等の義務を負うことである^[4]。本研究で関心を注ぐのは、現在の中国で異なる社会経済的地位にある集団間で公正に廃棄物処理に付帯する環境リスクが負担されているのか、また、社会経済的地位はいかに環境リスクの分配に影響を与えているのかということである。

二、先行研究

1982 年に米国ノースカロライナ州ワーレンの住民が有毒廃棄物処理場に大規模に抗議した事件以来、関連研究者は初めて人種、貧困、教育等の社会経済的因子と廃棄物処理場とを結びつけ、環境リスク分配が耳目を集めることとなった。

人種と環境リスク分配の関係性は、アメリカの環境社会者の重要な研究課題であり続けている。人種間不平等が存在するという立場からは、有害廃棄物処理場の環境リスクは、人種間で不公平に分配され、マイノリティの人口密度が比較的に高い地域には容易に処理場が建設されていると考えられている。アメリカ環境保全署は、1983 年にアメリカ東南部の 4 ヶ所のゴミ処理場の周囲のコミュニティの調査を通じて、その中の 3 ヶ所の処理場の付近は主にアフリカ系アメリカ人の居住区域であることを明らかにした^[5]。その後、大量の実証的研究が、人種が環境リスク分配に影響を与える重要な因子であることを明らかにした^[6]。人種差別制度は有色人種が汚染施設建設に抗議する社会資本や政治的力の育成や動員を阻むものであり、有色人種を「汚名化」し、合法的にゴミ処理場を有色人種の居住区域の付近に建設することを促した^[7]。

収入は社会経済地位の重要な独立変数であり、収入水準は個人の環境リスクへの反応力を反映している。低収入者は経済的政治的に劣勢に置かれ、政府への発言力が弱く、ゴミ

* 南京大学社会学院社会学専攻博士課程、専門は環境社会学と青年社会学。本論文は、修士論文と『中国地質大学学报（社会科学版）』2013 年第 4 号に掲載された論文を基にしている。

処理場建設地選定や環境汚染の移転に参加することが難しく、優勢な社会集団がより劣勢な社会集団に環境リスクを容易に転移することができる。劣勢な社会集団は、経済的に困窮し、雇用不足であり、ゴミ処理場建設に対しては、強硬な反対を示すこともない^[8]。実証研究が示すのは、低収入層と生活ゴミ処理場の立地には密接な相関関係があり^[9]、低収入層はさらに過酷な水質汚染、大気汚染を押しつけられる立場にあり、実際の仕事の中でも、過酷な有毒化学ガスや物理的なリスクに遭う可能性が高い^[10]。しかし、経済的地位と廃棄物投棄の間に非線形の相関があるという研究も現われている。つまり、低収入と高収入地区の環境リスクは、中間層地区よりも低いというのである^{[11][12]}。

教育は個人が社会経済および政治資本を得るための能力を反映している。西洋の研究者は、社会資本と政治資本の分配の不均衡は環境リスクの不公平につながり、政府と企業は新たな施設を建設するときに、周辺地区が反対運動を起こし、計画を阻むことをきらうので、教育や投票機会、政治的決定機会などに恵まれない地区を好み、このために立地選定時にはなるべく貧困地区や有色人種の居住区に選定する^{[13][14]}。Bullad は実証研究を通じて、大規模な反対運動を組織できる地区は一般的に有色人種地区に比べて高い文化程度や収入を有していることを明らかにした^[15]。その他の研究者は多項回帰分析と二項ロジスティック回帰モデルでの検証を通じて、教育程度が低く、貧困水準が高くマイノリティが比較的に多く居住する地区がより多くの環境リスクを負うことを明らかにした^[16]。

中国の洪大用は国際、地区、集団の三層から環境的公正に関する検討を行い、中国に環境的不公正現象が存在することを指摘した^[17]。盧淑華は本溪市の環境汚染と居住区の配分についての調査を通じて、組織あるいは個人の権力資源と環境リスクの間に相関があることを明らかにした^[18]。王書明は三件の事例研究を通して、現在の環境的不公正は主に社会の転換期と社会分層化の変化と関係あるとし、経済的に優勢な階層は上昇しようとする劣勢な階層を排斥し、経済的に優勢な都市や企業が環境汚染の社会的費用を底辺の農村地区や農民に押しつけると述べている^[19]。陸文聡と李元龍は環境的公正の視点から、環境的不公正の状況では、農民工の健康被害と社会経済的地位、環境汚染などとは相互関係にあることを示した^[20]。

以上をまとめると、環境リスク研究の成果は主にアメリカに集中し、環境リスク分配は人種、貧困、教育程度に関連しているとされた。中国の国情、社会構造、発展戦略等と米国のそれらとは全く異なっているが、これらの社会経済的地位の変数は中国の環境リスク分配に対してどのような影響を持っているのか。米国社会と同じなのか、それとも異なっているのか。とりわけ、その他の社会経済的地位に関する変数（たとえば居住地）は環境リスクにどのように影響を与えているのか。これらの問題の経験的検討は重要な実践的意義があるだけでなく、同時に理論と既存の解釈との対話も進めることとなる。

三、研究の構成

（一）研究仮説

環境リスク研究に関連する理論や実証研究の概説と結び付けたものが、報告者が提起する基本的な仮説である。異なる社会経済的地位集団が負担している環境リスクは比例関係ではなく、社会経済的地位が高い集団ほど、負担する環境リスクが小さいというものである。具体的には以下の作業仮説を設ける。

第一に、労働の性的分業に基く理論。社会は女性が家庭を大切にすることを期待しており、男性に比べてさらに家庭に近く、移動も少なく、環境リスクの生まれる場所にとどまりやすく、ゴミ処理場がもたらす環境リスクをさらに受けやすい。仮説 1、女性は男性と比較して、より多くの環境リスクに遭遇するか、すでに経験している。

第二に、環境リスク分配人種差別モデルに基く仮説。このモデルは制度化された人種差別がマイノリティに政治・社会資本へのアクセスを困難にさせ、ゴミ処理場建設や運営に対する反対運動をとらせることも難しくし、マイノリティの居住地区は容易にゴミ処理場の建設地に選ばれ、より多くの環境リスクを負うと考える^[21]。しかし、中国には人種差別がなく、民族の融和政策がとられている。仮説 2、中国少数民族集団と漢族集団が遭遇するあるいは経験した環境リスクには顕著な差異はない。

第三に、環境リスク分配理性選択モデルに基く、社会政治モデルの仮説。両者は個人のリスク反応力を強調し、理性的に居住地を選択する能力が高いほど、環境的によりよい地区での居住を選択すると考える。社会資本の動員力が強いほど、ゴミ処理場の建設を抑えたり、汚染主体に汚染浄化をさせる能力が高いと考える^[22]。収入、教育程度が比較的に高い者は、さらに多くの経済・社会・文化資本を用い、環境リスクに遭遇したりあるいはすでに受けている場合が少なくなる。仮説 3、住民の世帯収入が高いほど、経験した（あるいは遭遇する）環境リスクが少なくなる。仮説 4、住民の教育程度が高いほど、経験した（あるいは遭遇する）環境リスクが少なくなる。

最後に、環境リスク分配協力主義の視角に基く仮説。協力主義の視覚は、主に国家の政治体制の政策決定と政策計画から環境リスク分配を解釈する^[23]。中国の社会経済発展の中には城郷二元体制が存在し、農村に比べて、都市は政府権力の中心に近く、政策計画を利用しゴミ処理場を農村や郊外に建設させることが可能であり、農村にはゴミ処理場の帯びた環境リスクが集積することになる。政府は現代社会のゴミ処理モデルは 1ヶ所にすべてのゴミを集中させる方法で、ゴミ処理場の環境リスクはゴミ処理場に近い住民に集中し、少数者の利益が多数者の環境利益を損ねている^[24]。仮説 5、都市の社区（訳者注：「コミュニティ」と訳されることもあるが、実際には現代中国における最小の行政単位）住民を農村社区の住民と比較すると、農村住民の方が、遭遇するあるいは経験した環境リスクがさらに大きい。仮説 6、廃棄物処理場から遠いところの住民ほど、経験したあるいは遭遇する環境リスクが小さい。

また本研究はデータを通じて年齢の環境リスク分配への影響を分析することを試みる。文献で示されたように、年齢と環境リスク分配には正の相関が見られる^[25]。仮説 7、年齢が大きいほど、経験したあるいは遭遇する環境リスクが大きくなる。

（二）研究データ

本研究のデータは、2011 年 7 月に廈門市において実施した「住民生活環境」質問票調査によるものである。本研究の調査対象は、二種類の住民に分けられ、ひとつは廃棄物処理場の近辺の住民で、サンプル抽出された人々である。廈門市の 3ヶ所の大型ゴミ処理場を中心として、半径 3km 以内をゴミ処理場周辺地区とし、その内部で 400 の標本を抽出した。もうひとつは、廃棄物処理場の近辺住民ではない人々で、多段階抽出法で抽出された人々である。今回の調査対象は、18～70 歳の住民で、700 件の質問票を発送し、回収できたの

は 660 件で、有効回答率は 94.29%である。

(三) 従属変数

本研究の従属変数は環境リスク分配である。学界には環境リスク分配の理解をめぐってふたつの立場から論争が生じている。实在論と構築論である。实在論者は、おもに自然科学領域に集中し、リスクの客観的存在を強調し、系統科学の方法を用いて、正確にリスク発現を計測する^[26]。構築論者は、おもに社会科学領域に集中し、環境問題の客観的存在とその原因とする環境リスクを認めながら、環境リスクの主観的側面を強調し、環境リスクは社会的構築物であると考えている^[27]。従って自然科学と環境社会学が注目しているリスクの分配は異なる。自然科学はシステム科学の方法によって正確にリスクを計測することを強調しているが、それに対して環境科学は主観的リスク評価法を用いて、異なる集団間のリスク分配を計測し、リスクの実際の分配、つまりは発生したリスクの分配状況を強調し、過去のリスク経験や当面のリスクを知ること、これから受けるリスクを計測する。本研究では既往の研究者のリスク分配計測を基礎とし^{[28][29]}、みずから環境リスク分配量表を作り、我々の調査票で被調査者に質問した「廃棄物処理過程の中で色々な問題が起きるが、最も自分の生活の質に影響した者は何か？」という項目など 11 の指標を設け、住民の経験したあるいは遭遇する環境リスクを考察する。公式^[30]によって、それを 1 から 100 までの指数¹に換算し、11 項目の指標を 1 から 100 までの点数に換算する。

表1：環境リスクの頻度叙述と因子分析

項目	頻度叙述 (%)					因子分析	
	影響 重大	影響 有り	不明	影響 なし	影響 皆無	健康・物理的 リスク	社会的 リスク
悪臭	40.1	28.1	8.3	19	4.2	.783	.240
水源汚染	27.3	27.8	16.4	22.2	6.1	.798	.338
騒音	12.3	25.8	16.8	36.7	8.0	.555	.214
土壌汚染	20.4	27.2	25.5	20.8	5.8	.774	.331
病原菌発生	35.0	35.7	14.9	11.1	3.0	.763	.259
心理的ストレス	21.1	35.0	16.3	21.4	5.9	.708	.376
健康被害	26.9	36.3	16.8	15.3	4.4	.679	.471
産業低下	14.9	25.0	34.6	18.7	6.5	.422	.742
就労機会減少	9.0	19.8	37.8	24.9	8.2	.303	.872
収入低減	10.0	22.2	33.5	25.5	8.5	.333	.850
人口減少	9.9	19.3	34.4	26.6	9.6	.288	.810
固有値						6.539	1.073
分散分析の寄与率						59.44%	9.76%

(四) 独立変数

社会経済的地位とは、個人の教育、収入、居住地などの指標に基いて、個人が他の集団との相対的な関係の中で自らが身を置く社会的、経済的位置のことであり、社会と経済の双方から考慮した総合的指標であり^[31]、また同時に社会経済的地位は個人の人口学的特徴を包含している^{[32][33]}。このため、本研究の言う社会経済的地位はおもに性別、年齢、民族、教育年数、収入、居住地（都市社区か農村社区か、廃棄物処理場から近いかわるか）など

¹ 換算公式：換算後の因子値 = (因子値 + B) & A。 A = 99 / (因子最大値 - 因子最小値)， B = (1/A) · 因子最小値。 B の公式は、 B = [(因子値最大値 - 因子最小値) / 99] · 因子値最小値、とする。

を変数とする。

四、研究結果

廃棄物処理場周辺住民モデルの中では、社会経済的地位は、環境リスクに影響する重要な因子であり、モデルの説明度は 18.7%で、なおかつ顕著な検定結果が得られた。しかし、廃棄物処理場から遠いモデルでは、社会経済的地位は環境リスクに対して、顕著な影響力は認められなかった（F 値=2.26、P 値>0.05）。分析結果は以下の通りである。

表 2：社会経済的地位の環境リスク分配に対する異教の多元回帰モデル

独立変数	モデル1 (廃棄物処理場住民モデル)		モデル2 (全住民モデル)	
	B	Beta	B	Beta
性別 ^a	0.487	0.012	1.012	0.023
年齢	-0.141*	-0.091	-0.160**	-0.096
民族 ^b	6.457	0.047	1.898	0.016
収入対数	-2.599**	-0.112	-2.356**	-0.106
教育年数	-0.027	-0.005	0.275	-0.055
都市社区 ^c	-16.672***	-0.399	-14.065***	-0.308
廃棄物処理場からの距離 ^d				
1-3km	—	—	-6.968**	-0.149
3km以上	—	—	-9.733***	-0.215
常数	74.009		78.541	
N	388		612	
Adjusted R-squared	0.187		0.226	
F	15.86***		23.29***	

注：*** p<0.001, ** p<0.05, * p<0.1。aの参照カテゴリは女で、bの参照カテゴリは少数民族である。cの参照カテゴリは農村社区で、dの参照カテゴリは1キロ範囲以内である。

- 1、性別は環境リスク分配の経験や遭遇において、著しい差異は見られず、仮説 1 は支持されない。この発見と、中国内外の研究者の研究成果とは不一致している。王朝科の研究は、性別間で環境リスク負担には大きな差異が現れることを明らかにしている^[34]。西洋の研究者は、女性が負う環境リスクは明らかに男性よりも大きいことを明らかにしている^[35]。調査では、廈門市は福建省の経済発展の中心地であり、重要な労働力需要地でもあるので、ゴミ処理場周辺の多くの住民はいまだ遠くへ働きには出ておらず、ゴミ処理場付近の工業地区や商業地区が選ばれ、日中は各工場で働き、夜に家に帰るという様式が成立しており、「男性が出稼ぎに出て、女性は農村に留まる」という局面が現れていないことが明らかになった。このことから、環境リスクに著しい性差が現れていないのだという解釈も一定程度は成り立つ。
- 2、年齢と環境リスク経験は負の相関が見られるが、これは年齢が大きいほど、経験する遭遇する環境リスクが小さいことを意味する。仮説 7 はまだ実証されていない。ペイカー（貝克）はリスク感知とリスクは別の物であるが、似たものであると考え^[36]、年齢が大きいほど、リスク感知能力はより弱く、自身の受けてきたあるいはこれから出会う環境リスクへの意識が乏しいので、年齢と環境リスク分

配には負の相関があるとする。

- 3、民族は環境リスク分配に顕著な影響を与えておらず、仮説 2 は支持される。この知見と西洋の研究者の知見との間には不一致が生じている。西洋の研究者は、人種はリスク分配の不公平の決定的因子であるとしている。1983 年の研究によれば、ヒューストンの 25 ヶ所の廃棄物処理場のうち 21 ヶ所はアフリカ系アメリカ人の居住地区周辺に位置していた^[37]。2007 年の研究によれば、廃棄物施設の 3km 以内の住民の 56%は有色人種であった^[38]。
- 4、収入と環境リスク分配には負の相関がみられ、かつ統計的にも顕著で、収入が一对数単位増えるごとにその経験した環境リスク分配は 2.599 ポイント低下し、仮説 3 は実証される。既往の研究結果と一致しており、西洋の研究者も低収入層はより多くの環境リスクを受けるとしている^{[39][40]}。一方で、収入が高いほど、動員する社会資本も多く、ゴミ処理場建設阻止のために動員できる社会資本も多く、また一方で収入が高いほど、リスク反応力も強く、ある程度は環境リスクを軽減できる。環境リスク蓄積が限界に達すると、移住という形で環境リスクを回避し、収入が低いほど経済力が低く、理性的な居住地選択が難しく、リスク転移の能力も持ち合わせず、さらに多くの環境リスクを負うのである。
- 5、教育年数は、環境リスク分配に顕著な影響は与えない。仮説 4 は否定される。この点は、国内外の研究と一致していない。潘斌は、社会リスクの分配はリスクの知識や、リスク管理、対応能力に依拠し、教育程度が高いほど、リスク予防知識やリスク対応能力が高く、負う環境リスクも小さい^[41]。西洋の研究者は、ゴミ処理場は一般には教育程度が低い地区に設置され、教育程度が低いほど、負う環境リスクも大きい^[42]。我々の調査では、後坑ゴミ処理場は廈門市内に位置し、ゴミ処理場が 1999 年に操業して以来、管理状態も比較的良好で、大きな住民問題も起きてないことが分かった。2008 年に廈門島内の開発の中心が東に移ると、廈門市政府は周辺地区を都市の重点開発地区に指定し、新たな中心部へと再開発し、後坑ゴミ処理場も付近に大量の補償住宅を建設し、多くの大卒及びそれ以上の学歴の人々が移住し、彼らは同様に比較的に高い環境リスクを受け、教育程度の異なる人々の間でも環境リスク上の著しい差異が見られないなくなった。
- 6、農村社区居民の環境リスク経験は、都市社区居民よりも顕著に高く、仮説 5 は実証される。回帰係数が示すのは、農村住民と比較すると、都市住民の環境リスクは 16.672 ポイント低い。同時に、と移住民の標準回帰係数は-0.3999 で、絶対値はすべての検定変量中で最大なのである。都市と農村が示すのは、環境リスク分配に影響する最終的に重要な要素であり、大量の生活ゴミと工業廃棄物が農村へと移転させられ、環境リスクを生みだし、農村住民の環境利リスクが明らかに都市住民よりも高くなっているということである。
- 7、廃棄物処理場から居住地までの距離は環境リスクの分配に顕著な負の影響を与えており、仮説 6 は支持される。モデル 2 が示すのは、ゴミ処理場から 1km 以内に居住する住民と比べると、1~3km、および 3km 以上離れて居住している住民の環境リスク経験は、6.968 ポイントおよび 9,733 ポイント低い。ゴミ処理場から遠くに居住しているほど、経験した環境リスクは低く、ゴミ処理場周辺住民とそれ以外の住民

は比例しない環境リスクを負っており、環境リスク分配はゴミ処理場を中心として外に向かうほど遞減していることが明らかになった。

五、結論と考察

本研究は、上記のデータ分析に基づき、基本的に以下の結論を得た。第一に、環境リスクは社会経済的地位の異なる集団間で非公正に配分されており、異なる社会経済的地位の集団は比例した環境リスクを負担しておらず、社会経済的地位は環境リスク分配に影響する重要な因子である。第二に、年齢、収入、居住地は環境リスク分配に顕著な影響を与える因子である。第三に、性別、民族、教育年数は住民の環境リスク経験に顕著な影響を与えない。

本報告の事例は、西洋の環境リスク分配研究とは明確な差異が見られる。

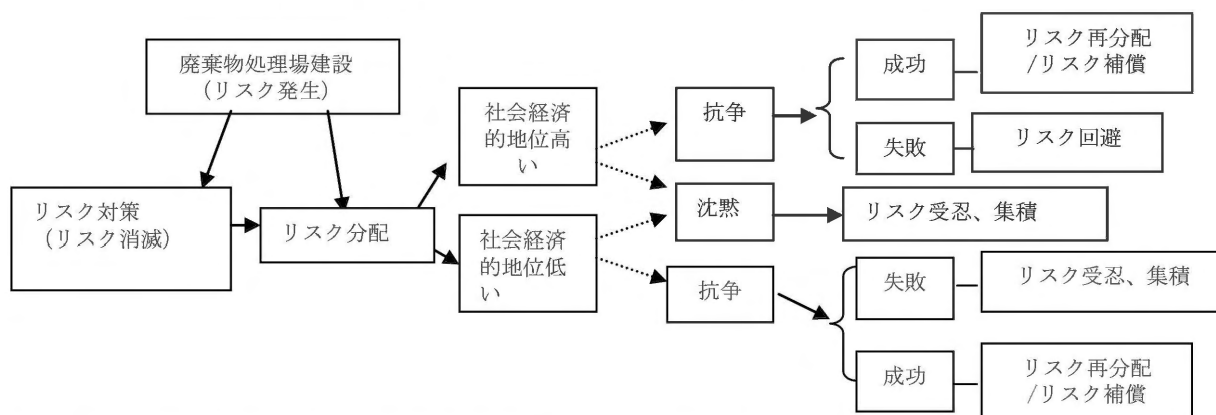
まず、西洋の研究者は、環境リスク分配が「人種」「教育」「性別」などの社会的因子^{[43][44]}と関連するとみなすが、本研究の結果からは、これら変数はいずれも統計的に有為な影響力を有していないのである。本研究はその理由を、米国においては、有色人種は比較的に劣勢な集団的地位にあり、政府は廃棄物処理場の選定においては「最小抵抗の原則」を採用し、有色人種の居住区域に廃棄物処理場が選定されやすいためだと考える。中国の漢族は人口上 92%以上を占め、少数民族は少ない。米国の人種差別制度とは明らかな対称をなし、中国は民族共同繁栄政策を採っており、このために環境リスクの局面において少数民族の負担が多いという事は見られず、民族の差異は中国の環境リスク分配において大きな影響を持っていない。また、住居保障政策の実施によって、安価な住宅や公務員向け住宅が各都市に建設されるようになり、こうした公営住宅は一般的には都市の中でも比較的に地価の低い周縁的な地区に建設されるので、廃棄物処理場の近辺に位置することとなる。このため、教育程度が高いほど、高い環境リスクを受ける可能性もある。調査地点選定の原因により、性別は環境リスク分配に対して影響を持たず、この一点では今後の研究の進展を待つ必要がある。

次に、西洋、とりわけ米国の環境リスク分配研究とは異なる焦点は、中国の環境リスク配分の不公平が都市と農村の環境リスク分配差異の問題に突出している。都市住民の経験した環境リスクは農村住民のそれよりも明らかに低く、これには中国の都市農村二元構造が関連していると考えられる。第一に、中国は都市の優先的発展を戦略として採用し、都市農村二元体制が生じ、都市を中心とし、農村を周縁とするモデルが形成され、都市の中心者は政治及び行政の活動の中で挑戦できない支配権を有しており、リスクに直面しても都市の中心の人間は分配の選択権を生み出す権利を有しており、もともと中心地帯から生まれたリスク分配や、中心地帯により負担すべきリスク分配を追い出すことができる^[45]。第二に、中国の大部分の廃棄物汚染対策の投資は基本的に都市にあり、農村では生活汚染対策と環境管理の資金を得ることが難しく、あるべき環境保全施策も欠如し、農村住民はより大きな廃棄物処理リスクを負わされることとなる。第三に、都市は大量の生活廃棄物汚染を農村住民へと転化すると同時に、環境利益を受けることもなく、損害を受けてなおかつ相対的に貧困な状態にある農村にはリスクの補償が与えず、廃棄物処理に伴うリスクの消滅もしていなく、リスクが農村住民に集積されることとなる。第四に、都市と農村の住民の間の社会経済的地位の差異が彼らのリスクに対する能力の不一致度を決定し、都市

社区に居住する者は、相対的に完備された社会保障を有し、金融資産の総量も1人当たりの平均額も大きく、社会的リスクに対処するだけの力を持ち^[46]、農村社区に居住する者はリスクに対処する能力が都市住民に比べて明らかに脆弱で、リスクを回避するための有効な措置を取ることが難しく、リスクが農民住民へと集積するのである。

要約すると、社会経済的地位は環境リスク分配に対して図1の如く作用する。廃棄物処理場の建設と運営は周辺社区に一定の環境リスクを帯びさせ、関連部門は環境リスクを消滅させるための施策を採用し、消滅はなかなか難しいものの、環境リスクの最初の分配を形成した。社会経済的地位の異なる集団のリスク対応能力の差は、リスク再分配に影響を与えている。社会経済的地位が高い者が有する、一定の経済資本、政治資本、社会資本、そして発言権などのリスク対応能力はある程度環境リスク分配の構造を改変する。社会経済的地位が高い者ほど、有する社会ネットワーク規模がより大きい、あるいはネットワーク規模の勢力が強く^{[47][48]}、関係するコミュニケーション能力もより強く、環境被害に対して抵抗する可能性もより高く^[49]、環境抗争を通して環境リスクの再分配構造をより改変しやすいのである。

図1 社会経済的地位と環境リスク分配の関係図



もし環境抗争に失敗しても、社会経済的地位の高い者ほど、その収入も比較的高く、理性的に居住環境を選択する経済的能力も有し、環境リスクの低い地域へと引っ越す能力もあるので、環境リスクを回避し、比較的少ない環境リスクを負担することになるのである。社会経済的地位の比較的低い者は、リスク対応能力も比較的低く、もし沈黙を選択したり、抗争が失敗するなら、一定の環境リスクが集積する。フィールド調査では、廃棄処理リスクが日常生活を乱すようになると、彼らは「道を封鎖することや、座り込む」などの原始的な抵抗の方法を選択し、汚染を生み出す廃棄物処理に対して抗議するが、廃棄物処理業者がある程度の経済的補償を与えると、社会経済的地位の低い者は抗議の取りやめを選択してしまうのだが、こうした「金で汚染を償う」という短期的な方法では、到底環境リスクを消滅させることはできず、環境リスクが蓄積されるだけである。リスクの不平等な分配は「実際上は一種の強権発動であり、つまりは権勢を握った者がリスクを転嫁し、権勢を握れない者がリスクを負担する」^[50]ということであり、リスク分配は一種の階級や階層の原理を出現させ、社会経済的地位の遵守を遂行し、富の分配とリスクの分配とが重なり合うのである。ゆえに、将来の政策決定の中では、不公正な環境リスク分配に目を向ける

だけではなく、同時にまた環境保護の責任と義務の分配へも目を向ける必要がある。廃棄物処理場周辺住民の補償制度をより拡充し、環境や健康へのリスクも低減させ、廃棄物処理場周辺住民や低所得者層の環境権益を保障しなければならない。

最後に指摘すべきは、いち研究として、我々は初歩的に社会経済的地位と環境リスク分配の関係性を実証したに過ぎず、本研究にはなお一定の限界が存在しているということである。第一に、社会経済的地位の環境リスク分配に対する影響は長期的で、さらに複雑なものであるはずであり、本研究は条件の制約を受け、ある一時点の断面のデータを利用したに過ぎない。第二に、社会経済的地位と環境リスク分配の関係は実際には非常に複雑で、その中の多くの構造は本論ではいまだに十分に掘り起こされておらず、社会経済的地位と環境リスク分配の間には、さらに環境意識などの仲介変数があると考えられ、本研究の視点と結論には、さらに大規模な調査と実証研究による検証が要される。

引用文献

- [1]童志鋒.歷程と特徴:社会転換期の環境抗争研究.甘肅理論學刊, 2008 (6) : 85-90.
- [2]郭巍青等.リスク社会の環境異議: 広州市民のゴミ焼却施設建設反対運動を事例として. 公共行政評論, 2011(1):95-121.
- [3]湯匯浩.隣避効用: 公共性プログラムの補償システムと公民参加.中国行政管理, 2011(7):111-114.
- [4][8][23][43]洪大用、龔文娟.環境公正研究の理論と方法評論.中国人民大学學報, 2008(6):70-79.
- [5]US Gen. Account. Off. Siting of Hazardous Waste Landfills and Their Correlation with Racial and Economic Status of Surrounding Communities[M]. Washington, DC: US Gov. Print. Off. 1983 : 3-5
- [6]Mohai P, Bryant B. Environmental racism: reviewing the evidence[A]. Race and the Incidence of Environmental Hazards: A Time for Discourse, edited by Bryant B and Mohai P. Boulder: Westview, 1992 : 163-176
- [7]Brulle RJ, Pellow DN. Environmental Justice: Human Health and Environmental Inequalities[A] Annu. Rev.Public Health, 2006, 27 : 3.1-3.22
- [9]Bullard RD, Wright BH. Environmentalism and the politics of equity: emergent trends in the black community [J]. Mid-American Review of Sociology, 1987, 12(2) : 21-37.
- [10]Williams D.R. Socioeconomic differentials in health : A review and redirection.[J] Social Psychology Quarterly,1990, 53 (2) : 81-89.
- [11]Burke, Lauretta M. Race and Environmental Equity: A Geographic Analysis in Los Angeles[J]. Geo Info-Systems, 1993, 3 : 44-50.
- [12]Daniels, Glynis and Friedman, Samanth. Spatial Inequity and the Distribution of Industrial Toxic Releases: Evidence from the 1009 TRI[J]. Social Science Quarterly1999, 80(2): 244-262.

- [13]Saha R, Mohai P. Historical context and hazardous waste facility siting: understanding temporal patterns in Michigan.[J] Soc Probl, 2005, 52(4) : 618-648.
- [14][21][22][38][44]Mohai.P, Pellow.D, Roberts.T. Environmental justice[J]. Annual Review of Environment and Resources, 2009, 34 : 405-430.
- [15][37][42]Bullard RD. Dumping in Dixie: Race, Class and Environmental Quality[D]. Boulder, Colorado : Westview. 3rd ed.2000:12-102.
- [16][39]Brooks N, Sethi R. The Distribution of Pollution: Community Characteristics and Exposure to Air Toxics [J]. Journal of Environmental Economics and Management, 1997, 32(2) : 233-250.
- [17]洪大用.環境の公平:環境問題への社会学的視点.浙江学刊, 2001(4):67-73.
- [18]盧淑華.城市自然環境問題の社会学的研究.社会学研究,1994(6):32-40.
- [19]王書明.生存権、環境権と社会排斥:環境正義経験研究の社会学的視覚.中国環境資源法学評論,2007 年刊.
- [20]陸文聰等.農民工の健康權益問題の理論分析:環境的公平に基づいた視覚.中国人口社会科学, 2009(3):13-20.
- [24]張偉麗、葉民強.政府、環境保全部門、企業環境保全部署の行為の動態分析.生態經濟, 2005 (2) : 60-65.
- [25]鍾茂初、闫文娟. 環境公平問題の既往研究および研究をつなぐ思考[J].中国人口・資源と環境, 2012 (6) : 1-6.
- [26]華軍、楊潔等.区域環境リスク分析と官吏.北京:中国環境科学出版社, 2006:3
- [27]蔡萍.環境リスクの社会建築の説明[J].蘭州学刊, 2008(11) : 101-105
- [28]ト玉梅.リスク分配、システムへの信頼とリスク感知.優秀修士論文,厦門大学,2009
- [29]趙延東等.北京公衆の食の安全性に対するリスク感知, 2012-04-22,
<http://www.sociology.cass.net.cn/shxw/shgz/shgz42/P020080218335519062456.pdf>
- [30]辺燕傑ほか.中国都市家庭の社会ネットワーク資本.清華社会学評論, 2000(2) : 1-18.
- [31]李培林、田豊.中国労働力市場の人力資本の社会刑経済的地位に対する影響.社会.2010(1) : 69-87
- [32][48]胡榮.社会経済的地位とネットワーク資源.社会学研究, 2003 (5) : 58-69 .
- [33]胡榮.農民工の精神的健康に影響する社会因子分析[J].社会, 2012 (6) : 135-157
- [34]王朝科.性別と環境:環境問題を研究する新視角,山西財經大学学報,2003(3):31-34.
- [35]Cupples J. Rural development in El Hatillo, Nicaragua: Gender, neoliberalism and environmental risk, Singapore Journal of tropical geography, 2004, 25 (3) : 343-357.
- [36]楊善華ほか.西洋社会学理論 (下巻), 北京:北京大学出版社,2006:124.
- [40] Saha R, Mohai P. Hamilton J T. Testing for Environmental Racism: Prejudice, Profits, Political Power?. Journal of Policy Analysis and Management, 1995, 14(1) : 107-132.
- [41]潘斌.リスク分配と気候の正義.社会科学,2011(9):117-121.
- [45]張康之ほか.リスク社会の中のリスク管理原理.南京工業大学学報, 2009 (2) :5-9.
- [46]吳雪明ほか.中国転換期の社会リスク分布と対リスク・システム.上海行政学院学報, 2006 (3) :66-75.
- [47][49]馮仕政.沈黙する多数派:差序格局と環境抗争.中国人民大学学報, 2007(1) : 122-132.

[50]程啓軍. リスク社会の中の階級:交渉、対応力と分担システム.学習と実践, 2006
(10) :136-139.

(翻訳者注：中国語文献も名称等を和訳してある。原題等は、中文論文を参照)

(翻訳：中山大将、巫靚)

中文论文



聶偉 柴向南 吳天躍
巫靚 方莉琳 馬嵐 櫻田涼子 河合洋尚 松谷実のり 中山大將

(敬称略)

2013年8月13日

参观日本国立民族学博物馆图书馆的情景
国立民俗学博物館、同館図書館見学の様子



作为“想象的共同体”的中华帝国
福谷彬（FUKUTANI Akira）*

绪论

“想象的共同体”是出生于中国的英国政治学家本尼迪克特·安德森（Benedict Richard O'Gorman Anderson, 1936年-）在其著作《想象的共同体》中说明民族主义的历史起源时而使用的一个概念。本文将就“想象的共同体”论在中国研究中可能适用的范围进行讨论。

具体来说，将民族主义诞生之前中国传统的世界观视为平岗武夫（1909-1995）在《经书的成立》（1946）中提出的“天下的世界观”，并将其与“想象的共同体”论进行比较。而且，以发展了儒教世界的浅见綱斋（1652-1712）的日本思想家为例，探讨儒教的世界观在现代社会中的活用性。以浅见綱斋的学说为例是因为，笔者认为在綱斋的主张中，包含了一种超越民族主义的逻辑。

1、关于“想象的共同体”

先说结论，以发源于传统经书中的“天下世界”为政治理念的传统中华帝国，从鸦片战争以后，到清末民初经历了“想象中的共同体”的变化，也就是国内民族主义的诞生。并在此后的国家构建中使本尼迪克特·安德森的“想象的共同体”成立的逻辑在中国拥有了充分的可行性。

比如，清末的儒者刘师培发表了黄帝纪元，主张舍弃清朝的年号，使用黄帝纪元。这可以说是基“中国人”都是黄帝子孙的观念的基础上，对“中国”这一国家概念进行想象的例子，笔者认为这与19世纪在世界各地兴起的民族主义是相同的，因而可以说明安德森的“想象的共同体”理论也的确是适用于近代中国的。

我认为，中国拥有“想象的共同体”建立之前的独特的世界观，并在这一点上兴起了以“想象的共同体”为基础的民族主义。这正是有别于其他国家和地域的。在论述这一观点之前，先来整理一下安德森的理论。

第二次世界大战后在标榜社会主义的国家之间发生了诸多的纷争，安德森将这一意外的事态作为“想象的共同体”理论的出发点，安德森认为这些纷争不是围绕着“经典”（canon）与“教义”（dogma）的。所谓正统与异端的争论，而是起因于各自国家的民族主义。

本来社会主义是一种国际性的理论，理应超越民族主义，但为何民族主义会被社会主义所扭曲？这正是安德森最初的问题意识。而且，正如经常提到的那样，当时的民族与国家的概念，与其说是已经存在的，不如说是在民族主义中衍生出来的可能性更高。安德森引用欧洲，东南亚，中南美等诸多地域的多种实例来引证并强调了这一观点后做出了如下论证。即，民族主义之所以获得如此强大的力量，正是因为民族与国家不是基于历史的概念，而是一种衍生出的观念。并认为民族主义之所以拥有足以扭曲国际主义的力量，正是因为那是一个被“想象出来的观念”，并以观念被制度化的方式不断再生产的结果。这就是“想象的共同体”

* 京都大学文学部中国哲学史研究室博士二年级。

理论的核心。

但是民族主义原理却拥有严格区分内外的排他的一面。在这一点上，国际主义与社会主义之间会产生裂痕，除一部分欧洲国家，社会主义是通过反抗帝国主义发展起来的，因此在这点上社会主义必然会带有民族主义的色彩。中国也不例外，“中国人”这一民族观念也是在反抗帝国主义的侵略中产生的，并且在向民国过渡的过程中依然强有力。而这也可以说是作为“想象的共同体”的中国发挥了巨大的力量。在这一点上，安德森的理论可以说是有效的。下面将会对民族主义兴起以前的“天下世界观”这一传统的儒家世界观进行考察。

2、平岗武夫的“天下世界观”

毕业于京都帝国大学文学院的中国哲学研究学者平岗武夫（1909～1995），在《经书的成立》（1946）一书中，通过《尚书》的思想的考察，对于中国传统经书里的世界观进行了分析。周书的五诰（大诰·康诰·酒诰·召诰·洛诰）被认为是《尚书》中最早成立的部分，且其书中被认为呈现出统一世界观的思想，其中的世界观被命名为“天下世界观”。

在平岗的主张中，要点是：“天”的概念以殷周革命为契机而成立。平岗通过对被认定是殷朝的甲骨文以及金文进行分析，论述出在殷朝，正统性的根据是在“先王”那里，而不是在“天”，“先王”一味地保护相同氏族出身的“后王”。并且由于这样的思考方式，王与其他氏族只是征服与被征服的关系。

另一方面，在周朝，大诰篇里的“天惟丧殷”这句是讲，将殷朝毁灭的是“天”，王朝的正统性的依据要诉求于“天”。另外，在同一的大诰篇里也有这样的语句：

矧今天降戾于周邦、惟大艱人。

“天”不仅给周朝带来恩惠，同时也带来灾难。归根结底就是说，如果周朝有悖道德，同毁灭有悖于道德的殷朝一样，“天”也会毁灭周朝。另外，《尚书·泰誓》中说：

天视自我民视。天听自我民听。

天的看就是通过民的看。天的听就是通过民的听。绝对的天就是周的民。总而言之，周朝的正统性的依据在于“天命”。“天命”的去留与王能否获得“民意”之间有很大关系。

如果在这里与殷朝相比较的话，在殷朝，单就对于出自绝对的殷朝氏族与其他氏族的支配关系的成立这件事，在周朝，基于这样的“天”，也有超越民族的意识，通过“民众同样也是天”这样一个概念进行统和至今。其次，如《诗经·小雅》北山的诗中有这样的描述，

溥天之下、莫非王土、率土之滨、莫非王臣。

天下的土地、人民全部归属于周王。但是这并不等于说王之下平等被保证。春秋时代初期鲁国的僖公时代（前659～前627）的《诗经·鲁颂》里，閟宫的诗中有“戎狄是膺、荆舒是懲”这样的诗句。“夷狄”作为中华的征服对象，和教化的对象而被记载了下来。但是，这个华夷差别并不是绝对的东西。《孟子·离娄下》中有如下的记载：

孟子曰、舜生於諸馮、遷於負夏、卒於鳴條、東夷之人也。文王生於岐周、卒於畢郢、西夷之人也。地之相去也、千有餘里。世之相後也、天有餘歲。得志行乎中國、若合符節。先聖後聖、其揆一也。

舜和文王被作为圣王的模范。有明确记载舜和文王都出生于夷狄。中华是从夷狄变名而来这一说法也被认可。这个理论在中国的历史中，可以从下面的例子当中确定其现实效果。

清朝的雍正皇帝（1722～1735）在《大义觉迷录》中，对主张攘夷，有排满思想的儒者曾静曾说过这样的话。

不知本朝之為滿洲、猶中國之有籍貫。舜為東夷之人、文王為西夷之人、曾何損于聖

德乎。詩言戎狄是膺、荆舒是懲者、以其僭王猾夏、不知君臣之大義、故声其罪而懲艾之、非以其為戎狄而外之也。若以戎狄而言、則孔子周游、不當至楚應昭王之聘。而秦穆之霸西戎、孔子刪定之時、不應以其誓列于周書之後矣。

其中，雍正帝论证了把满洲族作为“夷狄”而加之轻蔑与排斥这样的态度有悖于儒教精神。如此的儒教世界观可以说是，起着作为承认中央和周边的流动性的理论基础的作用。

以上通过平岗武夫的《经书的成立》一书，对于天下的世界观以及其在历史上的所发挥的作用进行了研究。说起来，天下的世界观的成立是殷周革命时期，为了解决周王朝同多数其他氏族之间统治问题的产物。另外，以《尚书》为首的“经典”（canon）著作和统一的语言汉字为基础，自古以来就有对于超越民族的共同体的想象。在这一点上，同近代的“想象的共同体”无不有相似之处。

可是，不能不注意的是人们对于这个世界的认识方法有很大的不同。天下的世界里，不是像民主主义一样将“内外”问题化，而是如平岗所指，不如说是通过“中心”与“周边”认识世界。另外，在天下的世界观中，作为中心的中华比起作为周边的夷狄处于优势地位，但这样的关系是流动的，夷狄也有可能成为中华。

可以说“想象的共同体”是试图将本国与外国通过“内外”进行区分的理论，而“天下的世界观”则是通过中心与边缘的区分试图连续性地看待问题。从此论点可知，“天下的世界观”从根源上来讲并非排他性的，而是包容性的。而另一方面，“想象的共同体”在基于内外原理之上，试图对“外”进行驱逐，对“内”进行一元化，由此产生出诸多对立（日本的“尊王攘夷”思想则是这一典型）。天下的世界观不仅充满包容性，且拥有多元化的可能，因此不能将“天下的世界观”看成是通过国家主义克服掉的东西。天下的世界观所呈现出来的是多元化地看待世界的世界观。在这里，我想简单介绍一下日本历史上以儒学的“天下的世界观”为核心，多元地构想世界的儒者浅见綱斋的思想。

3、关于浅见綱斋的华夷说

浅见綱斋（1652～1712）是日本朱子学中最为严厉的学派山崎闇斎（1619—1682）一派的门徒，主要活跃在京都地区。在山崎闇斎学派中，一直被大家所探讨的问题之一是，日本人信仰儒教，这是不是意味着日本称臣于中国？

对于这个问题，浅见綱斋在《中国辩》中，从以下四点对何为“中国”和“中华”这一根本性问题进行了重新探讨。即从民族、地域、国力以及道德这四点来思考“中国”。但无论从哪个观点来说明，其结果都存在矛盾。具体如下。

若中华是民族名，那么舜、文王应是夷狄出身，与当今称他们为中华之主矛盾。若从地域来看，《尚书》中的淮夷狄徐戎之地虽在九州之内，却依旧被称为夷狄。若国力是指最为强盛的王朝，那么就不能将春秋时代的周称为中华，而将吴楚称为夷狄。而更为有趣的是，对于最后的“道德”，浅见綱斋认为在中国的历史上有无数的无道之君以及乱臣贼子，但即便这样中华却依旧被认为是中华。那么，在浅见綱斋看来，“中华”和“夷狄”究竟意味着什么？

浅见綱斋认为“华夷”之别即是“自他”之别。即对于出生于唐之人，唐即是“中国”，而对于出生在日本的人来说，日本即是“中国”。并且他认为这种想法即是“孔孟之道”。因此同样信奉儒教的不同国家的人士，应相互尊重各自的立场，不应肆无忌惮地相互攻击。

“中华”这一概念，无论通过民族、地域、国力、道德中任何一个角度都无法彻底地进行说明。究其原因，我们可以认为这是因为“天下的世界观”拥有包容他民族以及夷狄等

不同性质集团的发展背景。可以说桐斋是将“中华”这一概念的包容力，当做包容多元化世界的存在方式所进行的重新思考。在围绕经典和教义这两个概念，正统和修正的对立可以认为是对于中心的互相掠夺。其结果是通过内外的区别，用“内”来粉刷“外”。桐斋之说虽非是为了解释经典和教义而提出的，但在形而上层面上所构建这一点则显得异常重要。平冈武夫的“天下的世界观”完全是经书中潜在地构成的理论，但通过借鉴浅见桐斋的论点，这种潜在性可以被我们所提取。“中心-边缘”原理的世界可以容许中心与边缘的替换。而这里需要注意的是，并非中心变为边缘，而是中心变得多元。

结论

笔者认为，在通过拥有语言与经典典籍来想象出一个共同体这一点上，“天下世界观”与“想象的共同体”拥有共同的特征。但两者也有显著的不同，即“天下世界观”没有内外之分，而是一种拥有诸如“中心”与“周边”的连续性的世界观，而反观“想象中的共同体”，则可以说是严格区分内外的。

笔者认为，清末民初，被“想象的共同体”论取而代之的“天下世界观”相较于排他性的民族主义，反而是一个更加多元化的理论。这一点应该可以视作是被历史所实证的清末民初世界观的构造变化。

人格化的国家和国家化的感动
：《感动中国》中意识形态的日常化实践
马 岚（MA Lan）*

在后现代、多元化、全球化的浪潮中，人们所面对的外部环境和内心世界都异常纷杂，在这种境遇之中如何重新寻找失落的精神家园，重建核心价值体系，培植和巩固对于民族国家的归属感和认同感就显得极为迫切而重要。随着时代的演变，国家意识形态的表达途径和言说方式也在发生着变化，自上而下的说教和重大理论的诠释，都无法与动员民众参与实践的作用相比拟，因而大张旗鼓的集体性运动和上纲上线的严肃说教日渐让位于一些更为柔软而迂回的方式，国家也从展演的前台逐步“隐退”到了幕后。

在现代社会，大众媒介尤其是电视担当了塑造国家意识形态和族群文化的重任(李朝阳，2010)，国家经常会借助这一看似中立的载体来表达意愿、赢取民心，为权力的存在和运用奠定合法性的基础。特别是当下比较流行的以仪式、典礼等形态呈现的媒介庆典，使得大众媒介与社会生活更深地互相嵌入，改变了在传播领域由意识形态机构主导的单一刻板的国家景观，同时也拓展了国家意识形态的表达途径，提升了传播的有效度。本文以 2002 年央视推出的一档颁奖节目《感动中国》为实践案例，近距离的观看这个电视颁奖典礼，解读其中的话语表达实践、意义生产模式以及社会认同的建构，揭示民族国家如何利用媒介庆典的形式来对人们的价值观进行塑造，展现出现代国家政权在新时期的宣传手段和教化途径。

一、政治仪式中的国家话语

“你已经多久未被感动了？有人说过一颗许久未被感动的心，就像一朵很久未被浇水的花”。这是 2002 年第一期《感动中国》的开场白。中国最主流媒体当年全新打造的一档人物颁奖类节目，就在这样一种基调中拉开了大幕。在开场的表述中蕴含着这样的判断：感动是完备人格美好心灵的必须品，但却日渐缺失成为稀有品。它预设了“偏离常态”的个人和社会——认知的离散、道德的缺失、核心价值体系的碎片化。在不会感动不易被感动的社会情境中需要引导人们被感动，形塑人们为何而感动，进而以“感动”为内核建构起普适性价值体系。“感动”这种原本该是极其私人化的体验，正如主持人所举的十岁小女孩的例子——“有一天我放学了，晚了一个小时，走出校门一看，我姥爷在寒风中等了一个小时，我就哭了。”但是借助大众传媒所构建的公共时空，这种私人情感因为实现了“共同在场”而具备了被塑造的可能性。

《感动中国》从始至终贯穿着一系列的仪式行为和仪式话语，在形式结构上也体现出一种完整的仪式性特征。仪式的存在与运用，往往能折射出象征符号与政治权力之间密不可分的关系（陈蕴倩，2008）。正如格尔兹所说，象征、庆典和国家的戏剧形式是政治现实化的一种途径，是实现权力意愿过程中的动员手段（格尔茨，1999）。因而在更高层面上，媒介庆典又可以转换为“政治仪式”或“国家仪式”，成为一种国家景观，呈现出内涵上的丰富性。《感动中国》正是一个国家在场的政治仪式，旨在传达政治意义、价值观念和社会情感，进而造就理想国民，这是民族国家力量向民间社会渗透的重要方式。

* 南京大学社会学院人类学所博士研究生。

1.仪式时间：《感动中国》的播出时间大致是在农历新年的初十左右，这个时间的选择也是有一定意义的。春节的庆祝活动和假期刚刚结束，人们重新返回工作岗位，一切步入正轨。这个时候对过去一年的重大事件进行梳理，对典范人物进行表彰，既是对过去的总结，也是为人们新一年的思想和行为方式树立标杆，将这种感动的效果运用到未来一年的工作生活中去。之所以选择在春节期间而非元旦，正是因为对于中国人来讲，春节作为最隆重的传统节日所附带的文化意义远远大于元旦，人们更倾向于以农历新年作为生活事件和记忆言说的时间维度。这个通过大众媒介呈现的政治仪式极力在和人们的日常生活保持一种亲和性，以便于更好的被接受。

2.形式结构：《感动中国》已经形成了固定的程式化表述结构，仪式过程由四部分组成，分别是人物事迹介绍、获奖者亲身讲述、宣读颁奖词和荣誉授予。每位年度人物的推出由一段VCR引导，这个短片在几分钟的时间内要提供饱满的新闻信息，重心在于展现获奖人物的成就和事迹，在观众的脑海中建构出一个想象的英雄形象。而后邀请获奖人物或是相关人士出场，主持人对其进行现场访谈，实现“想象的个体”与“形象的在场”的重合。在现场访谈的环节，重心从事业成就转移到讲述个人付出上来，呈现获奖人物生活化的一面。接着是主持人宣读颁奖词，将人物的具体事件上升到宏观的、精神的高度。最后是颁奖，完成英雄人物的最后加冕。

3.国家话语：在《感动中国》作为公共性媒介事件的传播过程中，不论是在年度人物的选择上，还是在把年度人物变成“国家偶像”的仪式过程中，国家话语都起着主导作用。所推选出来的人物事件基本上都属于宏大叙事的范畴，在民族国家价值体系中处于核心位置，可以分为以下几类：(1)优秀共产党员的代表、党的好干部，清正廉洁，一心为民；(2)在自身领域表现突出，为民族和国家赢得荣誉；(3)以个人之力为维护社会公平正义、改善人类生存环境做出巨大贡献；(4)在危难时刻挺身而出、舍己救人，体现出利他主义精神。在人物身份上，专家学者、商界人物、政界人物、军警英雄、体育演艺明星是几个基本类别，已经形成固定范畴，他们都属于民族国家的精英阶层。在年度主题上，当年具有广泛影响的重大事件、标志性人物都是必然入选的。如2008年度因为全国性重大事件较多，年度主题被固定在“南方冰雪灾害”、“汶川地震”、“奥运”与“神七”这四个重大事件上，11个年度人物奖项9项出自其中，比例高达81%，是历届人物评选活动中国家主题最显著的（莫继严，2012）。因而年度人物的选择就是国家形象人格化的过程。但是一旦被选定，又得努力把人物形象向国家符号转化。每位获奖人物的颁奖词因大量国家符号的注入而直接呈现出个人事迹与民族国家的关联性，如中央财经大学研究员刘姝威“推动了中国股市早日走上正轨，推动了中国经济的发展”；篮球运动员姚明“在一个强手如林的国家运动项目中占有了一席之地，成为中国人的骄傲”；航天英雄杨利伟“承载着中华民族飞天的梦想，象征着中国走向太空的成功”；香港影星成龙“在国际影坛展现出中国影人的形象，为世界打开了一扇了解中国文化的窗口”；田径运动员刘翔“代表着一个正在加速的民族”；37年坚守诺言的陈健“坚守承诺始终是支撑人性的基石，对人如此，对一个民族更是如此”；蓝领专家孔祥瑞“150项革新，给国家带来8000万元效益，这就是一个工人的成就”；两弹元勋钱学森“国为重，家为轻，他是中华民族知识分子的典范”……这些颁奖词通过为个人行为赋予国家和民族的集体价值完成了从微观个体到宏观层面的转换，在淡化了人物个性色彩的同时建构起一种集体形象，而作为个体的年度人物便是社会角色的浓缩，是国家形象人格化的结果，颁奖仪式即是对过去一年中国社会及中国人角色行动的“集体加冕”。这场媒介庆典实质上是国家在场并有效组织的政治仪式。

4.中心与边缘：仪式在举办的同时也预设了其参与和被影响的群体范围，在展演过程当

中通过不断强化“我们感”来划定群体边界，增加向心力。作为每年开年时刻在中国最主流媒体的舞台上展演的一场政治仪式，《感动中国》在时空上形成了一个关注的焦点，也构建了一个意义上中心的概念，同时中心也因将边缘的纳入而显得更具包容性。边缘既指地理位置上的边疆，也意指着经济文化的薄弱地区，因而少数民族和山村乡野是两个被关照的边缘，在每年的年度人物上都有所体现。历年的感动人物中少数民族人物有：地震灾难中全家5人遇难还带领群众抗震救灾的新疆琼库恰克乡6大队村党支部书记达吾提·阿西木；多民族孤儿的新疆妈妈阿里帕·阿力马洪；青海省玉树藏族自治州康巴铁汉才哇。属于驻守边疆奉献山区的人物有：贵州大山深处孤身支教的大学生徐本禹；重庆市北碚区柳荫镇的乡村医生周月华、艾起夫妇；四川省凉山彝族自治州马班邮路邮递员王顺友；凉山彝族自治州悬崖小学的支教夫妻李桂林、陆建芬；26年义务守护滇池环境的农民张正祥；坚守藏区12年支教胡忠、谢晓君夫妇；投身四川凉山麻风康复村教育事业的台湾同胞张平宜；南沙守礁97个月中国军人李文波。《感动中国》通过借助国家传媒工具，打破时空界限、在同一时间点上将处于不同空间位置、具有多样性身份特征的成员凝聚起来，将少数民族和落后地区同主流群体精英阶层进行并置和呈现，赋予这些边缘地区以中心的意义，一方面重申了民族国家的界限，同时也增加了边缘对于中心的向心力，重塑了民族国家的认同。

二、学会感动——自然感情的国家化

能入选到这个节目当中的人物，仅仅符合意识形态的标准是不够的，关键的一点是要迎合人的感情需要，能让人“感动”。何为感动？如何能让人感动？这恐怕是节目设计者在酝酿过程思考的一个核心问题。

首先要能够集中大众的目光，形成一定的观看群体。《感动中国》在表现方式上一改过去事迹宣讲式的报道策略，运用讲故事的叙事方式，聚焦于人物的心路历程和事件的细节上。这种细节的挖掘在某种程度上弱化了政治所带有的严肃基调和刻板面目，具有了“狗仔队”般的“八卦”色彩，因而使得这场政治仪式更具可视性，产生一种“围观效应”。而在吸引眼球之后如何做到让人感动呢？从心理动力因素来讲，感动不同于崇拜或者敬仰，丰功伟绩本身并不能让人感动，让人动容的一定是艰辛、承担、付出或是有所舍弃，相对于励志性的“硬力量”，感动是“柔弱的软力量”（朱龚星，2012）。这样的情绪我们称之为“自然感动”。因而典型形象只有在呈现出作为普通人生活化的“软”的一面的时候，才是最能捕获人心灵的瞬间，所以关键就在于如何挖掘和包装这种生活化的动人因素。

在年度人物追求、付出、坚持直至获得成就的过程中大多伴随着对自己身体的不爱护、对家人的疏忽，或是甘守清贫寂寞，或是顶住外界重压。而年老、柔弱、疾病、死亡、离别、孤独是离感动最为接近的自然事件，极易唤起人们感情上的共鸣，是故事的高潮也是感动的顶点。将年龄、性别、身体等自然因素与社会成就结合起来就极易渲染出煽情的效果来。比如德高望重的医学专家吴孟超，短片的第一个镜头是他为病人摆放床前的鞋子。90岁白发苍苍的老专家为病人摆鞋，这个行为即使是由一位普通老人来完成就很能打动人，再附加上他的社会身份——医学泰斗为病人服务，便使得这种自然的感动进一步放大和提升（何昊，2012）。再比如侵华日军细菌战中国受害者诉讼代理人团长王选，在介绍短片里反复出现的镜头就是她独自行走的身影，意指她奔走在一条看不见尽头的诉讼之路上。这里形成了极大的反差：一项关乎历史事实关乎民族声誉的使命却由这样一个柔弱的女人独自承担，担子之重和人物的柔弱，路途的艰辛和她的坚持，这种反差正是能打动人的所在。又如马班邮路邮递员王顺友和他的马

在山间踽踽独行，入夜，王顺友坐在篝火旁喝酒，空旷的山间只有他不成曲调的歌声。这样的画面再配上解说词极易产生煽情的效果——“孤独是他生活的一种常态，甚至会在十四、十五天的时间里自己跟自己的歌声打交道，跟身边陪伴他的马打交道”。“20年，每年至少330天，在苍凉孤寂的深山峡谷里踽踽独行；20年，步行26万公里足可重走长征路21回，环绕地球6圈半；20年，没延误一个班期，没丢失一封邮件，投递准确率100%”（周建华，2007）。

在2002-2012年11期的感动中国当中，有16位获奖人物是已经离世的，有的是身患重病坚持工作到最后一刻的，有的是为抢救人民生命财产英勇献身的，有的是危难关头舍己救人的，还有的是为已经离世的著名人物……死亡作为人生不可逆的终极事件，在激发人的感情上是最有分量的。对于这种离世的获奖人物，往往会邀请其至亲或者同事来进行现场访谈，他们会将自己对已逝者的感情投射到自己讲述中去，声情并茂潸然泪下的场景对于观众来讲也是一剂很猛烈的感动催化剂。

当这种自然感动与人物的社会成就、被赋予的国家话语结合在一起的时候，因“柔弱的软力量”而产生的感动与宏大叙事激发的感染力交织在一起难分彼此，感动的国家化过程便会在无意识中自然而然的完成了。这份感动不再是个体而细微的感觉，英雄人物的主体性已成功转化为受组织认可的某种精神的表征，成为属于整个国家整个民族感同身受的一种群体心理，是能让国民普遍认可的一种价值判断。

三、日渐隐退的国家

即使本质上是一场政治仪式，但是《感动中国》在表现形式上在尽力降低其中的政治色彩，这使得无论从观看效果还是接受程度上来讲都显得更加平易近人。节目的推选委员会由社会各界知名人士组成，他们的共同特点是文化水平和知名度较高、社会影响力强，此外在职业身份和专业领域上具有较广的覆盖面，如此以显示其作为媒体议程延伸的权威性与代表性，但同时又并非官员身份，可以提供独立的“民间声音”（莫继严，2012）。而实际上这些作为“舆论领袖”在人物选择和表述方式上都会处于“民族国家思维”的取向之中，他们实际上本身就是民族国家的社会精英阶层和代言人。年度人物的推选词也由他们来撰写，推选词和颁奖词都是采用了一种文学性的建构（周建华，2007），采用排比、对比、递进、转折等多种修辞方法，文字优美、语言精练，人文色彩浓重，规避了政治话语的“上纲上线”特性，将《感动中国》包装成了一台感人至深的精神与艺术盛宴。颁奖环节一改以往由官方机构授予荣誉由官员进行颁奖的做法，由小学生来完成。因为以感动为标准评选出来的人物由任何机构和个人来颁奖都显得不合时宜，那么索性由象征着纯真和希望的小学生来完成便不落俗套，此外当小朋友将奖杯和鲜花献给获奖者时，观众感受到的不只是获奖这一事实，而且感觉到了国家的希望，这种打动人心的组合也象征着民族精神的扩展和延续。

在十多年的历程当中，《感动中国》也在与时俱进，总的来讲标准越来越包容，视角开始关照微观，相应的年度人物在身份特征也发生着一些变化。最初几期的《感动中国》还是以丰功伟绩的宏大话语模式为主导，突出的是干部、军人、医生、知识分子、劳动模范和文体明星等“大人物”以及他们为国家所做出的“大成就”。2004年，从捐肾救母的当代孝子田世国和大山深处孤身支教的大学生徐本禹入选开始，节目导向发生了转变，一些“小人物”的身影出现在了感动的舞台上。我们把小人物定义为“没有显赫身份的普通人做出的奉献社会的举动，或是在日常生活中自强不息、体现了中国人的优良传统和传统美德”。2005年，这样的“小人物”更是显著增加：三次跳入水中救人的河南小伙子魏青刚，大山里最后的赤脚医生李春燕，

带着妹妹上大学的洪战辉，37年坚守诺言的上海知青陈健，凉山彝族自治州马班邮路邮递员王顺友，青藏铁路的建设者等。笔者将12期《感动中国》中的小人物进行了统计（如图1），2005年、2009年、2011年、2012年“小人物”的数量都超过当年年度人物的一半。

图1

年度	小人物					
	奉献社会		自强不息、体现传统美德			
	人数	占比	人数	占比	合计	占比
2002	0	0	0	0	0	0
2003	0	0	0	0	0	0
2004	1	1/11	1	1/11	2	2/11
2005	4	4/11	3	3/11	7	7/11
2006	2	1/11	1	1/11	3	3/11
2007	0	0	3	3/11	3	3/11
2008	2	2/10	1	1/10	3	3/10
2009	4	4/11	2	2/11	6	6/11
2010	2	2/13	2	2/13	4	4/13
2011	5	5/11	2	2/11	7	7/11
2012	4	4/11	2	2/11	6	6/11

如果说乡村支教的徐本禹、大山赤脚医生李春燕、26年义务守护滇池环境的农民张正祥、马班邮路邮递员王顺友、为留守儿童办学的女大学生李灵还带有“爱国敬业奉献坚守”的“螺丝钉”精神的话，那么田世国的捐肾救母、陈玉蓉的割肝救子、带着妹妹上大学的洪战辉、坚守诺言的陈健、携妻照顾初恋女友的韩惠民、身残志坚的少年黄舸的则是彻底的私人事件，所做的并不超出个人、家庭、友情、爱情的范畴，这些因涉及“私人事件”的人物登上国家舞台似乎表明国家涉入程度的弱化，但这背后有着一定的社会背景，它实际上是以一种更为隐形的途径昭示了国家价值指向。

改革开放后中国社会在物质生活上取得了巨大进步，但是生活场景的迅速变迁使得生活方式、价值体系较之前产生巨大断裂，中国传统文化的精神与传统叙事的方式遭受巨大冲击，同时却没有建立起一个能为国民共同认可的核心价值体系。于是，如何重建共识，维护良好的社会秩序是治国者亟待解决的一个问题。而某种道德和观念上的共识对于公民的素质的养成、社会的整合是十分重要的。这样一种社会资本，只能由宗教或文化传统提供（陈明，2007）。传统价值体系是中华民族的一笔财富，也是极易动员民众的历史资源，以“忠”、“信”、“笃”、“敬”、“义”所代表的传统美德便成为救世的一剂良药。随着一些社会问题越来越引人注目，如义务教育的困境、见义勇为的尴尬、诚信质朴的缺失、亲情爱情的疏离等等，一些在解决这些问题方面树立了榜样的小人物非常让人感动。正是因为他们的平凡普通，有时候甚至是一种卑微的存在，越发具有贴近生活、贴近现实的力量，在熟悉和朴素中更直接地达到人的内心，起到教化的作用。因而《感动中国》为国家巧妙地植入其意识形态提供了足够的弹性空间，这场看似是草根英雄人物评选庆典背后，挥之不去的，仍是国家意识形态的“影子”，在观看聆听别人的家庭故事的时候，以巧妙的方式，悄悄完成了将国家导向置入其中的使命。

在现代社会里,人的情感越来越成为外在的社会力量(组织、权力和资本)的控制对象。与此同时,情感表情逐渐符号化了,情感的沟通越来越成为一种以大众传媒为主导的、单向的形式,越来越成为可以由权力团体借助于大众传媒所操纵的过程(王宁,2000)。在传统宣传形式式微的情况下,国家意识形态灌输开始探索表达途径的创新,《感动中国》正是借用了最身体化、感觉化、私密化的一种方式,来实现传播的渗透性与易传输性。又因构建了一个仪式性的场景,将平时潜在的、零散的情感在仪式这一具体时空中被激发、集中起来,仪式场合调动起来的感覺很容易转化为高涨的情绪爆发出来,这种爆发可以衍生为强烈的克服艰险生死与共的情感升华,持续不断地激起有关社区、国家,与民族的集体理想与认同感,成为社会动员的依托。

参考文献:

- 李朝阳,2010,《“春晚”的身份定位与功能前瞻》,《探讨与争鸣》第5期。
- 陈蕴倩,2008,《谒陵仪式与民国政治文化》,《开放时代》第6期。
- [美]克利福德·格尔兹(clifford geertz):《尼加拉:十九世纪巴利剧场国家》,赵丙祥译,上海人民出版社,1999年版。
- 莫继严、麦尚文,2012,《新闻仪典、公众性格、国家符号——<感动中国>影响力生成机制探析》,《电视研究》第5期。
- 朱龚星,《从“感动中国”看新时期典型人物的选择与报道》,《中国记者》第5期。
- 何昊、张兵,2012,《寻找感动的力量——<感动中国>2011年度人物颁奖晚会创作谈》,《电视研究》第4期。
- 周建华,2007,《打造精神与艺术的盛宴——析<感动中国>年度人物颁奖典礼的文学性修辞》,《新闻爱好者》第3期。
- 莫继严,2012,《大型电视年播节目的运作与社会资源开发路径——以CCTV<感动中国>栏目为例》,《新闻知识》第1期。
- 陈明,2007《公民宗教随札》,《原道》第十四辑。
- 王宁,2000,《略论情感的社会方式——情感社会学研究笔记》,《社会学研究》第4期。

作者简介:马岚,女,南京大学社会学院人类学所博士研究生,江苏省社会科学院助理研究员。

残留日本人是谁
：东北亚的边境与家庭
中山 大将（NAKAYAMA Taisho）*

一、京都伊拉斯谟计划南京派遣项目

2010 年以及 2011 年夏天，3 位京都大学文学研究科 GCOE 研究员以及 3 位京都大学研究生通过京都伊拉斯谟计划被派往中国南京大学。京都伊拉斯谟计划是京都大学文学研究科以及经济研究科在获得日本学术振兴会的资金后开始的一个大型研究教育规划项目，其目的是向亚洲以及其他地域的大学派遣年轻研究者以及研究生，以此构建年轻研究者之间的学术交流网络。南京项目（中国社会研究短期集中项目）的特点是招募专门从事中国社会研究之外的年轻研究者，以及对中国社会即将进行相关研究的研究生。

在被派到南京大学之后，日方的研究者在接受短期的汉语培训的同时，与南京大学社会学院的研究生一起进行了共同调查，并于 2011 年以及 2012 年在南京大学举办了学术研讨会。今年我们将地点移至京都大学，作为新成立的亚洲研究教育中心（KYOTO UNIVERSITY ASIAN STUDIES UNIT）活动的一环举办了本次论坛。

在今天的发言中，我将在简要总结自己京都伊拉斯谟计划的经历以及 GCOE 研究员时代研究之后，对自己的最新研究进行相关介绍¹。

二、中国农村调查

京都伊拉斯谟计划派遣期间，我们与南京大学研究生在江苏省的青龙社区、开弦弓村以及安徽省的宅坦村进行了共同调查。调查中，我最为关注的是改革开放后中国农村社会的社会主义制度是否发生了变化以及如何变化，这是我对非社会主义的日本社会与秉持中国特色社会主义的中国现代社会进行探讨的着眼点。

20 世纪 20 年代日本的中国农村社会研究主要基于马克思主义的观点，然而，实证性的中国农村研究到 20 世纪 30 年代前半期才真正被着手。其原因并非学问所需，而是为了配合日本帝国主义的不断扩大。到了战后以及冷战期，由于日本人很难进入中国大陆进行农村调查，所以当时的学者一直沿用战前农村调查的资料对新中国以前的农村社会进行研究²。

20 世纪 90 年代以后，日本人进入中国大陆进行相关调查变得相对容易，中日学者的交流也日渐增多。这之中包括日本的农村社会研究者和农村史研究者与中国的研究者所进行的有关人民公社解散后的中国农村的共同调查。近年来在日本学术界，有关中国社会、经济、政治等各各方面的中国农村研究也出现很多成果。

我们的农村调查也主要以观察人民公社的解散过程以及解散后中国农村社会所发生的变化为目标。具体的调查内容及成果，请参考我们的报告书，在此不多赘述³。

* 北海道大学斯洛夫研究中心，日本学术振兴会特别研究员。原京都大学文学研究科 GCOE 研究员（2010 年 4 月至 2012 年 3 月）

¹ 本文是在笔者 2013 年发表的《萨哈林残留日本人》（兰信三编著《帝国之后人的迁移》勉诚出版，2013 年）这篇论文的基础上修改而成。详细内容请参照以上论文。

² 石田浩，1986，《中国农村社会经济构造の研究》，晃洋书房。

³ 中山大将、巫觐、李德营「中国农村的公共宣传：从“原子化”以及“组织化”的观点来看」（櫻田涼子・中山大将編『京都エラスムス計画 2011 年度 中国社会研究短期集中プログラム成果報告 一 京都大

从结论来讲，正如很多研究者已经指出的，当代中国农村的社会主义经济结构正在不断瓦解，但社会主义政治结构仍然存在。对此，日本社会普遍认为社会主义国家和非社会主义国家的本质区别是经济结构，然而通过以上的农村调查，我们可以认为这种认识是不够准确的。

笔者认为社会主义国家与非社会主义国家的根本区别应该来自政治结构的差异，即民主集中制与议会制民主主义的差异。议会制民主主义唯恐民主集中制，因为民主集中制的一党专政与资产阶级政党政治不能两立。相反，民主集中制也唯恐议会制民主主义，因为选举制度在很大程度上威胁到无产阶级的专政。对民主集中制而言，重要的是学习正确的思想，而对议会制民主主义而言，自由议论则最为关键。现实之中，这两种政治结构之间的对立、不信任感以及一些其他因素最终引起了冷战，同时由于这一对立，商品、金融、信息以及移动也附带地受到了限制。

三、萨哈林残留日本人

今天我所要讲的“残留日本人”正是在日本帝国的瓦解以及冷战持续之中产生的一个悲剧群体。近十几年来，“流散”一直是日本的人文社会科学研究领域的重要关键词。然而笔者认为仅仅从“流散”这个角度还不能真正了解帝国及冷战持续之中因人口移动及其限制而产生的悲剧。基于此，笔者在 GCOE 研究员阶段主要从家庭的角度对国界的变动进行了考察。

说起“残留日本人”，在日本大家立刻就会想起中国残留日本人，特别是中国东北的残留日本人，但我所关注的则是不为日本社会的大多数人所知的萨哈林（桦太）残留日本人。我认为萨哈林残留日本人的产生并非仅仅是因为国界线的变动，社会主义世界与非社会主义世界之间不幸的关系也是重要的原因之一。另外，除却宏观的政治性因素，家庭这一微观因素也很重要⁴，这一点在我之前的研究中已得到强调。

四、萨哈林岛与冷战

萨哈林岛是位于黑龙江河口对岸的狭长岛屿，与地处萨哈林岛南面的北海道本岛大小相近。中文文献中一直将萨哈林岛称为“库页岛”，“库页”指的是萨哈林岛的原住民“阿伊努族”。直至瑯珲条约（1858 年），清帝国与阿伊努族等的原住民都有贸易上的往来。自 19 世纪末期至二战结束，萨哈林岛的领属不断在俄罗斯帝国和日本帝国之间摇摆。1905 年朴次茅斯和约之后，萨哈林岛北部归属俄罗斯帝国，南则归属日本帝国，这即是日本的殖民地“桦太”，之后日本人和朝鲜人先后从日本本土及朝鲜半岛迁移至南萨哈林（桦太）。

1945 年 8 月 23 日，苏联军占领南萨哈林并封锁宗谷海峡，之后，事实上的日苏国界线从北纬 50 度（萨哈林岛的大致中央）下移至宗谷海峡，这是萨哈林岛 20 世纪的第四次国界线变动⁵。1945 年 8 月苏联军进攻南萨哈林的之前，数据显示当时的南萨哈林约有 38 万日本

学・南京大学若手研究者共同フォーラム報告論文集一』京都大学大学院経済学研究科「京都エラスムス計画」事務局、2012 年 1 月 16 日、60-65 頁），以及中山大将、巫靚、李德营「中国农村的公共宣传：从“原子化”以及“组织化”的观点来看」（櫻田涼子・中山大将編『京都エラスムス計画 2011 年度 中国社会研究短期集中プログラム成果報告 一京都大学・南京大学若手研究者共同フォーラム報告論文集一』京都大学大学院経済学研究科「京都エラスムス計画」事務局、2012 年 1 月 16 日、60-65 頁）。

⁴ 中山大将，《桦太移民社会の解散以及変様：有关战后萨哈林的移动以及运动》《移民研究年报》第 18 期，2012 年，第 101-119 页。

⁵ 随着俄国革命及之后内战的发生，日军于 1920 年占领了北桦太实行了军政（保障占领）。之后，1925 年根据

人、2万5千朝鲜人、2千原住民以及200名左右的外国人。截至1945年8月23日，大概有9万日本人及朝鲜人疏散至北海道。之后约有2万4千名日本人及朝鲜人依靠自己的力量迁移至北海道。1946年12月至1949年7月期间，有27万左右的日本人被遣返至日本本土，而同时50万左右苏联人从大陆迁移至萨哈林岛。

然而事实上截止1949年8月，依旧约有2万3千朝鲜人和部分日本人留在萨哈林。根据笔者的调查，1949年8月南萨哈林约有1千4百名日本人。这些萨哈林残留日本人是怎样的群体？对于冷战后开始的萨哈林残留日本人归国运动，日本政府为什么断言“萨哈林没有残留日本人”？对此，今天的发言主要试图从日本政府的档案、各种团体的资料、萨哈林残留日本人以及朝鲜人的采访⁶中寻找以上问题的答案。

五、“疏散”⁷以及“归国”⁸

第一批离开萨哈林岛的日本人是在1945年8月13日至23日期间“疏散”至北海道的。而第二批则是1946年12月至1949年7月期间的“归国”人员。由于这第二批的“归国”基于美苏之间的协定，原则上当时朝鲜人是不能离开萨哈林的。然而，日本政府相关部门的记录却证实当时“归国”的人员当中包括了朝鲜人。为此，日本政府始终未能明白个中原因⁹。为什么会发生这样的现象？要搞清其原因，还得从“朝鲜人究竟指谁”说起。

日本政府认为朝鲜人指的是在日本帝国主义时期拥有朝鲜户籍的人¹⁰，而与此不同的是，苏联政府却认为朝鲜人指的是在苏联国内身份证上记载“朝鲜民族”的人。苏联政府于1946年对占领前就住在萨哈林的日本人、朝鲜人等居民发放了身份证，当时苏联政府要求居民自行向有关部门进行民族申报。这之中，有些人虽然拥有朝鲜户籍，却在申报时声称自己是日本人。虽然在日本政府看来这些人依然是朝鲜人，但由于苏联政府认为他们是日本人，因此在1946年12月至1949年7月的“归国”期间，他们被允许上了“归国”船。“归国”船回到日本之后，即出现了所谓朝鲜人来到日本的情况。由于同属东亚人，再加上殖民的影响，无论是外观还是语言，朝鲜人与日本人都没有什么区别，苏联官员无法辨别也是情有可原。

六、冷战期归国

1956年日本与苏联实现邦交正常化，从这一年起至1959年萨哈林残留日本人得以集体归国。这之中不仅包括约800名萨哈林残留日本人，他们的朝鲜人家属（配偶、孩子等）1,600位也从萨哈林来到日本。根据冷战期归国者的乘船名册的统计，归国的家庭中约7成是妻子

日苏基本条约，日军从北桦太撤退，苏联统治北桦太。这就是萨哈林岛在20世纪的第2和第3次国界线变动。

⁶ 主要参照的档案是日本国外交部外交史料馆收藏的以下史料：从《苏联地区邦人引扬关系一件引扬实施关系 第四卷》到《第九卷》，《苏联地区邦人引扬关系桦太残留者引扬关系》。另外，日本国会会议录

(<http://kokkai.ndl.go.jp/>) 以及在日韩人历史资料馆收藏的李义八所赠送的文献也作为史料有所引用。笔者自2009年至2012年对15位萨哈林残留日本人以及9位萨哈林残留韩人（包含归国者）进行了个人史（Life History）的调查。协助笔者进行调查的组织以及团体如下。日本方面包括日本萨哈林同胞交流协会、北海道归国者支援交流中心、全国桦太联盟。俄罗斯方面包括萨哈林北海道人会、萨哈林州韩人会。韩国方面包括安山市故乡之村永住归国者老人会。这之中日本萨哈林同胞交流协会为笔者提供了9种名册，以此大大促进了残留日本人数量的研究。特借此机会对他们表示感谢。

⁷ 日语中称为“疎開”。

⁸ 日语中称为“引揚げ”。

⁹ 函馆引扬援护局《函馆引扬援护局史》函馆引扬援护局、1950年、第44-45页。

¹⁰ 本研究也为了方便沿用这个定义。

为日本人、丈夫为朝鲜人的家庭，并且这之中 8 成是战后形成的，余下的 2 成是日本帝国主义时期就已形成的家庭。由此可知，萨哈林残留日本人家庭有 7 成是因家属中有朝鲜人而没有得到遣返，余下 3 成是特别技术人员等的日本人家庭。

冷战期间的萨哈林残留日本人归国过程中，出现了“自称日本人的朝鲜人”问题。与战后第二次撤离相关，冷战期间回到日本的萨哈林残留日本人中包括了拥有朝鲜户籍，但苏联国内身份证上是日本人的朝鲜人。在我的采访调查中，我曾遇到过两位这样的朝鲜人。一位是因为当时自己的朝鲜人工头说持有日本人身份证比持有朝鲜人身份证更方便，因此战后申请了日本人身份证。而另一位则是因自己的养父母是日本人，于是在冷战期间申请了“回到”日本。这里需要补充的一点是，以上的两位朝鲜人在战前都跟日本女性结婚，但他们的妻子在 1945 年 8 月“疏散”时就已经跟孩子一起回到日本。据他们所讲，他们申请来到日本的最大原因是希望在日本能见到他们的家人。由此可见，日本帝国时期与日本人组成家庭，是引起战后萨哈林朝鲜人来到日本以及自称日本人问题发生的原因。

七、丰原事件以及假结婚问题

冷战期间由萨哈林来到日本的朝鲜人丈夫都是因为妻子想回来才来到日本的吗？事实上并非如此，萨哈林朝鲜人中有一部分人是主动希望“回到”日本的，我们可以从“丰原事件”以及“假结婚问题”的分析中看得出来。

丰原事件是在冷战期归国开始之后，发生在萨哈林州都南萨哈林市（“丰原”是 45 年之前，南萨哈林市的日文称呼）的事件。日本人可以归国的消息在当地传开之后，约有 800 位朝鲜人涌到官厅申请“归国”，虽然这些人并没有日本妻子。为了制止这些人“归国”，当地的朝鲜共产党员与这些人发生了争执。朝鲜共产党员不能准许萨哈林朝鲜人从人类史上最伟大的、共产党领导的理想的祖国苏联去到颓废的资本主义、曾经是帝国主义的国家日本。而“假结婚”则正如字面所表达的意思，指的是当时试图通过与单身的日本女性假结婚来到日本的朝鲜男性的例子。这样的案件在当时屡屡发生。另外，根据桦太归还在日韩国人会（冷战期间跟日本妻子一起回到日本后，朝鲜人成立的团体）20 世纪 70 年代的调查，在希望回到韩国或日本的萨哈林朝鲜人之中约有 3 成是希望回到日本。这些朝鲜人为何希望回到日本？在日本有他们的家人、亲戚、朋友，或是不习惯社会主义国家苏联，希望回到一直以来生活的日本社会等等都是能够想到的理由。

冷战期间没有回到日本的很多人，大多都是因为她们的朝鲜丈夫不同意回到日本。残留日本人之中很多人已获得朝鲜人身份证，取得朝鲜民主主义人民共和国或者苏联国籍的人也不乏其人。在这种情况下，苏联政府和日本政府是不会允许他们回到日本的。因此，以女性为主的萨哈林残留日本人被淹没在了萨哈林朝鲜人社会和苏联社会中。

八、日本政府的态度的变迁

20 世纪 5、60 年代，日本政府要求苏联政府立即归还“苏联地区未归还者”。“苏联地区未归还者”不仅包括上文所讲的萨哈林残留日本人，还包括被苏联强制滞留的西伯利亚原关东军军人等。当时实现西伯利亚日本人归国是日本政府最亟待解决的事情，而萨哈林残留日本人的冷战期归国只是一个附带的收获。

尽管“自称日本人的朝鲜人”以及“假结婚”问题在当时被日本的一些国会议员提出，但日本政府依旧从“人道主义的观点”继续准可这样的朝鲜人入境，其背景是日本政府希望规避这

些问题的表面化，以防止苏联政府因此停止日本人的归国项目。而另一方面，为了避免萨哈林残留日本人因家庭的分崩离析而放弃回国，尽管当时的国会中有人对朝鲜人的入境本身进行了批判，各个部门还是依旧默认了朝鲜人的入境。

20 世纪 70 年代，日本政府认为至今依旧留在苏联，没有回国的日本人是因在当地已组建家庭等基于个人意愿而留下的。然而萨哈林方面，通过萨哈林残留日本人与日本的家属的通信内容，国会最终认识到依旧有希望回到日本的残留日本人。

然而，到了 80 年代，日本政府突然改变了之前的想法，他们认为萨哈林残留日本人指的是音信全无的人，而能够确认到的残留在萨哈林的日本人都是基于自己的意愿留在那里的。

日本政府的立场为何会发生如此改变？为了了解个中原因，我们需要从日本政府这一时期之前的内部动向来分析。1965 年日本的法务部、外交部以及厚生部举行了一次三方协议（日本国外交史料馆能阅览到当时协议发言的概要）。日本政府从冷战期归国者口中得知大部分的萨哈林残留日本人拥有朝鲜人的家属，随着时间的推移，以及取得朝鲜民主主义人民共和国及苏联国籍的人不断增多，对日本没有思慕之情或生活经历，不会日语的年轻人逐渐增多。为了规避萨哈林残留日本人问题的复杂化，当时的会议上有人提出“应在必要的时候停止（归国事业）”。在这次协议上，有代表认为 50 年代末的冷战期归国是一次失败的举动，因为接受了很多没有日本国籍的朝鲜人。日本政府为阻止国内民族的复杂化，因此希望停止萨哈林残留日本人的归国事业，80 年代的想法在这个阶段就已经显现出来。

而到了 90 年代，日本政府对后冷战时期归国运动一直持有以下态度，即“萨哈林没有日本人”，即使有也是他们“自愿留下的”。

九、结论

从冷战期的归国开始后发生的丰原事件、假结婚问题以及自称日本人的朝鲜人问题等，我们可以知道当时的萨哈林存在着因某种原因希望“归国”到日本的残留朝鲜人。然而，日本政府决却因他们没有日本内地户籍（二战结束前，日本本土户籍与殖民地户籍是分开管理的。），不承认这些原日本帝国臣民朝鲜人是“残留日本人”。

而即使拥有内地户籍，萨哈林残留日本人的大多数是朝鲜人的妻子或孩子，他们接受着萨哈林朝鲜人社会和苏联社会的两重同化。因为拥有这样的家庭背景，日本政府为极力规避民族的复杂化，而将这些人认为是自愿留在萨哈林，并将他们从残留日本人中排除。到了 80 年代，萨哈林残留日本人这一概念已经空化，对日本政府来说萨哈林残留日本人指的是音信全无的人，而能够确认的人都被认为是自愿留在那里的。

改变这一状况的是，1986 年开始的经济改革以及苏联瓦解，日本人能够相对容易地进入到萨哈林岛。加上支援萨哈林残留日本人的归国的市民运动团体以及大众传媒的关注，日本政府的态度才逐渐改变，最终实现了后冷战期的归国。

萨哈林残留日本人留在萨哈林，与忠诚于国家或民族没有任何关系。他们留下的原因其实只是作为一个人，优先选择了眼前最为重要的生活和家人而已。他们的残留其实应该归结于一般人所无力改变的国界线变动以及冷战的发生。她/他们的悲剧不是离散在祖国之外，而是被迫与自己之前的家人以及生活圈分离。

温州龙舟与地方社会变迁的民族志研究

吴天跃*

一、引言

本民族志¹以温州地区的传统龙舟和现代健身龙舟活动为研究对象，将其置于晚清民国到当代的长时段历史中进行考察，侧重论述上世纪80年代改革开放之后的变化。试以这一带有浓郁地方特色的龙舟活动为线索，管中窥豹，呈现地方社会文化的变迁。

在方法上，主要借鉴了日本民俗学家福田亚细男所谓的“个别研究法”或“地域民俗学”概念，而非同类资料的比较研究（重出立证法）。因此，在本文中并不讨论龙舟竞渡现象的起源、各地竞渡习俗的文化传播与同异，而是从地方社会群体长期的互动和实践，阐明特定地点的人们之所以维系和传承特定民俗事象的条件、原因和意义。

具体的材料来源有三种：1、历史文献。主要参考了宋代以后的温州地方志（以瑞安县为主）和文人文集，如《东瓯逸事汇录》、《歧海琐谈》、《张桐日记》、《厚庄日记》等。此外，还有地方上的重要碑刻、民间故事传说和建国后瑞安市档案馆所藏的政府禁划龙舟的公文等。2、参与观察与访谈。对于熟悉地方掌故的耆老（包括文史专家和普通村民）进行专门采访，收集了重要的口述史材料。亲自参与现代健身龙舟俱乐部的相关活动，并做了相关访谈。3、当代新闻报道、政协委员提案和互联网龙舟论坛的信息。我会对这些报道、提案和网上互动进行初步的话语分析（discourse analyse）。

本民族志试图通过文化“深描”来回答以下几个问题：1）温州传统龙舟活动的整个过程，对于当地人来说，是何种意义上的“深度游戏”？传统龙舟活动构建了怎样的社会关系？2）现代健身龙舟是如何在地方社会传播的？又如何与当地传统龙舟形态结合？龙舟活动开禁之后，当地积极申请省级和国家级非物质文化遗产项目，努力打造“中国龙舟名城”。这些事实反映了国家、地方政府与龙舟之间怎样的复杂关系？

二、传统龙舟活动与社会关系的构建

渡边欣雄在考察了香港长洲岛水上居民和渔民为中心的“龙舟祭”之后指出，“龙舟祭”是由礼仪表现的结构性的组合形成的一个复合性的祭祀。（渡边欣雄，1998:172-187）礼仪过程的三个方面——龙舟圣化礼仪、祝福攘灾礼仪、龙舟竞渡礼仪，与温州龙舟的基本仪式结构存在着共性。吴丽平通过对温州韩田村端午龙舟竞渡的观察，也认为龙船竞渡是地方社会共同参与下与阴间世界建立一种良好的秩序。（吴丽平，2007:352-366）

然而，传统龙舟竞渡既是与鬼神世界确立的一种关系秩序，也是人间的互惠交换。本文的侧重点在世俗层面的互惠交换，即地方社会如何借助龙舟竞渡来确认和调整社区边界和群体之间的关系。

温州地区龙舟活动的繁盛从客观上得益于中国东南沿海地区密集的水网。本文研究的瑞安龙舟则主要在温瑞塘河一带活动。在温州，除了地处山区的泰顺、文成等地，沿塘河、瓯江两岸的居民均有划龙舟的悠久传统。我所考察的村落也都分布在温瑞塘河沿岸。为了便于比较，

* 南京大学社会学院人类学所硕士毕业生。现为中央美术学院人文学院文化遗产系博士研究生。

¹ 此文是本人硕士毕业论文《温州龙舟与地方社会变迁的民族志研究》的缩写和改写，由于京都大学方面有字数上的上限，更多的文献材料、图表、数据在此略过。日本大阪国立民族学博物馆的外来研究员今中崇文先生对本文的修改提出了中肯的意见。在京都学习交流时，国立民族学博物馆研究员河合洋尚先生提到他之前在广州西关区域的龙舟活动考察，对本文亦有启发，待日后补充，并致谢忱。

最终确定以瑞安境内的莘塍镇、塘下镇以及主城区（原城关镇，现安阳镇）为主要田野调查对象。之所以选择瑞安，也是因为瑞安龙舟在温州龙舟界中有着“最迷信最封建”的口碑，很多龙舟事故在这里发生，并且素有跨乡镇活动以及与瓯海、平阳等地密切往来的习俗。据统计，20 世纪 80 年代瑞安全县每年都有几百只龙舟参与水上活动，其中 1985 年达到 408 只，超过了温州市龙舟总量的三分之一，占浙江全省龙舟活动盛行年份龙舟总数的 30% 左右；持续时间长，龙舟活动时间长的年份从农历四月初开始，直至农历“六月六”结束。（瑞安龙舟活动简史，2004：23）但由于瑞安的龙舟活动从 2008 年起遭到当地政府禁止，而瓯海区新桥镇和潘桥镇、乐清乐成镇的传统龙舟活动仍在活跃，遂忝列其中，作为对比参照的案例。

在这条蜿蜒曲折的塘河两岸，聚集着几百个村寨。每到端午时节，上百个村寨因为龙舟赛相聚，仿佛一场武林盛会，历史记忆、世代恩怨、悲欢荣辱全部都迸发出来。

温州一带划龙舟的时间，一般从农历四月初一开始到五月下旬结束，其活动基本模式如下：

表 1 温州传统龙舟过程解析图²



每年端午竞渡的集体狂欢，与民众的日常生活节奏差别很大，内部又有各种利益博弈和斗争。下面将着重分析不同社会角色的文化实践（cultural practice），以及不同环节的社会意义。

1、龙船娘与龙舟活动的区域划分

龙舟活动作为当地影响深远的历史传统，遵循一定的逻辑，在地理空间上形成了固定的记忆。因此龙舟活动的举行并非按今天的行政区来操作，而是按照历史上的片区划分。这种片区有点像“势力范围”。以瑞安龙舟为例，按习惯可以分为 4 个片区。一个片区的龙舟在竞渡时基本只与本片区的龙舟斗龙。在瑞安，几乎每一片区都有属于自己的龙船娘。何谓龙船娘？龙船娘也是某一社区的龙舟，一般是每一片区辈分较高的龙舟，不参与斗龙，主要协调本地各龙舟之间的纠纷，充当其中的“裁判”角色。龙船娘通常挂靠在该村寨中的某个民间土神庙。该片区的所有龙舟在名义上都是该龙船娘的龙子龙孙。这些属于同一个龙船娘的龙舟，按照当地人的说法，都是“兄弟龙”³。每年各村的龙舟在“上水”和散河收香时，都要到各自所属的龙船娘处参拜。

瑞安龙舟按习惯可以分为 4 个片区。一个片区的龙舟在竞渡时基本只与本片区的龙舟斗龙。分别是市区（老城区所辖范围，不含安阳新区）和上望镇为一组，莘塍镇、汀田镇和东山镇为一组，塘下镇和大典下为一组，飞云镇单独一组。这些片区以及他们历史上约定俗成的龙

² 这是为了便于叙述所做的粗略划分。

³ 虽然归属同一个“龙船娘”都称为“兄弟龙”，但我在塘下采访时，当地人告诉我，龙舟之间打架也发生在“兄弟龙”之间，村民笑着说：“这个很好理解，即使是兄弟也有窝里斗嘛。”我估计，“兄弟龙”这个概念有广义和狭义之分，村民在不同情境中所指不同。与“兄弟龙”相对的是“恩怨龙”，就是历史上曾经发生过矛盾冲突的龙舟。有恩怨的龙舟也可能归属同一个“龙船娘”。以瑞安塘下为例，与塘下本镇龙舟有恩怨的龙舟有肇平垟、前池、上马、新坊、大典下的龙舟。“恩怨龙”所在的村子的朋友之间，在端午节期间是不往来的，过了端午节，还是和平时一样。

船娘如下：

1) 市区和上望。有三只龙船娘：西门河埠头（竹排头）三官殿的太白老龙、东门硐桥头的青龙（因地处城内和西郊、北郊龙舟出塘河的必经路段，因此辈分较高）、南门濠河潭天后宫的金龙。

2) 莘塍、汀田和东山。这些地方的龙船娘都是莘塍下村东堂庙的大青（又称乌龙娘、青龙娘）。

3) 塘下和大典下。这两个地方的龙船娘在塘西。

4) 飞云镇。由于和平阳县交界，划龙舟的习惯更接近平阳而不是瑞安。飞云一带，按水域，几个村结成一个龙舟社，俗称 18 社、24 社、36 社不等，18 社即有 18 只龙舟，依次类推，每个社有一只龙船娘。其他龙舟都是兄弟龙。一个社里，地方实力最强的村，是社里的河主，也就是“大哥”，一个龙舟社聚会时，河主的龙舟专门巡逻和维持秩序的，没人敢惹他们。

需要注意的是，温州当地的龙舟活动如果仅仅是一个村子的事，那绝对酿不成如今的气候，排除人为因素和历史原因，我认为一个常常被忽视的却是铁的事实就是地理因素和生态学特征。温州的塘河，包括温瑞、瑞平等塘河将村寨之间像一根绸带连结在一起，有着适宜竞渡的宽阔河面。古称东瓯的温州一带，在上世纪 80 年代以来的大规模工业化城镇化之前确实是一方水乡泽国，但后来大片水面被填土盖楼，划龙舟的条件大打折扣。

自然地理因素也可以说是法国人类学家莫斯意义上的“社会形态学”。每个村子造龙舟都势必影响到隔壁村子，争相模仿，彼此竞争，乐此不疲。再加上村落共同体上百年来形成的通婚圈，隔壁村的龙舟会到本村收外嫁女儿的香案，这样的礼物交换模式强化了这些村子间的联系，构成了莫斯所说的“总体性的社会事实”。

2、龙舟头家

龙舟头家是龙舟活动的组织者，是由村民自发产生，并非公众推选。头家一般还有一个团队，大约 10 多人，当地老年协会的老人是积极参与者，头家及其团队成员一般由已婚成年男性担任。新老成员所组成的团队，共同加入到龙舟竞渡这一地方性节日中来。他们分工安排、各司其职，年轻人更偏重于发放请帖、筹集龙舟银、处理“收香案”、举行“斗龙”这些事，而“请神”仪式、防止斗殴、桥上巡逻等由老年人安排和指挥。一般而言，村干部、工厂老板不愿担任龙舟头家，因为龙舟竞渡屡出事故，而头家要承担责任。这在某种程度上为近年来龙舟头家“地痞化”现象埋下隐患。

3、龙舟银的筹集——“媛主银”和“摆香案”

龙舟竞渡需要建造或修整新旧龙舟，置办各种器具、衣物、鞭炮，准备赛后酒席宴会等，足够的资金是龙舟竞渡顺利进行的保证。在民间，这部分资金又被称为“龙舟银”。明代姜准、清代张桐在其文集、日记中均有提及。他们提到的“祭户”和“祭户之姻亲”须交纳龙舟银的习俗，一直延续至今，类似于今天的“媛主银”（又称“新妇银”）和“利市”。前者是父母要为当年新嫁的女儿交纳的钱财，称为“媛主银”，隐含着对新嫁女的庇佑之意；后者是外嫁女“摆香案”时送给娘家龙舟的钱，使得姻亲关系得到进一步的确认。外嫁女是社会网络的结点，也是联结婆家和娘家及两个村落的重要纽带，这种由婚姻事实所发生的社会关系在“摆香案”的过程中得以强化。此外，摆香案也与美名声望有关，外嫁女在向娘家人展示婆家财富并夸耀其财势和地位的同时，也被本村人认为是“很有面子”的事情。

如今，很大一部分的“龙舟银”来自当地一些企业家、工厂主，如果出钱多的话则有机会在龙舟上“端香斗”出游，也是“端发财”、“讨吉利”。摆香案的主体从最开始的外嫁女，逐渐扩展到村集体、工厂等其他社会单位。“龙舟银”筹集下来，大概会有二十万左右，这些钱会在将近一个月的时间里全部消耗掉。

费孝通、杨美惠等学者注意到了改革时期“温州模式”背后的非经济的发展动力。他们认为，在市场经济逻辑之外还可能有耗费的或者“礼仪经济”（ritual economy）的逻辑，这种逻辑使人超越自身存在的局限。它强调的不是索取，而是将索取散出。（赵旭东，2009）

杨美惠（2000；2009）在她多年的温州田野调查中注意到了温州经济奇迹的一个显要特点：即“礼仪经济”的复兴与扩张。她认为，这些仪式花费在抗衡温州经济造成的个人财富积累，促进财富再分配和社区建设上起到了至关重要的作用。温州的礼仪经济体现了乔治·巴塔耶所谓的追求“自主存在”的自由和权利。

在本节中，我将会描述龙舟活动中的礼仪经济，这些例子在某些方面确实证实了上述学者的观察，但同时我在龙舟活动耗费中所发现的事实也挑战了他们的判断——因为他们对温州礼仪经济的描述，可能有过度浪漫化和美化的嫌疑。而忽略了人群内部异质性的声音。

4、械斗与冲突

正如历史学家陈熙远（2008）所指出的，明清以降，中国传统节日中的端午节比其他节日如元宵节更能激发地域认同。在温州，宗族传统深厚，传统龙舟被视为小社区（村落或城镇）共同的财产，每个小社区都拥有一到两只龙舟，在船色、旗帜和服饰上都彼此区分，是地方社区的象征。不同社区的龙舟在端午期间会周期性聚集“斗龙”，自晚清民国以来，龙舟事故引发的械斗和冲突就十分频繁。竞渡中的不公或者意外引发的龙舟事故，会成为地方的历史记忆，并酿成持续很久的仇恨，以至于新时期政府在管理民间划龙舟时都要提前摸底排查，化解社区间的旧有恩怨⁴。

械斗和冲突的原因，表面上看是由某次龙舟事故引发，深究起来是村落间各种旧矛盾的集中爆发。地方历史专家许希濂老先生认为，瑞安一带划龙舟出现的故事其实要分城区和乡下。晚清民国时期，瑞安城区的械斗与帮派斗争有关，而瑞安农村塘下、莘塍的械斗与宗族势力有关。解放前，在瑞安城区，内河航运发达，通往温州最重要的交通方式只有水路，就是从温瑞塘河走的。今天仍然能看到西门河埠码头旧址，当时各类水货、农具、生活用品在这些码头间辗转抵达温州小南门，贸易非常繁荣。于是形成了西门帮、南门帮，彼此要抢地盘、争夺码头。水运需要“担帮”，就有很多搬运工人。码头工人之间为了抢着生意，难免发生肢体冲突，如果码头工人之间发生纠纷，也无打官司一说，就结下冤债。每年龙舟活动时，就借机发泄怨恨。

上述诸多要素，龙船娘与片区划分、“媛主银”和“摆香案”、节日中密集的斗龙，都深刻地作用于地方社会关系网络的构建，使得一年一度的龙舟竞渡在一定程度上唤起了龙舟片区的浓郁情感，也重新确认了旧的共同体边界。

⁴ 我在瑞安莘塍镇政府采访时，意外得到了一份该镇端午节龙舟工作小组制定的“划龙舟活动历史积怨排摸情况一览表”。在这份表格里，非常详细地列举了镇外和镇内的冲突区域、发生原因以及严重等级。

三、健身龙舟⁵在地方社会的传播

由于龙舟活动屡次引发地方冲突和械斗，龙舟经费摊派引发各种不满，从1991年到2004年间，温州政府明令禁划龙舟。到了2004年重新开禁，实乃受益于韩国江陵申请“端午祭”为世界非遗在国内引发的热烈讨论。温州所辖的不同县市管理龙舟的政策并不一致，瑞安等地在2008年之后再度禁止。至此，传统龙舟的式微已非常明显，传承者的断裂（禁划龙舟导致一代人对龙舟活动产生隔膜）、温瑞塘河的污染、端午竞渡与高考时间的冲突、高层官员和民营企业家的反对、巨额的管理成本等原因，导致传统龙舟的传承动力已经不足。生计方式的变化，传统居住格局的打破，外来人口的增加，模糊了龙舟活动片区的共同体边界，使地方认同有所弱化。在这一背景下，健身龙舟开始在年轻人中兴起。

温州地区接受健身龙舟的时间非常晚，一直到2004年。温州乐清石马龙舟俱乐部是业内公认最早玩健身龙舟的。健身龙舟的兴起一方面与国际龙舟的各项锦标赛有关，因为只要参赛，必定要用标准的竞技龙舟。在温州，健身龙舟的推广和普及是借了“禁划传统龙舟”的东风，它在地方上的流行没有体育局的强制，完全是自发的。

如今，温州柴零叁网龙舟论坛上的信息基本上以健身龙为主了，不同区域间的龙舟会有不定期的“聚会”，所谓“聚会”就是几条龙舟约定好时间地点，一起切磋技艺。健身龙这种新的外来文化，很自然地与“俱乐部”的形式相联系，摆脱了过去的宗族色彩。很多年轻人表示更愿意接受健身龙及其背后的较为轻松随意的竞技文化，就像乐清的郑大哥就说，健身龙的比赛规则清晰，想划就划，没有太多历史负担。

健身龙对传统龙的冲击是显而易见的。原先制作传统龙舟的老师傅也丧失了不少生意。温州这里目前几乎所有的健身龙的产商都是杭州祥瑞和大连。杭州祥瑞标准龙舟公司的唐老板是浙江富阳人，原先是皮划艇厂厂长。他的父亲也是做皮划艇的。这里也能看出，健身龙与皮划艇的渊源更深一些。健身龙的推广，也使新一代的划手与民俗的元素越来越远离。健身龙已经被普遍接受之后，温州各地的龙友开始尝试5人龙，2010年，由国家体育总局牵头各地方学习5人龙。健身龙在它自身的体系中不断更新升级，玩转更多的新花样，和传统龙舟相比，可以视为另一“场域”。健身龙的演进逻辑似乎有更趋简化的倾向。

我们可以把体育形态的健身龙舟视为一种文化体系。这种新的外来文化，很自然地与俱乐部的形式相联系，完全摆脱了过去的宗族色彩，在龙舟形制和游戏规则上更标准化，时间上也更自由。30、40多岁的年轻人巧妙地把原先对传统龙舟的热爱转移到这种健身龙舟上来。在过渡时期，他们穿着健身龙舟的专业服饰帮助地方社区的传统大龙“上水”，完成特定的宗教仪式，尽管态度上较为随意。与此同时，女子健身龙舟俱乐部也开始出现。

以我所调查的瑞安动感龙舟俱乐部为例，大部分成员是通过朋友介绍或在互联网上认识。他们原先在各自社区中都是划传统龙舟的主力，如今打破了社区的界限相聚到一起，而他们原先所归属的社区龙舟彼此是竞争对手。俱乐部平时活动的经费部分来自会员费，部分来自外界企业赞助，并定期在网络上公布账目。动感龙舟队自费参加了不少国内、港台的龙舟比赛，取得了瞩目的成绩，在温州龙舟界颇有名气。

⁵ 健身龙舟，即竞技龙舟，又叫标准龙或22人龙。主要用于现代龙舟体育赛事。具体而言，又分为国际标准龙舟和国内标准龙舟，规格不一，长度不同。当地人习惯称其为“健身龙”，文中亦沿用这一说法。

四、国家与地方互动中的温州龙舟

随着一轮又一轮的非遗（intangible cultural heritage）热潮，温州政府对龙舟活动很快就有新举措。新任市委书记陈某从浙江嘉兴调任温州，他主政嘉兴时就成功策划过全国龙舟邀请赛，眼下他又将这个模式移植到温州。2011年以来先后举办了“温州市首届龙舟大赛”，并成立了温州龙舟协会。不久，又策划在多地建设龙舟基地。值得注意的是，龙舟大赛、龙舟基地都是面向健身龙舟的。“打造中国龙舟名城”的口号随即写入了官方红头文件。“打造龙舟旅游品牌”与近年来全国上下如火如荼的“申报非遗运动”遥相呼应。发展旅游产业与保护传统民俗文化，在“文化搭台、经济唱戏”的官方主流意识形态下捆绑起来。温州政府甚至以发扬传统民族文化的名义动员海外华侨华人创立龙舟队，端午回乡参加龙舟竞渡。

温州龙舟在历史上一直受到地方政府的各种管制，官方意识形态的变化对其有深刻影响。眼下，温州龙舟又以独具特色的“地方文化资源”的形象出现。种种迹象都似乎表明地方文化传统重新得到了重视。原本在温州一直处于尴尬境地，屡开禁又复禁的传统龙舟何以改头换面出现在历史舞台上？范可（2007）的观察可以提供“他山之鉴”。传统或文化遗产是构成“地方”之所以成其为“地方”的重要资源。许多地方的形象工程建设也与全球化有关。早在上个世纪80年代，福建省的一些官员就意识到，如果能够让地方体现特色，必然能引起外界的关注，从而有利于地方经济的发展。随着旅游业的发展，在世界各地出现了最初以招徕游客为目的的强调地方文化的传统复兴运动。温州“地方龙舟文化”作为符号在开放性的文本互构中找到了新的意义。不过，温州龙舟文化复兴，在官方层面和民间社会层面，有着完全不同的逻辑，彼此之间的合作也是“貌合神离”。民间的热烈反响倒不在于吸引外界的关注，而是传统的惯性使然，而最近几年传承动力明显不足。

五、从传统龙舟到健身龙舟：建构不一样的“地方感”

以往的学者总是将传统龙舟民俗和以体育形象出现的现代健身龙舟割裂开来论述，从而得出进化论式的观点，很少花费笔墨分析二者在当地人生活中的不同意义。我在考察温州龙舟本身的历史脉络时发现，传统龙与健身龙舟对于当地人来说，是在建构不一样的“地方感”（the sense of place）。

传统龙舟活动的参与者从过去地方宗族、村落联盟基于义务形成的“机械团结”中解脱出来，以独立的身份参与健身龙舟游戏。这一变迁折射了外部中国社会的“个体化”进程。原先凝结在龙舟身上的“地方感”淡化或萎缩了，转而追求另一种认同，这种新的认同就是向更广阔的外部世界展示自我。健身龙舟游戏的参与者打破了原先地域的界限，“深度游戏”于是下落到最朴素意义上的“竞技游戏”。健身龙舟活动的区域也渐渐与原先所属共同体相分离——从物理空间上说，“建设龙舟基地”之举就已开始将其抽离出原先所在的水域，历史上的龙舟片区划分变得无关紧要；从情感空间来说，健身龙舟的荣辱成败变得和“地方”越发没有关系。其次，女性在前后两种龙舟活动场域中扮演了不同的角色，她们也在无形中形塑着这种“地方感”。女性从原先维系社区共同体的附属性角色（节庆仪式的筹备、提供“媛主银”和“摆香案”），转而成为了参与健身龙舟比赛的独立个体（各项龙舟大赛都有专门为女性设置的女子龙舟组）。吊诡的是，在全球化的背景下，地方政府又借龙舟特色追求所谓的“地方性”（locality）文化价值，追求普世性（标准化）的健身龙舟和表征地方特色的传统龙舟在其中的角色和彼此间的张力耐人寻味。

参会论文即将提交给组委会的时候，我回到家乡温州做了一次跟踪回访，并现场观看了

2013年8月8日的温州龙门阵龙舟联赛第三季小组赛。在赛场上，我又见到了熟悉的田野报道人乐清籍龙友郑爽。他向我诉说最近两年健身龙舟的发展，不管是乐清还是瑞安，健身龙舟的数量都有所下降。之所以会下降，在他看来是因为每次大型龙舟联赛后，就产生了输赢，而输家很快就没有士气，导致俱乐部解散。经营一个健身龙俱乐部很不容易。这两年很多俱乐部之间兼并，强队吞并弱队，在参加比赛的时候互相借调队员，这也伤害了俱乐部中平时参与训练但实力不强最终无法参与比赛的队员的感情。受到这种趋势的影响，不同村落端午期间划传统大龙舟的队员也在自由流动和整合，不再那么强调划手的地域身份，这又反过来稀释了前面所提到的龙舟所建构的社区的边界。政府举办龙舟赛事的举措加剧了这一进程。我在2012年的初步研究，是对温州龙舟的历史与现状所做的全局式的概观，还没有进入更细致具体的讨论。后来受到日本学者河合洋尚和今中崇文的启发，下一步的方向应当是将温州龙舟与外部经济体制的变迁一起考虑，更微观地分析社区中人际关系围绕着龙舟发生的微妙变化。这也是此次京都大学之行最大的收获。

参考文献：

（注：原文参考文献共115篇。以下仅列出文中明确出现的相关文献，其余从略。）

- 1、（日）渡边欣雄：《汉族的民俗宗教——社会人类学的研究》，天津：天津人民出版社，1998年；
- 2、吴丽平：《传统节日与地方社会关系的构建——以温州韩田村端午龙船竞渡为例》，《民俗典籍文字研究》第四辑，北京师范大学民俗典籍文字研究中心编，北京：商务印书馆，2007年；
- 3、中共瑞安市委党史研究室、瑞安市地方志办公室编：《瑞安龙舟活动简史》，2004年（内部资料）；
- 4、赵旭东：《耗费的逻辑——温州模式与金融危机的背后》，《探索与争鸣》，2009年11期；
- 5、Mayfair Yang.2000."Putting Global Capitalism in its Place:Economic Hybridity, Bataille, and Ritual Expenditure", *Current Anthropology*, Vol.41, No.4:447—509.
- 6、（美）杨美惠：《“温州模式”中的礼仪经济》，《学海》，2009年3月；
- 7、陈熙远：《竞渡中的社会与国家：明清节庆文化中的地域认同、民间动员与官方调控》，《中研院史语所集刊》第79本，第3分，民国九十七年九月；
- 8、范可：《传统与地方——“申遗”现象引发的思考》，《江苏行政学院学报》，2007年第4期。

执笔人所属、身份及目前学历：

吴天跃，中央美术学院人文学院文化遗产系，2013级博士研究生（在读）。北京，邮编100102；2012年毕业于南京大学社会学院人类学研究所，获法学（社会人类学）硕士学位。南京，邮编210000。

毛泽东时代工人的婚姻选择
：基于洛阳工厂工人的研究
方莉琳 (FANG LiLin) *

婚姻问题是人类社会永恒的主题。关于建国后中国婚姻问题的研究成果颇丰，除概述性的研究之外，有大型婚姻社会调查，也有实地田野研究。但大型社会调查主要集中在对 1978 年以后婚姻家庭变化的调查，而实地田野研究虽聚焦于建国后新婚姻制度的影响，但大部分是关于农村婚姻家庭的研究。因在同一时期，不同群体的婚姻家庭可能呈现不同的特点。所以笔者希望了解一下毛泽东时代农民群体之外的另一个重要群体——工人群体的婚姻状况。然而婚姻的成立是建立在选择的基础之上的。如何进行婚姻抉择将在很大程度上决定工人的婚姻生活状况。所以本文试图从工人的婚姻选择入手，来解读毛泽东时代工人的婚姻问题。

在考虑了新中国建立之后中国工业发展的布局，和已有对婚姻问题实地田野研究区域的分布（主要集中在东部、东南、西南）之后，本文选取“一五”计划时期重点工业建设城市河南省洛阳市作为研究调查点。通过对洛阳工厂工人的访谈与调查，试图来探索毛泽东时代工人婚姻问题。本次调查，笔者总共深入访谈了 32 人，其中地方转业干部 5 人，军队转业干部 2 人，技术干部 3 人，技术工人 3 人，厂医 1 人，工人家属 5 人，车间工人 13 人。其中男性 18 个，女性 14 个。

一、传统择偶标准的式微

婚姻的成立首先建立在配偶选择的基础上。马克思说“婚姻不能听从已婚者的任性，相反的，已婚者的任性应该服从婚姻的本质”。¹由此可见，配偶的选择并不是个人主观意识所独断的。不同的社会背景之下，人们的择偶标准是不同的，即便是在相同的时代背景之下，不同职业的人们的择偶标准和择偶模式也大相径庭。中国传统社会的择偶观讲究的是“门当户对”，男女双方家庭财产多寡和门第高低应该相互匹配，而且在婚姻缔结决策的过程中，最具有发言权和决定权的是男女双方的父母，而不是男女双方本人。“做爹娘的都愿意儿子娶个好媳妇，女儿嫁个好丈夫，儿女结婚后，能够互爱互敬，互相帮助，和睦团结，劳动生产，过起幸福的家庭生活。”²父母总是会以自身经历的教训来替子女做主，并辅之以家长的权威来使子女就范。虽然说在传统婚姻中也不乏美满姻缘，但是很多时候家族利益的实现却是以个人的婚姻幸福作为代价的。

新中国成立后，伴随着《新婚姻法》的颁布，以家族利益为根本的婚姻观念被定义为封建社会制度的重要组成部分。毛泽东在《湖南农民考察报告》中早就指出，中国的男子普遍要受三种有系统的权力支配。这就是封建主义的政权、族权和神权。而中国的妇女，除受着这三种支配之外，还受着封建主义的夫权的支配。旧的婚姻制度上的一切包办、强迫、买卖、早婚、重婚、纳妾、童养媳以及家庭翁姑和丈夫虐待媳妇等等，无一不是以夫权为中心的家庭父母和丈夫对于儿女妻子的支配关系所造成的。³所以在新中国要推翻这种“家庭奴隶制”，实现男女平等和民主自由的社会生活，保护妇女和子女的正当利益。

*南京大学社会学院社会学系硕士研究生。

¹转引自：张志永，《婚姻制度从传统到现代的过渡》，北京：中国社会科学出版社，2006 年，第 169 页

²转引自：张志永，《婚姻制度从传统到现代的过渡》，北京：中国社会科学出版社，2006 年，第 170 页

³“实行新民主主义的婚姻制度”，《人民日报》，北京：1950 年 4 月 16 日第 1 版

以 1951 年《人民日报》刊登的《我的婚姻完全是自愿的!》一文为标志,李秀兰发出了与传统包办婚姻抗争的号召。

“编辑同志:我是太原织造厂的女工,今年十九岁。在工作中,我与张斌同志发生了感情。我们经过恋爱期间的互相了解,愿意在革命的道路上携手并进,结为革命夫妇。但是,我父亲不同意我们俩结合。我再三向他进行解释说服,但仍无效。他在一月十一日晚上竟威吓我,要我与张斌断绝关系,否则就用麻绳把我勒死。我当时怕他真的害我,就假装答应了。次日,我为了我的生命安全和摆脱封建家庭的锁链,即逃出家庭。在工会的支持下,我和张斌同志根据婚姻法的规定,在一月十五日结了婚。我俩结婚后,我父亲还是不服气,打不通封建思想。他竟捏造事实,污蔑张斌同志,说他欺骗、引诱了我。我父亲曾先后把张斌同志告了四状。在这个情况下,我要表明我的态度。我的婚姻完全是自愿的,别人并没有欺骗我、引诱我。我是新社会的妇女,我懂得婚姻法,并且要争取新中国妇女应有的社会地位。

我认为我的父亲不应该捏造事实,任意诬告张斌同志;更不应该威吓女儿与张斌同志断绝关系。对于我父亲这种坚持包办婚姻的封建思想,我坚决反对。希望你们把我的信公布在报上,以教育我的父亲,使他能够改变他的封建思想。”⁴

这是新中国的青年对家庭本位的择偶标准发起的挑战,自此,传统社会的择偶标准逐渐式微,个人本位的新的择偶观开始逐渐形成。随着 1953 年《新婚姻法》在全国范围内的大肆宣传和人们经济生活水平的改善,过去那种纯粹的买卖婚姻也逐渐减少,且随着一五计划的实施,大批青年走出家庭,参加社会主义建设,父母在子女婚姻中的影响力也逐渐降低,与之相对应的,单位、组织、工会等在个人的生活上起到了引导作用。由此形成了新中国区别于传统的新的择偶观。

二、新的择偶标准的兴起

1. 职业有贵贱

新中国成立之前,因为中国经济发展的滞后性,在职业上其实没有很细致的划分。新中国成立之后,中国社会的阶层具有了明确的划分,主要包括工人、农民、干部、知识分子和市民。在后来的发展中,工人阶级的概念泛化,但总体而言,工人和干部作为一个整体阶级,其内部却还是有着自己的级别划分。新中国成立初期,由于干部实行的是供给制,几乎没有什么经济收入,所以干部这个头衔对于以经济利益为核心的家长来说没有多大的吸引力,人们当中流行的口号是“宁嫁交通员(薪金制),不嫁海昌蓝(干部)”。与之不同的是,工人在婚姻市场上,却是人们眼中的“香饽饽”。

1954 年,从各地支援过来的技术工人、工程师、地方抽调的干部、建八师等陆陆续续来到洛阳。当时只有 7 万人口的洛阳还很落后,涧西区还是一片麦地。因为工厂还在筹建中,刚来的工人们就住在临时搭建的席棚子中,白天在工地,晚上就在席棚子中暂作休息,而随工人来的家属,则借住在附近的农民家中。到 1955 年,几乎每户农民家中都住有家属一户至三户。这些家属住在农民家中,平时除了参加日常家务之外,没有过重的体力活。由此导致农民觉得农业没有前途,希望能够从事工业。而这些来到洛阳,投入到工业建设中的青年未婚工人,由此也成了农村青年妇女的理想对象。一度,因为这些工人的到来,洛阳的婚姻市场出现了紊乱。

⁴ 李秀兰,“我的婚姻完全是自愿的!”,北京:《人民日报》,1951 年 2 月 13 日第 2 版

“从孙旗屯乡在四十三个青年妇女中（其中有一个是离婚的）与军工结婚三人，订婚的一人，谈过未成的五人，打算找军工的两人，共 11 人。南村（自然村）没结婚的青年妇女十二人，与军工结婚的一人，谈成的二人，谈过未成的五人；唐村未结婚的青年妇女六人，与军工正式谈恋爱的二人（一个是离过婚的），谈过未成的一人。李金英也与军工谈了后要求与自己的恋爱对象（市民）解除婚约，岳花子去年十月与前夫（教员）离了婚与一个军工结婚。从孙旗屯乡与南村（自然村）统计已经解除婚约的与打算解除婚约的十三个对象中间初中学生三个，农民四个，干部五个（内有两个是男方提出来的），工人学徒一个。离婚的二人中间（指离了婚与军工结婚的），解放军一个（早离），教员一个（去年十月离）。两羌统计与军工结婚的五人，谈恋爱的五人，谈过未成的十三人，计划找军工的二人，共二十五人。”⁵

农村青年妇女中流行着“一工、二干、三教员，宁死不嫁农民汉”的择偶口诀。很多已经订婚青年妇女希望与原来的恋爱对象解除婚约，然后再找工人。这种工人优越于其他职业的现象并不是偶然的，它是由工人阶级在新中国的地位所决定的，他们是中国的领导阶级。由于工人阶级在政治上的领导地位，再加之一五计划实施，国家工业化建设对工人的强烈依赖，工人的整体社会地位在新中国相当之高。

“以前建厂初期，干部有问题有困难，都不敢找纪登奎。干部跟工人讲：‘张师傅、李师傅，求求你，帮我去说说吧’，这些工人跟纪登奎一反映，问题就解决了，家属问题，子女问题。他们为什么不直接去找纪登奎，因为纪登奎对干部很严，但是对工人们很是支持。当时十七级的县级干部工资，相当于八级工。也就是说现在书记工资拿到工人八级工的工资。二十级是六级工工资。所以工人就是高于干部。”⁶

由此可见，工人地位的优越不仅仅体现在政治地位上，还体现在经济待遇上。十七级县级干部的工资与八级工相当，而且在文化大革命之前，工人还有奖金，当时的行政干部是没有的。然而虽然同为工人，工人内部也存在着分化，技术工人往往更加受到青睐。

“小吴是一个小学教师。她结过婚。因为政治上的原因和爱人离婚了。现在她很需要找一个对象。她的条件是：‘只要政治上清白、进步、忠于人民的事业，文化水平和职业那是最次要的。’”在一次看电影的偶然邂逅认识小李，以为小李是技师，结果后来发现小李在炊事房工作，匆匆离开，后写信告诉小李“我们不是在交朋友，您千万不要误会……我只求您一件事，别再跟别人说我们认识呀”。⁷

从上述的小故事中我们就可以看到，虽然炊事房和技师同为工人，但是在婚姻选择的过程中，其所具有的地位是不同的。除技师之外，工人阶级中，开车的也更受欢迎。因为工种的不同，其所拥有的资源也是不一样的。

“在工人之间，在运输公司开车的和在矿山厂开车的、医生肯定是首选。开车的虽然工资一样，但是开车到外面去，可以买些当地买不到的东西。可以捎一些好的东西回来。”⁸

工人阶级所特有的地位和资源，使得成为工人成为一代人的荣耀，嫁给工人也成为了妇女心中的梦想。然而三年大跃进，导致工业战线规模过大，职工增长过快，洛阳市经过“三年大发展”，职工人数由 1957 年的 78301 人，猛增到 1961 年的 127174 人，其中全民所有制职工增加 82%。为缓和工业战线矛盾，调整工业与农业、城市与农村的关系，扭转国民经济的困难

⁵ 洛阳市档案馆，“建厂乡有关婚姻问题向市委的报告”，1955 年 6 月 14 日

⁶ 受访者 Z

⁷ “原来他不是技师”，北京：《新中国妇女》，1954 年第 11 号

⁸ 受访者 M

局面，中共中央和国务院于1961年6月16日制订了《关于减少城镇人口和压缩城镇粮食的销量的九条办法》。6月28日，中共中央又发出了《关于精减职工工作若干问题的通知》，《通知》要求，在三年内必须将1960年底的城镇人口减少2000万人以上，其中，1961年争取至少减1000万人；1962年至少减800万人；1963年上半年扫尾。精减的主要对象是：1958年以来参加工作的来自农村的新职工；1957年底以前参加工作来自农村，自愿要求参加农业生产，以及其他方面自愿返回农业生产战线的职工。为了应变职工过速的增长，城市压力过大等问题，工厂开始动员工人回到各自的家乡，参加农业生产。1961年9月底，洛阳市第一批精减任务基本结束，精减职工为55414人。在这次人员精减中，国营工业内部职工精减20.5%；地方工业精减30%；基本建设单位精减了43%；文教系统精减了12.38%。⁹由此所导致的工人的“下放”使得工人在婚姻市场上地位开始下降。很多人担心嫁给工人或者是娶了工人之后，对方又被下放，造成两地分居，由此导致生活矛盾。

与此同时，干部们的身份也在无声无息地发生着改变。虽然说工人的工资仍然可观，但是干部们的特殊性逐渐显现出来。

“领导上的特殊性主要表现在吃、住、行、救济、人事安排等方面。如工人们没饭票买不到饭吃，而处长们吃小灶可不交钱。流行性感冒期间，工人很长时间看不上病，张处长一个小孩子病了，供应站那边本来有个医生可以治疗，但张处长非要卫生所医生去他家看他的小孩。在人事安排上，领导先录用自己的亲戚，劳资处处长长的一个弟弟，在农村不干，来厂后就当上清扫工，过去很多职工家属要求不让干……”¹⁰

这些变化都在一定程度上强化了洛阳婚姻市场的变动。与最初建厂时工人为首选不同，干部群体成为婚姻市场的“第一选择”。

“那时候厂里面的工人，能找到一个人就很好了，一般都不好找呢。虽然说他们工资还可以，尤其是大厂，但是谁愿意去跟一个工人呢。一般都找个干部，除非他自身条件特别好，或者家庭条件特别好。我当时考虑也是考虑他是大厂，如果不是大厂，我也不会跟他。像这拖厂，矿山厂，当时都是大厂，那时候觉得工作可稳当了，有保障。那就是这样。一般小厂都不找。”¹¹

从上述我们可以看到，在择偶选择上，从1958年以后开始，干部优于工人，且这种格局一直延续至今。而同样是工人，一般全民所有制工厂的工人要优于集体所有制的工人，因为全民所有制工厂工人的工资，平均每个月要比集体所有制工厂工人高几块钱。而且全民所有制工厂工人的政治地位和社会地位均要高于集体所有制工厂工人，在职业的稳定性上也略胜一筹。1961年洛阳市第一批精减结果也隐约印证了这点。在1961年精减中，国营工业内部职工精减20.5%；地方工业精减30%；基本建设单位精减了43%；文教系统精减了12.38%。¹²这种全民所有制与集体所有制工厂之间的区别可概括为“大厂与小厂”的区别。笔者从洛阳市档案馆整理了一份1966年至1975年洛阳市某厂区街道的一月份结婚登记统计表，从下面的交叉表中我们可以看到大厂男职工46.4%会找大厂女职工，16.5%的大厂工人找的是小厂工人，有24.7%的人找的是农民。不同职业的男性对配偶职业的选择具有显著的差别。

⁹ 洛阳市总工会著，《洛阳工人运动史》，1992年，第289-292页

¹⁰ 洛阳市档案馆，“洛阳市工代大会上讨论关于企业中人民矛盾问题情况报告”，1957年5月8日

¹¹ 受访者G（其本人为厂医，丈夫为工厂技术工人）

¹² 洛阳市总工会著，《洛阳工人运动史》，1992年，第289-292页

男方职业与女方职业 交叉制表							
			女方职业				合计
			农民	小厂工人	大厂工人	其它职业	
男方职业	农民	计数	1	2	3	0	6
		男方职业中的 %	16.7%	33.3%	50.0%	.0%	100.0%
	小厂工人	计数	8	11	9	6	34
		男方职业中的 %	23.5%	32.4%	26.5%	17.6%	100.0%
	大厂工人	计数	99	66	186	50	401
		男方职业中的 %	24.7%	16.5%	46.4%	12.5%	100.0%
	其它职业	计数	3	3	9	11	26
		男方职业中的 %	11.5%	11.5%	34.6%	42.3%	100.0%
合计		计数	111	82	207	67	467
		男方职业中的 %	23.8%	17.6%	44.3%	14.3%	100.0%

(Sig=0.001<0.005)

2.地域有区分

支援洛阳工业的人，来自全国各地，还有来自苏联的专家。以洛阳矿山机械厂为例子，最先建厂时技术工人多来自上海，工厂干部多是来自豫南豫北的转业干部，工厂工人来自抚顺、沈阳、大连、太原等地。54 年、58 年和 70 年洛阳工厂又大规模招工，这几次招的工人大多来自豫南豫东及洛阳周边农村。这些来自四面八方的人聚集在一起，在思想修养、技术水平、风俗习惯、个人爱好上都不尽相同。大城市来的，瞧不起从农村来的，搞技术的瞧不起搞管理的，南方人爱吃大米，北方人爱吃面，上海人不喜欢河南人讲话，河南人不愿听“阿拉（上海话）”。¹³这样高度的异质性也影响到了婚姻的选择。这种现象在上海来的工人中尤为明显。在上海工人的概念中，“上海是个大城市，而洛阳只不过是个三线城市”。或许正是因为国家对来自上海的工人的特殊照顾，强化了上海人的优越感。凡是上海过来支援洛阳工业建设的工人，他们拿的都是上海的工资。下表是上海过来的工人和洛阳本地工人工资的对照表。

级别	一级	二级	三级	四级	五级	六级	七级	八级
上海(元)	42.4	49.4	57.5	67	77.8	90.6	105.4	123
洛阳(元)	32.5	38.3	45.1	53.1	62.6	73.7	86.9	102.4

从上表中我们可以看到，上海过来的一级工人的工资比其他二级工人的工资还要高。经济上的优越，让他们成为了众人艳羡的对象，同时他们也保持着自我优越感。表现在婚姻选择方面，

“作为一个上海人，是绝对不可能娶当地人的。为啥呢，那时候，文化差异很大。当地的农民，服饰、生活、说话，我们就笑，怎么会找。那时候她们的裤腿，两尺。还有这边这个水质不好，这边人不像南方人，牙齿，牙板，都是黄的。文化层次，这个差异很大。连人家给你介绍，你都不行。还有个语言上面，他们说的都是方言。现在洛阳没有方言，现在洛阳话变成

¹³洛阳市总工会著，《洛阳工人运动史》，1992 年，第 207 页

半普通话。但是之前是讲当地话，我们听着好像听相声。觉得难听着呢。¹⁴

上海人固有的优越感让他们不同于其他那些从别处来支援洛阳工业建设的工人。“那时候上海人之间都讲上海话，我们听不懂。”正是因为上海人如此的“傲慢与偏见”，所以上海工人的婚姻问题也受到了组织的特殊照顾。因为建厂初期对上海技术工人强烈的依赖性，所以当时那批上海来的工人中，已婚的，如果家属没有来洛阳，凡是愿意来洛阳的，只要工人申请，组织就会想办法解决。而那些未婚的上海来的青年工人们除了和其他工人一样的解决婚姻问题的途径之外，作为上海人他们还独享一种特殊待遇，那就是厂里面组织的上海人之间的相亲。

“那时候，他们只希望你安心在这，他千方百计，只要你一申请，我家的那位在哪，马上给你调过来。真不行的话，马上到郑州去组织女生。郑州有好多棉纺厂，棉纺厂的女工，好多也是上海调去的。把这些没有结婚对象的女工，调过来。用个大客车，拉个五十个。拉过来给我们开见面会。你来，你看，看中了，你交流。如果交流成功的话，也会马上给你调过来。”

15

除此之外，上海人的细致与东北工人的粗犷产生了对照。因为大杂烩，人与人之间产生了对比，东北的工人被认为是大男子主义，所以在婚姻选择上，东北的工人也会处于次优状态。在建厂初期，工人对象的选择具有很明显的地域区分性，一般上海人找上海人，即便找不到合适的上海人，也会找江浙沪的；东北人找东北人等。后来，随着工厂的发展，各个地域之间的工人之间慢慢相处融合，这种地域的区分慢慢弱化。至二代工人的婚姻，这种区分已经开始弱化。

“通过文化交流，互相交流，到第二代之后就杂交了。为啥杂交呢，这小孩上幼儿园都和他们在一起。上学也在一起。在一起不说河南话、洛阳话还不行呢。那回来就是跟你说洛阳话，不跟你说上海话。”

不过从统计数据看，这种区分性虽有所减弱，但是却一直存在。下表是 1966 年至 1975 年洛阳市某厂街区街道的一月份结婚登记统计表中男女双方籍贯情况，从下表中我们可以看到男女双方的籍贯具有很大的相关性。

男方籍贯* 女方籍贯 交叉制表

		女方籍贯			
		河南	非河南（除江浙沪）	江浙沪	合计
男方籍贯	河南	计数 265	23	3	291
		男方籍贯 中的 % 91.1%	7.9%	1.0%	100.0%
	非河南（除江浙沪）	计数 52	50	16	118
		男方籍贯 中的 % 44.1%	42.4%	13.6%	100.0%
	江浙沪	计数 18	11	29	58
		男方籍贯 中的 % 31.0%	19.0%	50.0%	100.0%
合计		计数 335	84	48	467
		男方籍贯 中的 % 71.7%	18.0%	10.3%	100.0%

(Sig=0.000<0.005)

¹⁴ 受访者 H

¹⁵ 受访者 H

除了这种城市之间的差别之外,在婚姻选择上非常重要的一点,那就是城市和农村的差别。当时,棉纺织厂部分女工找对象的条件就是两高两不要:“地位高,工资高,面貌不漂亮的不要,不是城市人不要”。因为这样择偶思想的存在,当时棉纺纱厂有10多个30多岁的女工仍未找到对象。有的女工结婚条件是以能够在城市工作当标准。

“轮胎厂女工中有五人是现役军人的未婚妻,由于怕对方服役期满回到农村,因此两队关系不巩固。心里已经作了打算,等待复员后,如果回乡生产即断绝恋爱关系。有的以男方给女方找工作为条件,工作找不到又离婚。”¹⁶

导致这种明显城乡区别的因素是当时严格的城乡户籍制度。1955年《市政粮食定量供应暂行办法》的实施,在经济上就对城乡进行了划分。到1958年《中华人民共和国户口管理条例》的颁布,以及1959年《严格制止农村人口向城市流动》的文件的出台,都奠定了城乡之间的差距。户籍作为粮食供应和教育医疗等福利体系差异分配的变量,决定性地影响了人们的生活质量。所以工人在婚姻选择的过程中也对户籍极为敏感。

3.政治略讲究

张志永在《婚姻制度从传统到现代的过渡》中曾这样来总结建国初期中国婚姻的特点“在政治宣传和贯彻婚姻法等教育影响下,人们普遍以追求思想进步为荣。表现在婚姻择偶上,由于更多人获得婚姻自由权利,而社交条件有限,故人们择偶一般看重对方政治条件和外在表现等因素,并且也不注重物质要求。”¹⁷新中国成立之后的确如张志永所言,大力倡导以政治条件为首要条件的婚姻恋爱观。

“我们反对以门阀、金钱为条件的婚姻恋爱,但是并不等于说恋爱是无条件的。首先我们就不应该和一个政治思想反动的人谈恋爱,更不用说民族敌人和阶级敌人了。在恋爱当中政治条件是应当重视的。应当了解其政治面貌,考虑到政治品质。当然,政治条件是首要条件,却不是唯一条件。此外,知识、健康、性格、容貌、兴趣、年龄等,也都是应该加以考虑的。理想的伴侣需要政治上思想的一致,也需要生活上的和谐。”¹⁸

但政治因素到底在多大程度上影响着工厂工人的婚姻,却并未如张志永所言,“人们择偶一般看重对方政治条件和外在表现等因素,并且也不注重物质要求”。这种以政治条件为首要条件的恋爱观并未能够得到工人们的全盘接受。政治荣耀虽是婚姻选择中的加分项,但是经济因素、物质条件依旧是婚姻选择中的首要因素。

“六十年代中期结婚要三个条件,三个“yuan”,一百元,技术员,党员,结婚要三转,手表,自行车,缝纫机。我们那时候结婚的时候就是这样,因为党员、技术员的工资要高些。如果是中专毕业的技术员工资比工人还要低,那就不要了。”¹⁹

党员、技术员的优越性依旧是建立在其较高的工资基础上的。政治知识在经济因素满足的条件下的附加比较项。从下面拖拉机厂青年的找对象装备顺序我们也可以略见一二。

“有些男青年为了找对象积极装备自己,以金钱引诱女方:拖拉机厂一青年作了三年规划,装备四大件,大皮鞋、料子服、手表,自行车。这些都有了,就开始找对象,还要求入团,说:‘这些都有了还行,载个牌子(团章)更好找对象。’”²⁰

¹⁶ 洛阳市档案馆,“关于当前婚姻家庭方面存在问题的报告”,1965年2月20日

¹⁷ 张志永,《婚姻制度从传统到现代的过渡》,北京:中国社会科学出版社,2006年,第175页

¹⁸ 程今吾,“建立正确的恋爱观”,丁玲等著,《青年的恋爱与婚姻问题》,1950年6月

¹⁹ 受访者X

²⁰ 洛阳市档案馆,“关于当前婚姻家庭方面存在问题的报告”,1965年2月20日

虽然国家大力倡导政治为导向，但是人们择偶依旧是首先考虑经济因素。两人同样为工厂工人，但是如果一人家庭经济比较好，家里负担轻，那么这个人就会好找对象。而像党员、劳动模范这样的荣誉只是在同等条件下的加分项。究其原因，首先是因为党员和劳动模范在当时工厂毕竟是少数人，这些人可遇不可求。其次是因为洛阳是一个新兴的工业城市，不存在太多的资本家和大知识分子，政治成分不好的比例没有那么多高，而且工厂工人不同于农村农民，其政治成分的区分没有那么明显和突出，政治成分不好的人也没有农村所占的比例那么大。再加之工厂对政治成分不好人的打击力度也没有农村那么强烈。因此政治在工厂的择偶现象中没有想象中那么具有影响力。即便在 1957 年 6 月 10 日洛阳市全市范围内开始反右斗争，政治成分对婚姻的冲击也没有我们想象中的那么大，因为当时在洛阳工厂被打成右派的数目很小。在 10 年文化大革命中，情况也是如此。

三、结语

新中国《婚姻法》的颁布颠覆了家庭、父母在婚姻选择中的决定地位。国家对自由恋爱的支持，使得个体得以挣脱家庭的控制而自主地选择自己的婚姻对象。然而在具体的选择标准上，国家也试图通过宣传、倡导和规训来在人们心中树立一种国家意识，让工人们形成一种英雄情结——建设社会主义和共产主义的伟大使命感。因为婚姻不仅仅是私人的事情，也是国家和社会的事情。工人阶级肩负着实现祖国工业化的伟大使命，所以在洛阳工厂工作的工人都是社会主义的建设者，是新中国的领导阶级。因此在婚姻选择中，应该树立革命的婚恋观，以为国家大事和集体事业做贡献为首要标准，而不应该考虑职业、物质等资产阶级才会考虑的因素。

然而从上述田野调查中我们可以发现，洛阳工人中婚姻选择的标准并未能够按照国家所倡导的路线前进。在工人的婚姻选择中，其首要考虑的因素依旧是经济因素，工人婚姻选择中对职业的偏好，也更源于经济因素。在婚姻选择中，政治因素虽极力宣传、大力倡导，但是却未能够成为核心影响因素。工人婚姻选择的出发点依旧落点于个人和家庭，国家所欲根植于工人内心的革命化的婚念观未能够成功。为了促使工人死心塌地地为社会主义工业化做贡献，国家只能对工人的需求进行满足和妥协。

个人的跨国流动与迁移地选择的关系
：以在南京的日本人为例
松谷实 (MATSUTANI Minori) *

(本论文因涉及被调查人的隐私保护问题，因此不在网络上公开，敬请谅解。)

* 京都大学大学院文学研究科博士研究生。

（本论文因涉及被调查人的隐私保护问题，因此不在网络上公开，敬请谅解。）

（本论文因涉及被调查人的隐私保护问题，因此不在网络上公开，敬请谅解。）

（本论文因涉及被调查人的隐私保护问题，因此不在网络上公开，敬请谅解。）

（本论文因涉及被调查人的隐私保护问题，因此不在网络上公开，敬请谅解。）

（本论文因涉及被调查人的隐私保护问题，因此不在网络上公开，敬请谅解。）

谁承担更多的风险？

：社会经济地位差异与环境风险分配

聂伟 (NIE Wei) *

一、背景与问题

近年来，因有害选址造成的大规模环境抗争事件不断增加。2007 年以来，先后在厦门、北京、吴江、广州、大连等城市爆发了大规模的环境集体行动^[1]，其中反抗垃圾场选址和运营的群体性事件尤为突出，环境污染和纠纷成为群体性事件爆发的重要诱因，影响着社会稳定与和谐。垃圾处理场的建设，一方面给城市社会带来了福祉，另一方面却对周边居民的生活环境和生命健康造成潜在威胁，正是由于其潜在危害性，“别在我家后院”是公众对待有害废弃物处理场所选址的共同心愿^[2-3]，从侧面反映了居民将垃圾处理场、环境风险、社会公平正义直接联系起来，渴望建立公正的社会秩序。环境公正意味着，在环境资源、机会的使用和环境风险的分配上，所有主体一律平等，享有同等的权利，负有同等的义务^[4]。本研究十分关注：目前我国不同社会经济地位群体是否公正地承担着因垃圾处理带来的环境风险？社会经济地位是如何影响着环境风险分配？

二、文献回顾

自 1982 年美国北卡罗纳州华伦县居民大规模地抗议建设有毒垃圾填埋场事件以来，相关学者首次将种族、贫困、教育等社会经济因素与垃圾填埋结合在一起，环境风险分配成为人们关注的焦点。

种族和环境风险分配的关系一直是美国环境社会学者研究的重要议题。种族不平等观点认为，有毒废弃物垃圾处理带来的环境风险，在不同种族人群中的分配是不公正的，少数民族人口密度较高的地方更容易选址为垃圾处理场。相关实证研究显示，美国环保署（GAO）在 1983 年通过对美国东南部四个垃圾填埋场周围的社区进行调查，发现其中三个垃圾场附近主要都是非洲裔美国人^[5]，自此之后，大量的实证研究发现，种族是影响环境风险分配不公正的核心因素^[6]。种族歧视制度限制有色人种抗议污染设施选址的社会资本和政治力量的培育和动员，将有色人种“污名化”，利于将垃圾场合法化地建立在有色人种附近^[7]。

收入是社会经济地位的核心自变量，收入水平反映一个人的风险应对能力。低收入者在经济和政治上处于弱势地位，使得他们在政府中缺乏发言权，难以参与垃圾选址决策并转移环境污染，强势群体很容易将环境风险转嫁给弱势群体；弱势群体在经济上处于贫困状态，对工作的渴求，导致弱势群体对不利于他们的垃圾选址也不强烈反对^[8]。实证研究结果显示，低收入群体与生活在垃圾处理设备周围密切相关^[9]，低收入群体承受更严重的水污染和空气污染，在实际工作中，遭遇更严重的化学有毒气体和物理风险^[10]。然而还有一些研究发现，经济地位和废物排放存在非线性关系——低收入和高收入地区的环境风险明显低于中等收入地区^[11-12]。

教育反映一个人获取社会、经济以及政治资源的能力。西方学者研究表明，社会资本和政治资本的分配不均衡导致环境风险分配不公，政府和企业在选择新的设备地点时，不希望周边社区进行反抗进而阻止计划实行，此类社区缺乏良好的教育、政治选举投票机会、政治决策机

* 南京大学社会学院社会学系博士研究生。

会等，因此在选址时尽量选择贫困社区和有色人种社区^[13-14]。布拉德（Bullard）通过实证研究发现，能够组织大规模反抗的社区一般都是具有较高文化程度、较高收入、较少有色人种的社区^[15]。其他学者通过多元线性回归和二元 logistic 回归模型验证发现，受教育程度低、贫困水平高以及少数民族比较集中的社区，承担更多的环境风险^[16]。

国内学者洪大用从国际、地区、群体三个层次上对环境公平进行探讨，指出我国存在环境不公的现象^[17]。卢淑华通过对本溪市的环境污染和居民的区位分配调查发现，组织或个人的权力资源与环境风险分配有关^[18]。王书明通过三类案例研究表明，目前的环境不公正主要与社会转型期社会分层的变迁有关，强势的经济阶层对于正在上升的弱势阶层的社会排斥，强势的经济社群城市和企业主把环境污染的社会代价转嫁给处于底层的农村社区的农民^[19]。陆文聪和李元龙从环境公正的视角下，揭示环境不公情况下农民工健康损害程度与社会经济地位、环境污染暴露等的互动关系^[20]。

综上所述，环境风险研究成果主要集中于美国，他们将环境风险分配与种族、贫困、教育等联系在一起；而我国的国情、社会结构、发展战略等与美国具有迥然的差异，这些社会经济地位变量对我国的环境风险分配影响如何？是与美国社会一样，还是有所不同？特别地，其它的社会经济地位变量（如居住地）是如何影响环境风险分配的？对这些问题的经验探讨不仅具有着重要的实践意义，同时也可以理论上与现有解释进行一定的对话。

三、研究设计

（一）研究假设

结合环境风险研究相关理论和实证研究的综述，笔者提出的基本假设：不同社会经济地位群体承担着不成比例的环境风险，且社会经济地位越高者，承担的环境风险越少。具体操作假设如下：

首先，基于劳动的性别分工理论。社会期待女性成为家庭的照顾者，相对于男性而言，更容易留在家中照顾家庭，地理流动的机率更小，更容易滞留在风险产生点，承受更多因垃圾处理而带来的环境风险。假设 1：女性相较于男性而言，遭受或经历更多的环境风险。

其次，基于环境风险分配种族歧视模型的假设。该模型认为制度化的种族偏见致使少数民族群体难以获得政治、社会资源，难以对垃圾处理场建设和运营进行反抗，少数民族群体聚居地容易成为垃圾处理选址地，承担更多的环境风险^[21]。然而中国并没有种族歧视，实行民族友好政策。假设 2：中国少数民族群体与汉族群体遭受或经历的环境风险并不具有显著的差异。

再次，基于环境风险分配理性选择模型、社会政治模型的假设。这两个模型强调个体的风险应对能力，理性选择居住地的能力越强，越可能选择在环境质量较高的地方；社会资源动员能力越强，越能抵制垃圾处理选址或迫使污染主体清除污染的可能性越高^[22]。收入、受教育程度较高者可能拥有较多的经济、社会、文化资本，可能遭受或经历的环境风险越少。假设 3：居民的家庭收入越高，所经历（或遭受）的环境风险可能越少。假设 4：居民的受教育程度越高，所经历（或遭受）的环境风险越少。

最后，基于环境风险分配合作主义视角的假设。合作主义视角主要从国家的政治体系决策结合和政策安排来解释环境风险分配^[23]。我国的社会经济发展中存在城乡二元体制，相对于农村而言，城市距离政府的权力中心较近，越可能利用政策安排将垃圾处理场建设在农村或城市郊区，致使农村积聚因垃圾处理带来的环境风险。在政府的制度安排中，现代社会垃圾处理模

式采取集中在某一地点处理所有人产生的垃圾，把垃圾处理带来的环境风险集中在距离垃圾场较近的居民身上，少数人的利益受损换取多数人的环境收益^[24]。假设 5：居住在农村社区的居民相对于居住在城市社区居民而言，遭受或经历的环境风险更多。假设 6：住户离垃圾场的距离越远，所经历或遭受的环境风险越少。

本研究还试图通过数据分析年龄对环境风险分配的影响。以往文献表明，年龄与环境风险分配均呈现正相关^[25]，假设 7：年龄越大，所经历或遭受的环境风险越多。

（二）研究数据

本研究的数据来源于 2011 年 7 月份在厦门市开展的“居民生活环境”问卷调查。本研究的调查对象分为两类居民，一类为垃圾场附近的居民，采用立意抽样；以厦门 3 个大型垃圾处理场所在地为圆心，分别以 3 公里为半径立意选取垃圾场周边的社区，在社区内部采取随机抽样方式抽取 400 个样本。另一类为非垃圾场附近的普通居民，采用多阶段抽样方法。本次调查对象为 18-70 岁的居民，共发放问卷 700 份，回收有效问卷 660 份，有效回收率为 94.29%。

（三）因变量

本研究的因变量为环境风险分配。学术界对于环境风险的理解存在两种争论：实在论和建构论。实在论者主要集中在自然科学领域，他们倾向于把环境问题看作是技术问题，环境风险是由于自然或人为活动等事件引起给人类生活带来的不确定状态及其相关损失，这种不确定性是客观存在的，可以通过概率函数加以计算的^[26]。环境风险的建构论者一方面承认环境问题的客观存在及其引发的环境风险，另一方面也强调环境风险也有其主观的面向，认为环境风险是社会建构的^[27]。因而自然科学与环境社会学关注的风险分配不同，自然科学强调使用系统科学的方法精确测量风险的暴露程度；而环境社会学则强调使用主观风险评价法来测量不同群体的风险分配，强调风险的实际分配，即已经发生的风险分配情况，从认知过去的风险经历或当前的风险遭遇来测量。本研究在借鉴学者^[28-29]对于风险分配的测量基础上自行设计了一个环境风险分配量表，我们在问卷中询问被调查者，“垃圾处理过程中会产生一些问题，在多大程度上已经影响到您的生活质量？”并设计了 11 个指标（见表 1）考察居民的所经历或遭受的环境风险。通过公式^[30]将其转换为 1 到 100 之间的指数¹将 11 项指标转换成 1 到 100 的得分。

（四）自变量

社会经济地位是指基于个人的教育、收入、居住地等基础上，个人相对于其他群体而言所处的社会和经济位置，是一个综合考虑了社会和经济两方面的综合指标^[31]，同时社会经济地位还包含个体的人口学特征^[32-33]。基于此，本研究的社会经济地位主要包括、性别、年龄、民族、受教育年限、收入、居住地（城乡社区类型、住家离垃圾场的距离）等变量。

¹ 转换公式：转换后因子值 = (因子值 + B) & A。A = 99 / (因子最大值 - 因子最小值)，B = (1/A) · 因子最小值。B 的公式亦为，B = [(因子值最大值 - 因子最小值) / 99] · 因子值最小值

聂伟
谁承担更多的风险？

表1：环境风险的频数描述和因子分析

项目	频数描述（%）					因子分析	
	严重	有些	不清	没什么	完全	健康与物	社会
带来臭味	40.1	28.1	8.3	19	4.2	.783	.240
污染水源	27.3	27.8	16.4	22.2	6.1	.798	.338
发出噪声	12.3	25.8	16.8	36.7	8.0	.555	.214
污染土壤	20.4	27.2	25.5	20.8	5.8	.774	.331
滋生病菌	35.0	35.7	14.9	11.1	3.0	.763	.259
制造心理压力	21.1	35.0	16.3	21.4	5.9	.708	.376
危害健康	26.9	36.3	16.8	15.3	4.4	.679	.471
产业贬值	14.9	25.0	34.6	18.7	6.5	.422	.742
减少工作机会	9.0	19.8	37.8	24.9	8.2	.303	.872
降低收入	10.0	22.2	33.5	25.5	8.5	.333	.850
人口减少	9.9	19.3	34.4	26.6	9.6	.288	.810
特征值						6.539	1.073
方差贡献率						59.44%	9.76%

四、研究发现

在垃圾场周边居民模型中，社会经济地位是影响环境风险分配的重要因素，模型的解释力为 18.7%，且通过了显著检验。然而，在非垃圾场周边居民模型中，社会经济地位对环境风险分配不具有显著的影响（F=2.26，p>0.05）。分析结果如下：

第一，性别在环境风险经历或遭遇上不存在显著的差异，假设1未得到验证。此发现与国内外学者的研究结果呈现出的一致性，王朝科研究表明不同性别之间承担的环境风险呈现较大差异^[34]。西方学者表明，女性承担的环境风险明显多于男性^[35]。调查发现，厦门市是福建省的经济发展中心，是一个重要的劳务输入地，垃圾场周边大部分的居民并未选择外出务工，而是选择在垃圾场周边附近的工业区或商业区务工，形成白天在工厂务工、晚上回家的模式，并未出现“大批男性外出务工，而女性滞留在农村”的局面，在一定程度上可以解释不同性别承担的环境风险不存在显著差异。

第二，年龄与风险经历呈现出负相关，这说明年龄越大者，所经历或遭受的环境风险越少。假设 7 未被证实。贝克认为风险感知和风险不是不同的东西，而是相同的东西^[36]，年龄越大者，其风险感知能力较弱，其并未意识到自己所经历或遭受的环境风险，因而呈现年龄与环境风险分配的负相关效应。

第三，民族对环境风险分配的影响不显著，假设2得到验证。此发现与西方研究存在不一致性，西方研究表明，种族是风险分配不公的决定性因素；1983年，休斯敦的25个固体废弃物处置场中有21个位于非洲裔美国人社区周边^[37]；2007年，废物设施的3公里范围之内56%的居民是有色人种^[38]。

表 2：社会经济地位对环境风险分配影响的多元回归模型

自变量	模型1(垃圾场周边居民模型)		模型2（所有居民）	
	B	Beta	B	Beta
性别 ^a	0.487	0.012	1.012	0.023
年龄	-0.141*	-0.091	-0.160**	-0.096
民族 ^b	6.457	0.047	1.898	0.016
收入对数	-2.599**	-0.112	-2.356**	-0.106
受教育年限	-0.027	-0.005	0.275	-0.055
城市社区 ^c	-16.672***	-0.399	-14.065***	-0.308
住家离垃圾场的距离 ^d				
1-3公里	—	—	-6.968**	-0.149
3公里以上	—	—	-9.733***	-0.215
常数	74.009		78.541	
N	388		612	
Adjusted R-squared	0.187		0.226	
F	15.86***		23.29***	

注：*** $p < 0.001$ ，** $p < 0.05$ ，* $p < 0.1$ 。a的参照类为女；b的参照类为少数民族；c的参照类为农村社区；d的参照类别为1公里范围之内。

第四，收入与环境风险分配存在负相关关系，且统计检验显著，收入每增加一个对数单位，其经历的环境风险得分降低 2.599 分，假设 3 被证实。与以往研究结果保持一致性，西方研究结果表明，低收入阶层承受更多的环境风险^[39-40]。一方面，收入越高者，其可动员的社会资源越多，越可能动用社会资源去阻止垃圾场的建立，另一方面，收入越高者，其风险应对能力越强，在一定程度上能够减少环境风险；当环境风险积累到难以承受之地步时，其可通过迁移来规避环境风险，而收入越低者缺乏经济支付能力，难以作出理性行动和选择最佳的居住场所，不具备转移风险的能力，承担更多的环境风险。

第五，受教育年限对环境风险经历的影响不显著。假设 4 被否定。这一点与国内外研究存在不一致性。潘斌指出，社会风险的分配依赖于风险知识、风险治理等风险应对能力，教育程度越高，风险防范知识和风险应对能力越强，承担的环境风险越少^[41]。西方学者研究表明，垃圾场选址一般都选择在受教育程度低的地区，受教育程度越低，承担的环境风险越多^[42]。我们的调查发现，后坑垃圾场位于厦门市，垃圾场自 1999 年运营以来，管理一直较好，没有发生过重大的扰民事件；2008 年开始，随着岛内建设重心的东移，厦门市政府计划把周边社区作为城市重点开发区域，改造成厦门新的中心城区，并在后坑垃圾场附件建立了大量的人才保障性经济适用房和公务人员保障性住房，大批本科及以上学历的人才入住，他们同样经历着较高的环境风险，因而不同的受教育年限者在环境风险经历上不具有显著的差异。

第六，农村社区居民的环境风险经历显著高于城市社区居民，假设 5 得到证实。回归系数显示，与农村社区居民相比，城市社区居民的环境风险经历低 16.672 分。同时，城市社区的标准回归系数为-0.399，其绝对值为所有通过检验变量中最大的；表明城乡社区是影响环境风险分配的最终重要因素，大量的生活垃圾和工业垃圾往乡村垃圾场转移，产生环境风险，致使农村居民经历的环境风险明显高于城市居民。

第七，住家离垃圾场的距离对环境风险的分配具有显著的负向影响，假设 6 得到支持。模型 2 显示，与居住在离垃圾场 1 公里范围之内的住户相比，居住在离垃圾场 1-3 公里和 3 公

里以上范围的住户的风险经历得分分别低 6.968 分和 9.733 分。住家离垃圾场的距离越远，经历的环境风险越低，表明垃圾场周边居民和非垃圾场周边居民承担着不成比例的环境风险，环境风险分配以垃圾处理场为圆心向外围不断递减的趋势。

五、结论与讨论

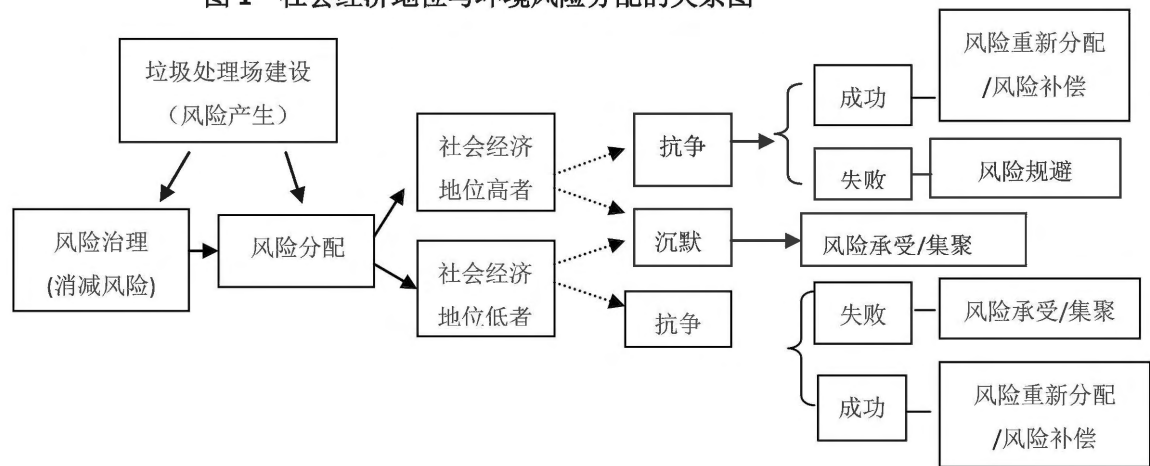
本研究基于上面的数据分析，基本得到以下结论：第一，环境风险并非公正的分配于不同的社会经济地位群体中，不同社会经济地位群体承担着不成比例的环境风险，社会经济地位是影响环境风险分配的重要因素。第二，年龄、收入、居住地（城乡社区类型、住家离垃圾场的距离）是影响环境风险分配的显著因素。第三，性别、民族、受教育年限对居民的环境风险经历影响并不显著。

本文关于环境风险分配的研究与西方存在明显的区别：首先，西方学者将环境风险分配与“民族”、“教育”、“性别”等社会因素^[43-44]联系在一起，而本研究发现这些变量都不具有显著的统计性；本研究认为，在美国，有色人种较多且处于弱势群体地位，政府在垃圾场处理场选址时采取“最小抵抗原则”，有色人种地区易成为垃圾场选址地。而在我国，汉族人口比例达到 92% 以上，少数民族比例较少；与美国种族歧视制度形成鲜明对比的是，我国采取民族共同繁荣的政策，因而没有出现少数民族承担更多环境风险的局面，民族对我国环境风险分配并不产生显著影响。伴随着保障房政策的实行人才保障性经济适用房和公务人员保障性住房在各城市全面建设开来，保障房一般建在城市地价比较便宜的边缘或郊区，甚至可能选址在垃圾场周边，因此，受教育程度越高者亦可能承受较高的环境风险。由于选择调查地点原因，性别对环境风险分配的影响不显著，这一点有待以后的研究进一步论证。其次，与西方尤其是美国的环境风险分配关注的焦点不同的是，我国的环境风险分配不公突出表现在城乡的环境风险分配差异上，城市居民经历的环境风险明显低于农村居民，对此本研究认为这可能与我国的城乡二元制结构存在关联。第一，我国采取优先发展城市的战略，出现了城乡二元体制，形成了城市中心—农村边缘的模式，处于城市中心者，在政治及行政的治理活动中有着不可挑战的支配权，面对风险，城市中心者有权做出分配的选择，可以把原先产生于中心地带和应当由中心地带承担的风险分配出去^[45]。第二，我国绝大部分生活垃圾污染防治投资基本都在城市，而农村很难得到生活垃圾污染治理和环境管理的资金，缺乏相应的环保设施，致使农村居民经历更多的垃圾处理风险。第三，城市在将大量生活垃圾污染转嫁给农村居民的同时，却没有给环境利益遭受损害且相对贫困的农村给予风险补偿，消减垃圾处理带来的风险，使得风险积聚在农村居民身上。第四，城乡居民较大的社会经济地位差异决定了他们抗风险能力的不一致性，居住在城市社区者相对拥有完善的社会保障、金融资产总量和人均值较高，能够有效的抵制社会风险^[46]，而居住在农村社区居民其抗风险机制明显弱于城市，难以采取有效措施规避风险，致使风险积聚在农村居民身上。

总结起来，社会经济地位对环境风险分配的作用机制如图 1 所示。垃圾场的建设与运营给周边社区带来一定的环境风险，相关部门采取措施消减环境风险，但难以消除，形成了环境风险的初次分配。不同社会经济地位群体的风险应对能力差异影响着风险重新分配。社会经济地位高者拥有一定的经济资本、政治资本、社会资本和话语权力等风险应对能力，在一定程度上改变环境风险分配格局。社会经济地位越高者，其拥有的社会网络规模越大或网络规模势力越强^[47-48]，其关系疏通能力越强，对环境危害做出各类抗争的可能性就越高^[49]，越可能通过环境

抗争改变环境风险分配格局。若环境抗争失败，社会经济地位越高者，其收入相对较高，具有

图 1 社会经济地位与环境风险分配的关系图



理性选择居住环境的经济能力，有能力搬离环境风险区域，规避环境风险，承担较少的环境风险。社会经济地位较低者，风险应对能力较弱，若选择沉默和抗争失败，则集聚一定的环境风险。深入访谈发现，当垃圾处理风险严重干扰到日常生活时，他们会选择“堵马路、静坐”等原始抵抗方式，向制造污染的垃圾处理抗议，然而只要垃圾处理单位给予一定的经济补偿，社会经济地位较低者就选择停止抗议，这种接受“以钱补污”的短期维权策略行动并没有彻底消除环境风险，而是积累了环境风险。风险的不平等分配“实际上是一种强权逻辑，即谁有权势，谁就转嫁风险，谁没权势，谁就承担风险”^[50]，风险分配呈现出一种阶级或阶层定律，遵循社会经济地位逻辑，财富分配和风险分配存在重合性。因而在日后政策制定中，不仅需要关注不公正的环境风险分配，同时也需要关注环境保护责任和义务的分配。应加强对垃圾场周边居民的补偿机制，降低环境和健康风险，保障垃圾场周边居民和低收入者的环境权益。

最后，值得指出的是，作为一项探索性研究，我们只是初步证实了社会经济地位与环境风险分配之间的关系，但本研究仍存在一定的局限性。第一，社会经济地位对环境风险分配的影响应该是长期性和历时性，纵向跟踪数据显然比横截面数据更适合于厘清社会经济地位与环境风险分配的复杂关系，而本研究受条件限制只获取了某一时点的截面数据。第二，社会经济地位与环境风险分配的两者之间的关系实际上非常复杂，其中许多机制在本文中未能充分挖掘，如在社会经济地位与环境风险分配之间可能还存在环境意识等中介变量未能充分考虑到，本研究的观点和结论还有待进一步大规模、纵向调查的实证研究来验证。

参考文献：

[1]童志锋.历程与特点:社会转型期下的环境抗争研究[J].甘肃理论学刊, 2008 (6): 85-90.
 [2]郭巍青等.风险社会的环境异议——以广州市民反对垃圾焚烧厂建设为例[J].公共行政评论, 2011(1):95-121.
 [3]汤汇浩.邻避效应: 公益性项目的补偿机制与公民参与[J].中国行政管理, 2011(7):111-114.
 [4][8][23][43]洪大用、龚文娟.环境公正研究的理论与方法评述[J].中国人民大学学报, 2008(6):70-79.
 [5]US Gen. Account. Off. Siting of Hazardous Waste Landfills and Their Correlation with Racial and Economic Status of Surrounding Communities[M]. Washington, DC: US Gov. Print. Off. 1983:

- [6]Mohai P, Bryant B. Environmental racism: reviewing the evidence[A]. Race and the Incidence of Environmental Hazards: A Time for Discourse, edited by Bryant B and Mohai P. Boulder: Westview, 1992: 163-176
- [7]Brulle RJ, Pellow DN. Environmental Justice: Human Health and Environmental Inequalities[A] Annu. Rev.Public Health, 2006, 27: 3.1-3.22
- [9]Bullard RD, Wright BH. Environmentalism and the politics of equity: emergent trends in the black community [J]. Mid-American Review of Sociology, 1987, 12(2): 21-37.
- [10]Williams D.R. Socioeconomic differentials in health: A review and redirection.[J] Social Psychology Quarterly, 1990, 53 (2): 81-89.
- [11]Burke, Lauretta M. Race and Environmental Equity: A Geographic Analysis in Los Angeles[J]. Geo Info-Systems, 1993, 3: 44-50.
- [12]Daniels, Glynis and Friedman, Samanth. Spatial Inequity and the Distribution of Industrial Toxic Releases: Evidence from the 1009 TRI[J]. Social Science Quarterly 1999, 80(2): 244-262.
- [13]Saha R, Mohai P. Historical context and hazardous waste facility siting: understanding temporal patterns in Michigan.[J] Soc Probl, 2005, 52(4): 618-648.
- [14][21][22][38][44]Mohai.P, Pellow.D, Roberts.T. Environmental justice[J]. Annual Review of Environment and Resources, 2009, 34: 405-430.
- [15][37][42]Bullard RD. Dumping in Dixie: Race, Class and Environmental Quality[D]. Boulder, Colorado: Westview. 3rd ed.2000:12-102.
- [16][39]Brooks N, Sethi R. The Distribution of Pollution: Community Characteristics and Exposure to Air Toxics[J]. Journal of Environmental Economics and Management, 1997, 32(2): 233-250.
- [17]洪大用.环境公平:环境问题的社会学视点[J].浙江学刊, 2001(4):67-73.
- [18]卢淑华.城市生态环境问题的社会学研究[J].社会学研究,1994(6):32-40.
- [19]王书明.生存权、环境权与社会排斥的底线 ——环境正义经验研究的社会学视角[J].中国环境资源法学评论,2007 年刊.
- [20]陆文聪等.农民工健康权益问题的理论分析: 基于环境公平的视角[J].中国人口社会科学, 2009(3):13-20.
- [24]张伟丽、叶民强.政府、环保部门、企业环保行为的动态博弈分析[J].生态经济, 2005 (2): 60-65.
- [25]钟茂初、闫文娟. 环境公平问题既有研究述评及研究框架思考[J].中国人口·资源与环境, 2012 (6): 1-6.
- [26]毕军、杨洁等.区域环境风险分析与管理[M].北京:中国环境科学出版社, 2006:3
- [27]蔡萍.环境风险的社会建构论阐释[J].兰州学刊, 2008(11): 101-105
- [28]卜玉梅.风险分配、系统信任与风险感知[D].优秀硕士论文,厦门大学,2009
- [29]赵延东等.北京公众对食品安全风险的感知[OL], 2012-04-22, <http://www.sociology.cass.net.cn/shxw/shgz/shgz42/P020080218335519062456.pdf>
- [30]边燕杰等.中国城市家庭的社会网络资本[J].清华社会学评论, 2000(2): 1-18.
- [31]李培林、田丰.中国劳动力市场人力资本对社会经济地位的影响[J].社会.2010(1): 69-87

- [32][48]胡荣.社会经济地位与网络资源[J].社会学研究, 2003 (5): 58-69 .
- [33]胡荣.影响农民工精神健康的社会因素分析[J].社会, 2012 (6): 135-157
- [34]王朝科.性别与环境: 研究环境问题的新视角[J],山西财经大学学报,2003(3):31-34.
- [35]Cupples J. Rural development in El Hatillo, Nicaragua: Gender, neoliberalism and environmental risk, Singapore Journal of tropical geography, 2004, 25 (3): 343-357.
- [36]杨善华等.西方社会学理论(下卷)[M], 北京: 北京大学出版社,2006:124.
- [40] Saha R, Mohai P. Hamilton J T. Testing for Environmental Racism: Prejudice, Profits, Political Power? [J]. Journal of Policy Analysis and Management, 1995, 14(1): 107-132.
- [41]潘斌.风险分配与气候正义[J].社会科学,2011(9):117-121.
- [45]张康之等.风险社会中的风险治理原理[J].南京工业大学学报, 2009 (2) :5-9.
- [46]吴雪明等.中国转型期的社会风险分布与抗风险机制[J].上海行政学院学报, 2006 (3) :66-75.
- [47][49]冯仕政.沉默的大多数:差序格局与环境抗争[J].中国人民大学学报,2007(1): 122-132.
- [50]程启军.风险社会中的阶层:涉及面、应对力与分担机制[J].学习与实践, 2006 (10) :136-139.

日本語・英語要旨

想像の共同体としての中華帝国
— 儒教思想の展開の観点から —
福谷 彬

「想像の共同体」(imagined communities)とは、中国生まれのイギリス人の政治学者ベネディクト・アンダーソン(Benedict Richard O'Gorman Anderson, 1936～)が、その主著『想像の共同体』(1983)の中で、ナショナリズムの歴史的起原を説明する際に用いた概念である。本発表は、この「イマジンド・コミュニティ」論を中国研究においてどのように活かすことができるか、その射程を検討することである。

具体的には、ナショナリズム発生以前の中国の伝統的な世界観を、平岡武夫(1909～1995)が『経書の成立』(1946)において提唱した「天下的世界」論に求め、「想像の共同体」論と比較し、更にこの儒教的世界観を発展させた思想家として日本の浅見綱齋を取り上げ、儒教が持つ世界観の特徴とその現代的可能性を論じたい。特に綱齋の説を挙げるのは、綱齋の主張にナショナリズムを超える論理が含まれると考えるからである。

人格化する国家と国家化する感動
— 『感動中国』の中の意識形態と日常実践 —
馬 嵐(MA Lan, ま・らん)

現代社会において、大衆メディア、特にテレビは国家意識形態と集団文化を形成する重要な役割を担っている。『感動中国』は中央電視台が力を注いで製作した看板番組として、ここ十年来儀礼化しつつあり、「年度人物」などの儀礼に関連した言葉を流通させることを通し、「感動」という個人的感情を媒介に、もっとも自然な雰囲気の中で人々の親近感を喚起し、また様々な修辭句を用いて、そこに現れた自然な感情を民族と国家全体の自尊心と帰属感へと昇華させ、国家を人格化させることにより国家の「姿」を再現している。近年の演出で注意をひく点は、登場する人物がますます一般的な立場の人々や家庭生活の位相で人々を感動させる「小人物」へと移行し、一種の国民教育の舞台が構築されている点であり、国家意識形態がその場を借りて絶え間なく人々とその行動の中へと入り込み、親近感を利用して極致にいたる方法により民族国家のイメージを構築し、国家意識形態の価値観と個人的感情の高度な統合を実現している。

(翻訳：中山大将、巫覡)

残留日本人とは誰か
—北東アジアにおける境界と家族—
中山 大将

本ワークショップは、2010年の京都エラスムス計画から続く京大と南京大の若手研究者の交流である。本報告では、本ワークショップまでの道のりと、報告者が京都大学文学研究科 GCOE 研究員として参加したエラスムス計画による中国共同調査で得られた知見についてまず述べる。

次に報告者が京都大学文学研究科 GCOE 研究員として始めた「サハリン残留日本人」研究の現在を解説する。報告者の調査によれば、約 1,400 人の日本人がその時点でサハリン島に存在していた。彼らは何者だったのだろうか。また、冷戦後に民間人によって始められたこれらサハリン残留日本人の帰還運動に対して、日本政府はなぜ「サハリン残留日本人など存在しない」と言い放ったのだろうか。本報告ではこれらの問いに答えるために、日本政府の公文書や各種団体の資料およびサハリン残留日本人へのインタビューを用いる。

How political capital contributes to a stratified rural China:

based on investigation in Z village, Anhui province, China

柴 向南 (CHAI XiangNan, ちやい・しあんなん)

[Abstract] Inter-convert among different kinds of capital, based on Bourdieu's capital theory, is possible in reality. As for rural China, political capital, an important role under current CCP political system, could bring about economic and cultural capitals for capital owners. Always, elites on political as well as public affairs in rural areas are more able to be political capital owners. And they can earn more money than the average villagers inasmuch as more chances to achieve economic capital. Hence, such capital-chain brings about an economic stratification in rural China. In addition, as an outside cause, current process of urbanization in China exerts its influence on such stratification through unequal distribution of political capital. How to solve this stratification issue? It seems that, the famous Huaxi way, towards a more equal rural society with increase of wealth, can be, at least superficially, a right solution. However, in fact it can not unfortunately. The only way is to build a modern public sphere in rural China to defend the tremendous influence of political capital. However, under the current political system, there exists a dilemma in front of rural China.

[Key words] Empirical research; Rural China; Political capital; Economic stratification; Huaxi Model; Public sphere

温州龍船と地方社会変遷の民族誌研究
呉 天躍 (WU TianYue, う・ていえんゆえ)

本民族誌は中国東南沿海地方の温州における伝統龍船と現代的なスポーツ龍船を研究対象とし、それらを清末民国期から現在にいたる長期の歴史的過程の中において考察し、とりわけ 1980 年代改革開放以降の変化に重点を置く。オーラルヒストリーを基礎として龍船の沿革、伝統的龍船の一般的様式、巨大な儀礼経済や異なる社会的役割による文化実践等の角度から「深度遊戯 (deep play)」を描くことを試み、限られた視野ではあるが、地域社会文化の変遷を描出する。本報告では、社会集団の龍船をめぐる長期の相互関係や実践およびその実践の背後にある文化的意義と深層構造に重点を置く。最後に温州龍船民族誌の中の経験的発見を総括する。つまり伝統龍船とスポーツ龍船とは異なる「地域性」を構築しているのである。一部の地方龍船が民俗からスポーツへといたった「文明」的過程から、「地域性知識」の方法と理論の意義がさらに明らかになった。

(翻訳：中山大将、巫靚)

**Emerging Chinese Public Sphere in Multi-ethnic Malaysia:
A Case Study of the Hungry Ghost Festival and Philanthropic Activities**
櫻田 涼子 (SAKURADA, Ryoko)

The Hungry Ghost Festival is the most popular folk ritual festivity practiced in Chinese communities in Southeast Asia. Traditionally, Chinese have considered the seventh month of the Chinese lunar calendar as the 'ghost month' in which ghosts, spirits, and deceased ancestors are believed to migrate from the lower realm of the dead to visit their living descendants who pay them homage and request their protection.

This short paper is based on fieldwork conducted in Johor, Malaysia in the summer of 2012. By referring to brief ethnographic data of the Hungry Ghost Festival as practiced in a Chinese community of an average modern housing estate located in a Johor suburb, I will discuss how this extremely ethnic and intimate ritual event came to acquire significance as a public celebration for its support of community and philanthropic traits.

毛沢東時代における労働者の婚姻
—洛陽の工場労働者の研究—
方 莉琳(FANG LiLin, ふぁん・りりん)

社会主義工業化を進める計画経済時代において、労働者階級は中国の指導階級とされ、「時代の寵児」であった。この身分的位置づけは労働者の生活にも反映し、労働者の個人的結婚生活に対しても大きな影響を与えた。本報告では河南省洛陽市の工場労働者の婚姻に関する研究を通して、毛沢東時代の労働者の結婚選択における以下の特徴が明らかになった。第一に、職業には貴賤があり、国家が「職業に貴賤なし」と唱導しても、労働者の結婚選択においては、やはり労働者が優先され、農民が最後という選好から、幹部が優先され、農民が最も好まれないという選好へと変わっていった。第二に、地域差別があり、国家が唱導する「四海一家、革命情誼（全国がひとつの家族であり、革命の絆で結ばれている）」とは異なり、労働者の婚姻においては、地域による選り好みや都鄙の差別がきわめて明確であった。第三に、政治が注意を怠り、毛沢東時代においては、政治こそが一貫して最も重視される要素とされ続けた。しかしながら、労働者の結婚選択において、政治は決して最も重要な役割を担ったわけではない。このことからわかるのは、毛沢東時代の労働者の婚姻選択は決して国家の主流である思想の影響を受けたわけではなく、旧態依然とした価値観に従っていただけであった。

（翻訳：中山大将、巫観）

個人的な移住における移住先選択要因
—南京在住日本人を事例に—
松谷 実のり

グローバル化の中で日本人の海外への移住者数は拡大し、その移住形態は多様化している。本報告では南京という、移民が多く集まるグローバル都市ではないが、一定数の日本人が居住している場所に焦点を当てる。そして南京に居住する日本人のうち、企業が派遣する駐在員ではなく、個人的に移住した人々に注目する。彼らを滞在目的によって類型化し、南京を移住先に選択した理由を概観することを通じて、比較的小規模な都市への移住者に見られる特徴を明らかにする。それにより、グローバル化の影響が小規模な都市に対してどの程度の影響を及ぼしているのか、またそれに伴って日本人の移住の多様化がどのように進んでいるのかを考察する。

誰がより多くのリスクを負うのか？
—社会経済的地位と環境リスク配分の差異—
聶 偉 (NIE Wei, にえ・うゑい)

西洋の環境的公正に関する理論は、計量的研究を基礎として、環境リスク分配が偏在していることを実証し、社会経済的地位と環境リスクの間の相関性を強調しているが、我が国では計量的実証研究が発展しているとは言えない。本研究は、環境的公正に関する理論に立脚し、アモイ（廈門）のゴミ処理についての実証的調査を事例として、住民の社会経済的地位と環境リスクの相関性を探る。研究によって明らかになったのは以下の点である。第一、西洋の研究成果と一致しているのは、環境リスクがまったく公正には分布しておらず、異なる社会経済的地位を持つ集団間で、環境リスクは社会経済的地位に従って分配されており、環境リスクと富裕さには逆の相関がみられる。第二、西洋社会、特にアメリカで人種、性別、教育の環境リスク分配に対する影響が強調されているのと異なり、我が国の環境リスク分配に対する性別や民族、教育の影響は統計的には顕著には見られない。第三に、我が国の農村住民は都市住民に比してさらに多くの環境リスクを負っており、現在の都市農村間の環境リスク分配の不公平問題が突出していることが明らかになった。

キーワード：社会経済的地位、環境リスク分配、ゴミ処理、環境的公正

（翻訳：中山大将、巫靚）

作为“想象的共同体”的中华帝国

福谷 彬 (FUKUTANI Akira)

“想象的共同体”是出生于中国的英国政治学家本尼迪克特·安德森 (Benedict Richard O'Gorman Anderson, 1936 年-) 在其著作《想象的共同体》中说明民族主义的历史起源时使用的一个概念。本文将就“想象的共同体”论在中国研究中的可能适用的范围进行讨论。

平岗武夫 (1909-1995) 在《经书的成立》(1946) 中将民族主义诞生之前中国传统的世界观视为提出的“天下的世界观”, 笔者在报告中将其与“想象的共同体”论进行比较。另外, 由于笔者认为在浅见絅齋 (1652-1712) 的思想中, 包含了一种超越民族主义的逻辑, 因此报告中还以日本思想家浅见絅齋为例, 探讨儒教的世界观在现代社会中的可能性。

人格化的国家和国家化的感动 ：《感动中国》中意识形态的日常化实践

马 岚

在现代社会, 大众媒介尤其是电视担当了塑造国家意识形态和族群文化的重任。《感动中国》作为中央电视台倾力打造的一个精神品牌栏目, 十年来已经逐渐被仪式化, 通过一系列的类仪式话语推出“年度人物”, 借助“感动”这种个人情感作为载体, 从最自然的意象入手来唤起人们的亲切感, 再运用各种转喻和隐喻的修辞, 使得自然情感被升华至对整个民族和国家的自豪感和归属感, 以人格化的形式再现了国家的“身影”。近年节目的关注点愈加转向平凡岗位、家庭生活上特别感人的“小人物”, 构建了一个进行国民教育的舞台, 国家意识形态借此不断渗透进人们的观念和行为中, 用亲切到极致的方式来建构民族国家形象, 实现了意识形态价值和个人情感的高度统一。

残留日本人是誰

：東北亚の边境と家庭

中山 大将 (NAKAYAMA Taisho)

本届论坛是自 2010 年京都伊拉斯谟计划京都大学与南京大学结缘以来年轻研究者的又一次学术交流。笔者先就过往的论坛进行了相关介绍, 又回顾了笔者作为京都大学文学研究科 GCOE 研究员时参加京都伊拉斯谟计划中国共同调查所获得的感受。

笔者在京都大学文学研究科 GCOE 研究员时开始了“萨哈林残留日本人”的研究。根据笔者的调查, 1949 年 8 月南萨哈林约有 1 千 4 百名日本人。这些萨哈林残留日本人是什么样的群体? 对于冷战后开始的萨哈林残留日本人归国运动, 日本政府为什么断言“萨哈林没有残留日本人”? 本次的发言主要从日本政府的档案、各种团体的资料、萨哈林残留日本人以及朝鲜人的采访中寻找以上问题的答案。

温州龙船与地方社会变迁的民族志研究

吴 天跃

本民族志以中国东南沿海的温州传统龙舟和现代健身龙舟活动为研究对象，将其置于晚清民国到当代的长时段历史中进行考察，侧重论述上世纪 80 年代改革开放之后的变化。试以选择性记忆基础上的龙舟活动史、传统龙舟活动的一般模式、耗费巨大的礼仪经济和不同社会角色的文化实践等角度深描这一“深度游戏”(deep play)，管中窥豹，呈现地方社会文化的变迁。本文更侧重社会群体围绕着龙舟活动的长期互动和实践，以及实践背后的文化意义与深层结构。文末总结了温州龙舟民族志中的经验性发现，即传统龙舟与健身龙舟是在建构不一样的“地方感”。在呈现了一部地方龙舟从民俗到体育的所谓“文明”的进程后，进一步阐发了“地方性知识”的方法和理论意义。

关键词：温州龙舟 礼仪经济 场域 实践 文明的进程 地方性知识

毛泽东时代的工人婚姻 ：基于洛阳工厂工人的研究 方 莉琳

在建设社会主义工业化的计划经济时代，工人阶级作为中国的领导阶级，是“天之骄子”。这重身份映射到工人的生活中，对工人的个体婚姻生活也产生了非常重大的影响。本文通过对河南省洛阳市工厂工人婚姻的研究，发现毛泽东时代的工人在婚姻选择上呈现出如下特点：一、职业有贵贱，虽然国家大力倡导“职业无贵贱”，但在工人婚姻选择中还是经历了一个由工人优先，农民最后到干部优先，农民最后的变化过程。二、地域有区分，与国家所倡导的“四海一家，革命情谊”不同的，在工人的婚姻选择上地域选择以及城乡区分非常明显。三、政治略讲究，在毛泽东时代，政治一直是最讲究的一个因素。然而在工人的婚姻选择上，政治却并未扮演非常重要的角色。由此可见，毛泽东时代工人的婚姻选择并未过多地受国家主流意识的影响，它依旧遵循自我的选择路径。

个人的跨国流动与迁移地选择的关系

: 以在南京的日本人为例

松谷 实(MATSUTANI Minori)

在全球化的背景下,越来越多的日本人选择出国居住,并且他们的居住形态也趋向多样化。迁移地从欧美转移为亚洲的人数明显增加。另外,从以往的企业派遣的常驻形式,渐渐转变为个人的迁移。本报告将焦点放在南京这个虽不是移民集中的全球化城市,但有一定规模的日本移民集中居住的小规模城市。什么样的日本人居住在南京,他们选择南京的理由何在。通过对住在南京的日本人按类型进行分类,明确迁移到小规模城市的日本移民的特点。跨国的日本人的多样化有共通的特点,例如年金移民增加,年轻人的个人迁移开始出现。这种特点是否也在南京显现,南京是否有自己独特的条件。笔者考察全球化时代日本移民的多样性与全球化对小城市的影响。

谁承担更多的风险?

:社会经济地位差异与环境风险分配

聂 伟

摘要:西方环境公正理论,在系统的定量研究基础上,证实了环境风险分配不平等普遍存在,并强调社会经济地位与环境风险分配的关联性,然而在我国并未开展定量的实证研究。本研究在回顾环境公正的理论基础上,以厦门垃圾处理的实证调查为例,探讨居民的社会经济地位与环境风险分配的关系。研究发现:(1)与西方一致的是,环境风险并非公正地分布于不同的社会经济地位群体中,环境风险分配遵循社会经济地位逻辑,风险分配和财富分配存在交叉重合性。(2)与西方社会尤其美国强调种族、性别、教育对环境风险分配的影响不同是,性别、民族和教育均对我国环境风险分配的影响不具有显著的统计性。(3)我国农村居民比城市居民承担更多的环境风险,表明目前城乡的环境风险分配不公正问题凸显。

关键词:社会经济地位;环境风险分配;垃圾处理;环境公正

ワークショップを終えて

「京都大学・南京大学社会学・人類学ワークショップ」は、日中の若手研究者の学術交流を目的として 2011 年度より継続して行っており、今年で三回目を迎えることができた。前二回までは南京大学で行ったが、今年度は京都大学のアジア研究教育ユニットの支援を得て、中国側発表者を招聘するという形で、京都大学でワークショップを開催することができた。

今回のワークショップは「国際連携大学との協働により大学院生の教育と研究指導を行う」というアジア研究教育ユニットの意向に沿って、企画と運営を学生主体で行った。

本ワークショップの特色として、マルチリンガルを掲げ、英文原稿を必須とせず、事前に発表者全員分の日本語原稿と中文（英文）原稿を用意したのも、日々アジアの学生と交流しながら研究を進める身として、互いにとっての外国語である英語を用いた交流より、できることなら互いの母国語での交流が望ましいと感じるからである。このことに対して落合教授からは、「アジアにおけるマルチリンガルの研究集会の実現に向けての有意義な試みであった」とのお言葉を賜ったが、このような実験的な試みが許されたのも、「ワークショップの運営は学生に委ねる」というユニットの柔軟な方針があったればこそ、と深く感謝している。この「ワークショップを終えて」では、各報告の補足を兼ねて質疑応答の内容について略述したい。

まず、福谷の発表「想像の共同体としての中華帝国—儒教思想の展開の観点から」では、儒教の伝統的世界観である「天下的世界観」には、近代のナショナリズムを超克する論理があることを指摘した。これに対して福田宏先生からは、「天下的世界観からナショナリズムへの転換は、その変化を強調し過ぎではないか。ナショナリズムというものの柔軟性・汎用性を踏まえて両者の連続性を考察することもできるのではないか。」との指摘を受けた。

次に中山大將氏「残留日本人とは誰か—北東アジアにおける境界と家族」に対しては、残留者に対する日本政府の認識と、残留者の次世代におけるアイデンティティについて質問が提出された。これに対して、中山氏より、「日本政府の立場としては、残留日本人は飽くまで日本人であり、日露間の中間的、両属的存在としては受け入れない。ただし、日ロ友好のシンボルとしては利用されうる。また世代間の文化問題は大きく、孫は日本語を知らないことも多く、日本へのアイデンティティは希薄になっている。」と答えた。

柴向南氏の「政治資本分布不均衡の中国農村における階層分化の影響—安徽省宅坦村のフィールド調査に基づいて」には、研究対象である Z 村の地理や人口や中流階層の厚さに対する説明や、「政治的上層」の語の説明が求められたが、これに対して「上層下層の格差は大きく中流階層は発達していない」、また「政治上的上層の指標は党员や党の幹部であるかどうかだ。」と返答があった。

呉天躍氏の「温州龍船と地方社会変遷の民族研究」に対しては、「龍船を通じての同族集団としての宗族意識の復興はあるのか」という質問があったが、「宗族における高い世代の人達はスポーツ龍船を若い人のものと見ており、宗族全体としてスポーツ龍船を担っていこうという意識が共有されているわけではない。むしろ実態は宗族関係を通じてのス

ポーツクラブの形成に近いのではないか。」と答えた。

方莉琳氏の「毛沢東時代における労働者の婚姻」に対しては、「労働力流入による男女比の不均衡の程度はどの程度か。」という質問があり、「男性が工人の八割に昇る。女性には工場労働者への憧れがあり、妻は夜勤に回されることもあった。」という返答があった。

松谷実のりの「個人的移民の移住先選択要因—上海と南京の比較から」に対しては、上海との比較対象として南京を選んだ理由に対して質問があった。これに対して松谷氏からは「経済が発展して移民が多く集まる上海と、南京のような経済的發展がほどほどで、移民の数もさほど多くない南京の状況を調べることで、海外に移住する日本人の拡散状況と、こういったタイプの日本人がどういう場所で増加しつつあるのか、ということを知ることができる」との返答があった。

櫻田涼子氏の「他民族国家マレーシアにおける華人的公共領域の誕生—孟蘭勝会の慈善活動の事例から」に関しては、櫻田氏は、「参加者の減少に対してはどのような取り組みがなされているのか」という質問に対して「くじびきによって責任者を決めている。」と、また、「孤鬼祭と外部社会との間にはどのような関わりがあるのか」という質問に対しては、「地域の有力者を祭に招待をして、その場で地域問題を訴えるなど、政治的関わりも存在する。」と答えた。

聶偉氏の「社会経済的地位と環境リスク配分の差異—廈門の廃棄物処理に関する実証的研究に基づいて」に対しては、瀬戸徐映里奈氏から「都市と農村のグラデーションや収入と学歴の関係などが構造的に組み込まれてしまっているのではないか。」という指摘があったが、これに対しては「今後の研究的で構造的問題を見たいが、アモイは農村と都市の格差が大きいので、中国における代表的ケースとして扱えるかはわからない。」と返答した。以上は質疑応答の概要である。

最後に私事となるが、二回目の南京での発表に引き続き、今回の京都でも発表の機会を得ることができた。前二回は南京で行われ、今回は京都で行うことができたが、このことは京都大学・南京大学がこれから継続的な交流関係を築いていく上で、多少ながら貢献ができたものとする。関係各位の皆様方に心より感謝の言葉を申し上げたい。

2013 年 12 月 11 日

福谷 彬

结语

“京都大学南京大学社会学人类学论坛”是以中日年轻学者的学术交流为目的的一个论坛。自 2011 年起已持续进行了两届，今年是第三个年头。前两届都是在南京大学举行，而今年我们得到京都大学亚洲研究教育机构的资助，以邀请中方发言人的形式，在京都大学召开了论坛。

关于本论坛的特色等，序文中有详细说明，在此不多赘述。我们想借此机会，最后对论坛当天的提问及回答部分进行一个小结，以期更为全面地了解此次论坛报告论文的内容，也更能体现论坛进行的价值。

首先是福谷彬的《作为“想像的共同体”的中华帝国——从儒教思想展开的观点出发》这篇报告。福谷认为儒教传统世界观的“天下世界观”中蕴含着超越近代国家主义的思想，并对此进行了详细说明。对于这一点，点评人的福田宏老师认为，福谷过于强调“天下世界观”与“国家主义”的思想转变，基于“国家主义”这一概念的柔韧性与广泛性，两者之间的关联同样值得考察。

其次是中山大将的《残留日本人是谁：东北亚的边境与家庭》这篇报告。关于这篇报告，有人提出了以下两个问题，第一，日本政府对残留者的认识。第二，残留日本人的下一代的个人归属问题。对此，中山的回答到：“日本政府认为残留日本人依旧是日本人，不能将他们认为是日俄的中间型或双重所属，但作为日俄友好的象征时可以利用。其次，代际间的文化差异越来越大，残留日本人的孙子辈大多不会日语，对日本的归属意识也日渐淡薄。”

对柴向南的《在政治资本分布不均衡的中国农村阶层分化的影响——基于安徽省 Z 村的田野调查》报告，点评人阿部友香对研究对象 Z 村的地理、人口、中间阶层的存在人数以及“政治上层”的意义进行了提问。对此，柴同学认为“上下层间的差距不断增加，中间阶层并不发达，而政治上层定义的指标多是党员以及党干部等。”

吴天跃在论坛上就他的硕士论文《温州龙舟及地方变迁的民族研究》进行了报告。对此，点评人的今中崇文提出：“同族集团的宗族意识有没有因为龙舟而得到复兴？”对此吴天跃同学回答到：“在宗族中，辈分高的人认为体育龙舟是年轻人的东西，因此体育龙舟并不拥有承担宗族命运的意识。但事实上很多体育龙舟的娱乐部多是通过宗族的关系形成的。”

关于方丽琳的《毛泽东时代的劳动者婚姻》，点评人猪股祐介就“劳动力流入的男女比例的不均衡达到了什么程度”进行了提问。对此方丽琳同学解释到：“男性达到了工人总数的 80%，女性因为对工场劳动者有向往之情，妻子值夜班的情况也有。”

松谷实的发言题目为《个体移民的移居地选择原因：上海与南京的比较研究》。点评人猪股祐介就为何要将南京作为上海的参照对象进行比较提出了问题。对此，松谷回答到：“对经济发展程度高移民众多聚集的上海，以及经济发展处于中流水平，并且移民总数也不多的南京进行调查，可以了解海外移居日本人的分布状况以及具体的哪些阶层的日本人在哪些地区不断增多等等。”

在樱田凉子的《多民族国家马来西亚的华人公共领域的诞生——从盂兰盆节的慈善活动来看》报告之后，有人提出了“对于参加者的不断减少，当地华人采取了哪些措施？”以及“孤鬼祭与外部社会之间有何种关联？”两个问题。对此，樱田的回答是：“他们通过抽签的形式来确定负责人。另外，当地的华人团体通过邀请有权有势者参加祭祀，在祭祀活动中向权势者倾诉当地的问题，因此存在政治性的关联。”

聂伟发言的内容为《谁承担更多的风险？：社会经济地位差异与环境风险分配》。对此点评人濑户徐映里奈提出了以下问题：“城市和农村的阶层、收入与学历的关系是否结构性地进行归纳？”对此聂伟的回答到：“希望在今后的研究中能够对结构性的问题进行思考，在厦门农村与城市的差距很大，是否可以作为中国的代表性案例还值得商讨。”

以上为本次论坛的提问答疑部分的内容。最后借此结汇向帮助本论坛运行的各位老师以及同学再次表示衷心的感谢。

2013年12月

福谷彬

在日本的感想

西历二〇一三年八月十三日深夜抵达日本，十六日下午离开日本，三夜三天的行程非常紧凑，且意义非凡。就个人而言，我很喜欢日本，对介绍与分析日本的书籍十分热爱，最喜爱的日本历史人物是源赖朝、平清盛与足利义满，作家中则是三岛由纪夫与新井一二三。

常听说日本有唐宋遗风，此番上洛，确实感受到了浓厚的历史韵味，当然日本独立演化出的人文精神是最吸引我们的了。我想这种人文精神具体表现在如下方面：第一，中山大将、福谷彬、巫觐等前辈的精心与周到的安排让我们非常感动，因为不仅会议完成了，想去的景点也去了，想买的日本产品也买到了，真的十分感谢日方的时间安排与不辞辛劳的全程陪同；第二，日本干净、整洁、卫生的程度绝对是世界前列的，社会井然有序，城市的建设非常人性化，高效地利用了空间进行规划，建筑用的色调很明亮，让人精神为之一振。而像垃圾回收制度则是利用了社会力量去解决垃圾问题，这才是一个好社会的好制度，也让我看到了社会学能够学以致用用的地方以及中国与日本之间的巨大差距。京都小巷里，日本政党政治的宣传海报也很有意思，且在去大阪的列车上，我还看见了关于日本宪法九条的标语横在稻田里，心里想，真正是务实的民风；第三，最关键事务一研讨会议方面，它的流程非常细致，不仅每个人发言汇报，而且有专业的点评和最后的总结陈词，这让我们都发现了论文中非常多的不足之处，以我的论文为例：如对宅坦村地理、人口背景的阐述不足，对整个村庄政治资本-经济资本-教育资本运作逻辑的揭示不够系统等，尤其感谢我的点评人阿部友香博士，她的细致是我远不能及的、她的分析方式如庖丁解牛、她的建议非常切中肯綮，对我的修改具有很高的指导意义；我还要郑重感谢落合惠美子教授，她也对我的论文进行了一定的指导，并告诉我不要仅从中国哲学去看世界，视野要宽阔，这是极为重要的；第四，大阪市民族博物馆的建设、管理与运营同样透露出日本的人文精神，首先它的室内外环境水准相当高，感觉负氧离子都比其他地方多呢。其次它对于全世界各文明区、各文化区、各国、各民族的研究事无巨细、细大不捐，我们在大洋洲、东亚、中东、非洲馆看了很多或熟悉或陌生的文化遗存。世界很广阔、很多元、很美，这是我们的基本感受。在介绍中国的展览区，虽然好像没有看见历代汉服（不知道是否记错了），但是对于中国其他兄弟民族的文化展示是很仔细的，也加深了我对中国的了解。在民族博物馆，“日本不是一个单一民族国家”终于亲耳证实了，我觉得这是一个非常好的思想，所有居住在日本国土上的人都是日本人，这样的想法让我非常感动。我觉得中国也应该反思目前的民族政策，而目前的民族政策人为地制造了很多莫名的民族界限，这是非常不利于中国未来发展的，在这一点上我们须向日本学习。以上四点，我觉得都是日本高度人文精神的体现，而且这种精神在当今的中国是急需的，也让我深刻地反省了自己是否太过于浮躁，不能但用此心、一心做事，终究远远不能达到这样的高度，这样的落差可以视为我今后的动力了。

从人工填海造就的伟大工程一关西国际机场飞回浦东国际机场后，发现即便是上海也有很多地方距离日本标准很远，比如说机场安检处的流行疫病提醒与防御宣传单的种数、数量，在上海几乎是没的，而日本却至少有十五种以上（具体数目已不记得），且都分了颜色标记，工作人员的服务态度也是没有办法相提并论的，至少我也希望看到自己国家的工作人员能够

带着笑脸相迎，但有些失望（当然只是一部分中国工作人员是这样）。这一次去日本，据中方同学的讨论总结，无论是在生活还是研究学习方面都大有裨益。站在中国的立场，必须以日本为中国现代化进程中的良师，学习如何在传统与现代之间保持平衡，而日本首屈一指的京都大学的各位前辈，则是我们永远的学习与追随的榜样。

再次感谢您们的全程陪同与精致安排。

柴向南敬上 西历二〇一三年十月二十五日 于中国南京

日本滞在の感想

2013年8月13日夜遅くに日本へ到着し16日の午後に日本を離れたこの3日3晩の旅程はとても充実しなおかつ並はずれて意義深かった。個人的なことを言うと、私は日本が好きで、日本のことを紹介したり分析したりする書籍を愛読し、最も好きな日本の歴史上の人物は源頼朝、平清盛そして足利義満で、作家の中では三島由紀夫と新井一二三が好きだ。

日本には唐や宋の文化の面影が残っていると常々聞いており、今回の京都訪問で、確かに濃厚な歴史情緒を感じた。当然のことながら、日本が独自に創り出した精神にもまた私の心は惹かれた。私はこうした精神の具現化が以下の面に現れていたと思う。第一に、中山大将、福谷彬、巫覡らの諸姉諸兄の心を込めた用意周到な日程は我々を感激させ、ワークショップが成功しただけでなく、行きたい所へ行き、買いたい日本の製品を買求めることができた。日本側のスケジュール設定と労苦をいとわなかった仲間たちに心より感謝している。第二に、日本の衛生さは世界有数のレベルで、社会秩序が整い、街の建設にも人間味があり、空間は有効に利用され、建築の色調も明るく、心も奮い立つ。ゴミ回収制度は社会の力を使ってゴミ問題を解決するものであり、これこそ良き社会の良き制度であり、社会学の応用する領域および中国と日本の間にある大きな格差を見せつけるものである。京都の街角の日本の政党ポスターも興味深く、大阪へ行く車中では、日本国憲法第9条に関する標語を水田の中に見て、これこそまさに実践の気風であると感じた次第である。第三に、最も重要な仕事、つまりはワークショップについては、その流れは非常に緻密で、各人の報告だけでなく、専門的なコメントと最後の総括は、我々全員に自身の研究の至らない点を認識させてくれた。私の場合を例にとると、宅担村の地理や人口についての記述不足、村落全体の政治資本・経済資本・教育資本に関するロジックの説明が系統だっていなかった。私のコメンテータであった阿部友香博士にはひととき感謝している。彼女の緻密さは私が及ぶものではなく、彼女の分析方法は牛を解体する如くで、彼女の意見は大変的を射ており、私の研究をさらにブラッシュアップするにあたって、大変有益な助言だと感じた。私はまた落合恵美子教授にも篤く感謝の意を表したい。彼女も私の研究についてご指導くださり、中国の世界観からのみ世界を見ることをせず、視野を拡げるようにとご指導くださった。これは極めて重要なことである。第四に、大阪の民族学博物館の建設、管理、運営には同様に日本の精神が顕われていた。まず、屋内環境の水準は極めて高く、マイナスイオンが他の所よりも多いように感じた。次に、世界の各文明圏、文化圏、国、民族についての研究は、大小にかかわらず、細大漏らさず取り扱われており、我々は太平洋、東アジア、中東、アフリカ館で、よく知っている物も、よく知らない物も、その展示物を見ることができた。世界は広く、多元的であり、美しい、というのが私の基本的な感想である。中国紹介のブースでは、まるで歴代の漢服を見たことがないかのようであったが(覚え間違いしているだろうか)、中国のその他の兄弟民族の文化に関する展示はとても細かく、自分の中国理解が深まった。民族学博物館では、「日本は単一民族国家ではない」ということをついに自分の耳で確認した。私はこれは非常にすばらしい思想であると思う。日本の国土に住んでいる人はすべて日本人であるという考え方に、私は感心した。中国も現在の民族政策を一度反省しなければならず、現在の民族政策は多くの曖昧な民族の境界を作り出しており、これは中国の今後の発展に対しては不利に働くだろう。我々はこの点

について日本から学ぶべきだ。以上の4点のすべては、日本の高度な人文精神の体现であり、なおかつこれらの精神は現在の中国が切実に必要としているものであると思う。そして、これらの点は、自分が軽薄すぎないだろうか、恒心をもって一つの事に専念しない限りこのように高度なレベルにいたることは到底無理だとあきらめてはいないだろうか、と深く反省させてくれたし、このような落差は私の今後の動力源となるだろう。

巨大な人工島である関西国際空港から上海浦東空港へ帰り着くと、上海には日本の水準からかけ離れているところが多いことに気付いた。たとえば、空港の安全検査所の防疫宣伝チラシの種類、数量を比べると、上海ではほとんどないのに、日本では少なくとも15種類以上（具体的な数は覚えていないが）あり、さらにすべて色別に表示されていた。職員の勤務態度も比べ物にならず、少なくとも私は自分の国の職員がにこやかに迎えてくれるかと期待したが、失望するだけだった（もちろん、一部の中国人職員がこのようにしているだけである）。今回日本へ行き、中国側の院生の議論を基に総括すると、生活のことか研究教育のことかに関らず大いに益するところがあった。中国の立場に立つと、日本を中国現代化プロセスの良師として、いかにして伝統と現代の間で平衡を保つかを学ぶべきであり、日本屈指の京都大学の諸姉諸兄は、学び追随すべき我々の永遠の模範なのである。

改めてすべての仲間と念入りのスケジュールに感謝したい。

柴向南 2013年10月25日 中国南京にて

（翻訳：中山大将、巫覡）

謝辞

京都エラスムス計画の南京派遣がなければ今回のワークショップも、この報告書もあり得ない。南京派遣を企画してくださった平田昌司教授（京都大学大学院文学研究科）にまず何よりも感謝の意を表したい。さらに平田教授には、今回京都アジア研究教育ユニットから支援をいただく際に、格別のご配慮をいただいた。また、同じく京都エラスムス計画および京都アジア研究教育ユニットの運営に深く関り、我々の活動にいつも深い理解を示していただいている落合恵美子教授（京都大学大学院文学研究科）にも同様に感謝の意を重ねて表したい。今回のワークショップの総括において我々の趣意に教授が賛意を示してくださったことに、我々一同深く感激した次第である。

南京大学社会学院の張玉林教授には、京都エラスムス計画以来大変なご助力をいただき続けている。国家間の緊張関係などものともせず、我々の交流が続けられるのも、ご自身が京大留学経験を持つ張教授と京大との厚い信頼関係のおかげである。張先生のおかげでワークショップの南京大側の参加希望者を募ったところ、旅費を京大から提供できる3名だけでなく、私費を投じてまで参加を希望する院生が2名もいたことは我々の驚きであり、喜びであった。

当日に通訳を担当してくれた、福谷、巫の読書会仲間である留学生院生、林子博さん、姜海日さん、張語涵さんにも厚くお礼を申し上げたい。彼らの見事な活躍なくしては、この交流は成立しなかったからである。この3名が通訳のみでの参加となったことは何とも心苦しかったが、今後はぜひこの交流の中心的役割を担っていただきたい。コメンテーターを引き受けていただいた方々は、中山の京大時代および北大時代にわたり共同研究や研究会で知り合った方や、元・同僚である。こうした方々と再度仕事ができることは何よりの光栄であった。また、異色のワークショップにも関わらず快く参加を引き受けてくださった皆様には心より感謝申し上げます。

ワークショップ翌日の国立民族学博物館見学は、南京大の院生にも大きな刺激になったほか、ワークショップとは異なる形で若手間の交流が進む場ともなった。ご協力いただいた同館の河合洋尚・助教、今中崇文・外来研究員には感謝申し上げます。また、諸事務手続きや、会場の準備、報告書発行でお世話になった左海・事務員にもこの場を借りてお礼を申しあげておきたい。

今回の京大での開催にあたって反省点も少なくはない。こうした企画に不慣れなため平田教授を始めとした関係各位には大きな迷惑をかけた。また、様々な理由により当日も予定通りの進行ができなかったし、通訳にも過大な負担をかけてしまった。ワークショップや報告書作成において形だけの交流にならず、双方が全力を出し合えたことは何よりの成果である。しかし、その余りに、報告時間や、報告論文の分量や締め切りを大幅に超過する場合も少なくなかった。こうした逸脱行為は若手であるが故の未熟さではあるが、ルールを遵守している他の参加者への背信行為であり、交流のためのコストを無駄に肥大化させ、円滑な交流を阻害するものであり、今後の自身の研究者生活においても信用を失墜する行為であるということは各人とも肝に銘じるべきであろう。本ワークショップはまだまだ発展過程であり、なおかつ若手が企画運営を担っており不備も多い。しかし、だからこそ既成の国際学術交流ではできない、若手研究者の需要に応じた実験的な試みもできるはずである。より多くの若手研究者が今後もこの交流に参画してくれることを心より願っている。

福谷彬 中山大將 巫靚
2013年12月1日

谢辞

没有京都伊拉斯谟计划,就不会有本次的论坛,更不会有现在的这份报告书。我们首先借此向策划南京派遣项目的平田昌司教授(京都大学研究生院文学研究科)表示衷心的感谢。另外,在京都亚洲研究教育机构(KYOTO UNIVERSITY ASIAN STUDIES UNIT)对本次论坛进行资金援助方面,平田教授也亲力亲为,给予了我们很多帮助。同样,我们还要向给予我们活动最大理解,并在京都伊拉斯谟计划以及京都亚洲研究教育机构起核心作用的落合惠美子教授(京都大学研究生院文学研究科)表示深深的谢意。这次的活动正是在两位教授的赞同以及协力之下才得以成功。

而南京大学方面,我们要向一直协助我们活动的南京大学社会学院张玉林教授表示感谢。即使是在中日两国政治局势紧张之时,依旧能够支持我们的活动,这在很大程度上是得益于张玉林老师自身的京大留学经验,以及由此产生的与京大深厚的信赖关系。在张玉林老师的帮助下,参与本次论坛的南大方面研究生,除京大提供经费的3名同学外,还有2名自费参加的同学。有这么多名同学积极地参与我们的活动,我们也由衷地感到高兴。

另外,我们还要向担任此次论坛翻译的中国留学生林子博、姜海日、张语涵同学表示感谢。没有他们的帮助,这次的交流也不会成功。对于这3位同学来说,只当现场翻译实在有些大材小用,在今后的活动中,我们也希望他们能在论坛上关于自己的研究与其他人得到交流。担任本次论坛点评人的诸位都是中山京大时期以及北海道大学时期在共同研究以及研究会上认识的朋友以及(原)同事。虽说这之中有很多人参与本次论坛参与者的研究领域相差较大,但大家都爽快地答应,对此中山由衷地表示感谢。

论坛第二天,我们带南大的同学们参观了国立民族学博物馆。从同学们的反应看来,这也成为论坛之外促进年轻研究者交流的一个场所。我们对协助参观的博物馆助教河合洋尚先生以及外来研究员今中崇文先生表示感谢。最后,我们还要向论坛的手续、会场准备、报告书发行等诸多方面给予我们很多帮助的左海女士表示感谢。

经过了本次的论坛,我们同时也发现了很多需要反省的地方。由于是初次独立进行论坛的策划,在很多方面给平田教授以及其他老师平添了麻烦,并且由于种种原因当天论坛的讨论并没有按照预定的时间进行,这也给现场翻译的同学增加了很多负担。我们认为论坛以及报告书并非一个形式上的交流,而是双方共同努力的过程才最重要,然而有些同学在报告的时间以及报告论文的字数和交稿日期方面都大幅度超过了论坛规定的限度,这对遵守规定的其他报告者而言就是一种背信的行为,并在无形中使得交流的成本肥大化,阻碍了交流的进行。

我们的论坛还在发展之中,又因为是由年轻学者进行企划和运营,因此难免会有诸多不备。但也正因如此,我们的交流才体现了既成的国际学术交流中所体现不出的,能够应对年轻学者需要的实验性成果。我们衷心希望在今后的交流中更多年轻学者的参与。

福谷彬 中山大将 巫靓

2013年12月1日

— 執筆者 执笔者 Authors —

福谷 彬

福谷 彬
FUKUTANI Akira

京都大学大学院文学研究科博士後期課程 * 本企画代表者

京都大学大学院文学研究科博士研究生 * 本论坛代表

Doctoral Course Student, Graduate School of Letters, Kyoto University

马 岚

馬 嵐
MA Lan

南京大学社会学院人类学专攻博士課程, 江蘇省社会科学院助理研究員

南京大学社会学院人类学所博士研究生, 江苏省社会科学院助理研究員

Doctoral Course Student, School of Social and Behavioral Science, Nanjing University

中山 大將

中山大將
NAKAYAMA Taisho

北海道大学スラブ研究センター・日本学術振興会特別研究員 PD/京都大学博士(農学)

北海道大学斯拉夫研究中心 日本学术振兴会特別研究員 PD/京都大学博士(农学)

JSPS Researcher, Slavic Research Center, Hokkaido University/ Dr of Agricultural Science

柴 向南

柴 向南
CHAI Xiangnan

南京大学社会学院社会学院專攻修士課程

南京大学社会学院社会学系硕士研究生

Master Course Student, School of Social and Behavioral Science, Nanjing University

吴 天跃

吳 天躍
WU Tianyue

南京大学社会学院人类学專攻修士課程修了(中国中央美术学院人文学院文化遺產專攻博士課程在学)

南京大学社会学院人类学所硕士毕业生。现为中央美术学院人文学院文化遺產系博士研究生。

Doctoral Course Student, School of Social and Behavioral Science, Nanjing University

櫻田 涼子

櫻田 涼子
SAKURADA Ryoko

育英短期大学講師/博士(文学)

育英短期大学讲师/博士(文学)

Lecturer, IKUEI Junior College/ Dr of Letters

方 莉琳

方 莉琳
FANG Lilin

南京大学社会学院社会学院專攻修士課程

南京大学社会学院社会学系硕士研究生

Master Course Student, School of Social and Behavioral Science, Nanjing University

松谷 実のり

松谷 実
MATSUTANI Minori

京都大学大学院文学研究科博士後期課程

京都大学大学院文学研究科博士研究生

Doctoral Course Student, Graduate School of Letters, Kyoto University

聂 伟

聶 偉
NIE Wei

南京大学社会学院社会学院專攻博士課程

南京大学社会学院社会学系博士研究生

Doctoral Course Student, School of Social and Behavioral Science, Nanjing University

— 司会 主持人 Chair man —

巫 靚 巫 靚
WU Liang

京都大学大学院人間・環境科学研究科修士課程
京都大学大学院人間環境科学研究科硕士研究生

Master Course Student, Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

— コメンテーター 点评人 Discussants —

福田 宏 福田 宏
FUKUDA Hiroshi

京都大学地域研究統合情報センター 助教／博士(北海道大学・法学)
京都大学地域研究統合情報センター助教／博士(北海道大学 法学)

Assistant professor, Center for Integrated Area Studies, Kyoto University

阿部 友香 阿部 友香
ABE Yuka

京都大学大学院文学研究科博士後期課程
京都大学大学院文学研究科博士研究生

Doctoral Course Student, Graduate School of Letters, Kyoto University

猪股 祐介 猪股 祐介
INOMATA Yusuke

京都大学アジア研究教育ユニット 研究員
京都大学亚洲研究教育中心研究员

Researcher, Kyoto University Asian Studies Unit

今中 崇文 今中 崇文
IMANAKA Takafumi

国立民族学博物館 外来研究員

日本国立民族学博物館 外来研究員

Visiting Researcher, National Museum of Ethnology

瀬戸 徐 映里奈 瀬戸 徐 映里奈
SETO SEO Erina

京都大学大学院農学研究科博士後期課程
京都大学大学院農学研究科博士研究生

Doctoral Course Student, Graduate School of Agriculture, Kyoto University

— 通訳 口译 Interpreter —

林子博 林子博
LIN Zibo

京都大学大学院教育学研究科博士課程
京都大学大学院教育学研究科博士研究生

Doctoral Course Student, Graduate School of Education, Kyoto University

姜 海日 姜 海日
JIANG Hairi

京都大学大学院人間・環境科学研究科博士課程
京都大学大学院人間環境科学研究科博士研究生

Master Course Student, Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

張 語涵 张 语涵
ZHANG Yuhan

京都大学大学院教育学研究科修士課程
京都大学大学院教育学研究科硕士研究生

Master Course Student, Graduate School of Education, Kyoto University

本報告論文集の発刊にあたっては、京都大学アジア研究教育ユニットからの助成を受けた。

本报告书的发刊受到京都大学亚洲研究教育机构（Kyoto University Asian Studies Unit）的资金支持。

京都大学アジア研究教育ユニット 報告書 3

2013 年度

京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ報告論文集

Web 公開版

編集 福谷彬・中山大将・巫靚

発行日 2014 年 3 月 31 日

発行者 落合恵美子・平田昌司（京都大学大学院文学研究科教授）

発行 〒606 - 8501 京都府京都市左京区吉田本町

京都大学アジア研究教育ユニット
